川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十二年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇〇二号

日川協加盟

通巻1000号記念川柳大会

No. 1002

十一月号

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個　人　一口1/9頁　二、〇〇〇円
　　1/6頁　三、〇〇〇円
（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団　体　次の四種といたします。
①1/3頁　六、〇〇〇円　③2/3頁　一二、〇〇〇円
②半頁　九、〇〇〇円　④一頁　一八、〇〇〇円

▼原稿締切　11月23日

〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル　201号室
TEL 06―6779―3490
川柳塔社

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限ります。
■締切　11月23日（本社事務所宛）

お知らせ

寒い季節の本社句会の開催時間を、午後一時から五時までとします。締切りは二時。

平成二十二年（二〇一〇年）
十一月五日（金）アウィーナ大阪
十二月七日（火）アウィーナ大阪

平成二十三年（二〇一一年）
一月七日（金）アウィーナ大阪
二月四日（金）アウィーナ大阪
三月七日（月）アウィーナ大阪

おのみち文学室から

小島蘭幸

小島蘭幸主幹

十月七日、私は麻生路郎先生のふるさと、尾道千光寺公園にある路郎先生ご夫妻の文学碑に通巻一〇〇〇号のご報告をしました。記念大会の前にという思いに急かされて…。路郎先生にお会いしたことのない私には正に文学碑は路郎先生なのです。路郎先生の書物、写真、短冊等が展示されている文学室からは美しい尾道水道と幼少時代を過ごされた向島を見る事が出来ます。向島の景色の中に川柳雑誌を創刊された路郎先生、葭乃奥様、歴代の川柳塔社主幹のお顔が走馬灯のように浮かんで来ました。情熱のバトン、命のバトンを繋いで繋いでの一〇〇〇号だと思うと胸が熱くなりました。

十月九日に開催しました川柳雑誌・川柳塔通巻一〇〇〇号記念川柳大会は、五一七名のご参加を得て盛会裡に終わる事が出来ました。貴重な秋の一日を全国各地からご出席下さいました川柳のお仲間の皆様に厚く御礼を申し上げます。懇親宴も盛況でとても和やかでした。午前中の同人総会で伝統ある川柳塔社の主幹を拝命した私には、目に映るもの全てが新鮮で温かいものでした。それだけに責任の重さを緊緊と感じているところです。

「路郎と薫風―牽引車の火と継承者の灯」と題した、木津川計先生のおはなしは見事でした。川柳雑誌創刊の経緯、路郎先生の精神、情熱、葭乃奥様のお心、路郎先生と薫風先生の師弟愛…。切れ味鋭いお話に私の掌はいつの間にかしっとりと熱を帯びていました。会場の騒めきを最初の一言で笑いに変えるつかみの巧さからアッという間の一時間でした。

記念大会の前夜、楓楽理事長と共に全日本川柳協会会長の大野風柳先生と会食の機会を得ました。そのお話の中で私は礼節の大切さを痛感致しました。楽しいお酒でした。

今、私の掌には同人柴原道夫氏が東奔西走して編集された、「麻生路郎読本」があります。歴史の重みのこの一冊の本と、同人・誌友の方々と共に一歩ずつ歩もうと思います。

座右の句
寝転べば畳一帖ふさぐのみ　（路郎）
私の句
父の日も特に変った事もなし　藤本　直（ちょく）

川柳塔　十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「丹波の秋」

■巻頭言　おのみち文学室から……小島蘭幸：（1）
グレゴリー・ペレルマン……新家完司：（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選：（4）
川柳塔の川柳讃歌(71)……木津川　計：（47）
自選集……（48）
温故知新……（51）
水煙抄……西出楓楽選：（52）
第16回　川柳塔まつり……（74）
川柳雑誌・川柳塔通巻一〇〇〇号記念川柳大会
同人総会・おはなし・各賞表彰・記念句会・懇親宴
誹風柳多留一一篇研究　63……（104）
麻生路郎句抄……（106）

グレゴリー・ペレルマン

新家完司

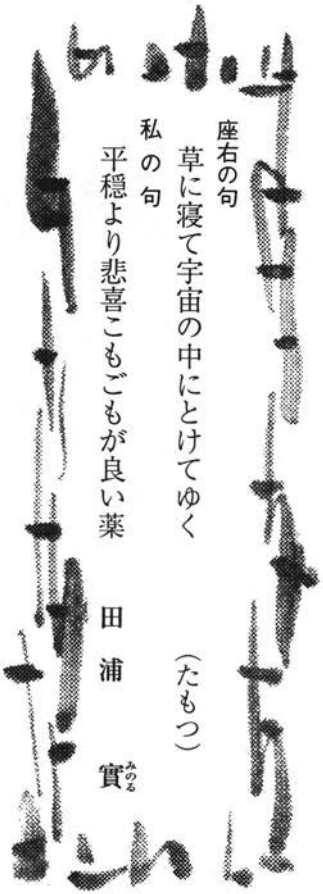
数学を趣味にしている人が稀にいる。疲れたときや、ストレスが溜まったときに問題集を開き、難問を解くとスッキリするのだという。そして、巧みな問題を考え出した相手に尊敬の念を抱き、握手をしたくなるほどの共感を覚えるというのである。言語の壁を超えた世界共通の数式がもつ連帯感なのだろう。

微積分など忘却の彼方である私には、理解しがたい領域である。が、権謀術数が通じない世界の清々しさは、少しは推定できる。

顕著な業績をあげた四十歳以下の数学者に授与される賞として「フィールズ賞」がある。ノーベル賞に数学賞がないことから、カナダ人数学者ジョン・チャールズ・フィールズの提唱によって一九三六年に作られた賞で、「数学のノーベル賞」といわれている。

ロシアの数学者、グレゴリー・ペレルマン（一九六六年生まれ）も、数学の難問の一つ「ポアンカレー予想」を解決した功績を評価されて二〇〇六年に受賞した。が、「自分の証明が正しければ賞は必要ない」として、こ

追悼　相馬銀波さんを偲んで …… 斉藤　劦 …(107)
愛染帖 …… 新家完司選 …(108)
檸檬抄「ことさら」 …… 三宅保州・山本希久子共選 …(112)
ひとこと …… (井上じろう・北野哲男・小谷小雪・早川遡行) …(115)
一路集
「飽きる」 …… 三浦強一選 …(116)
「支度」 …… 牧野芳光選 …(116)
「ひっそり」 …… 徳山みつこ選 …(117)
初歩教室「ゲスト」 …… 鈴木公弘 …(118)
秀句鑑賞
同人吟 …… 都倉求芽 …(120)
水煙抄 …… 島　ひかる …(122)
各地柳壇（佳句地十選／吉田幸子） …(124)
柳界展望 …… (139)
十一月各地句会案内 …… (140)
■編集後記 …… 朱夏・冨美子・光久・能子 …(142)



座右の句
草に寝て宇宙の中にとけてゆく　（たもつ）

私の句
平穏より悲喜こもごもが良い薬　田浦　實（みのる）

れを辞退した。

そのニュースで、「人付き合いが苦手で、ほとんど人前に姿を見せない」という紹介があり、加えて、仙人のような風貌から、「付き合い難い偏屈者」という印象を持った。

アメリカのクレイ数学研究所も同じ功績を認め、今年三月に「ミレニアム賞」（副賞百万ドル）を授与したが、ペレルマンはこれも辞退した。

このときの辞退の理由は、「他にも実績をあげた人がいるのに、私だけ受賞するのは不公平である」と、伝えられている。母親の年金で細々と暮らしている男が、それだけの理由で、百万ドルを蹴ったのだ。

それは、私がイメージしていた偏屈などというものではなく、邪念の入り込む余地のない「数学」という世界に没頭してきた人の純粋性なのだろう。「人付き合いが苦手」というのもまた、清濁を併せ呑むことの出来ない潔癖性のせいであろう。そして、その純粋性、潔癖性から生じる言動は、損得勘定に毒された俗人には偏屈とか異常に見えるのだ。

世の中にはこのような人もいる。にんげんはまだまだ捨てたものではない。

川柳塔

河内天笑選

この猛暑ぶじ越えました仏さま
阿呆になる薬を呑みに畑へ出る
蚊よ蛸よ私に吸う血あるのかい
世代変わるとも受けた御恩は忘れない
句読点打った言葉に陽が当たる
風紋はそのまま砂の遺書となる

鳥取県　佐伯やえ

定年後まずは豆腐を切ってみる
評論家手柄話が終わらない
将来の夢を見つけたらしい顔
癌からの復帰ヒーロー・インタビュー
単純と単純　喧嘩ばかりする
パンクする一歩手前で今日も寝る

弘前市　髙瀬霜石

コンパクトに女力をもろてます
昼下がり雨が詩人にしてくれる
熱燗にまあまあまあと押し切られ

西宮市　西口いわを

デパートが唯一わたしの避暑地です
思考力ゼロのまんまで日が暮れる
無理なことしなかったから今がある

神戸市　両川無限

子育てを終えてペットを膝に抱く
人間の匂いに飽きて花を買う
シャネルよりシャボンの香る君が好き
野良犬が改札抜ける里の駅
無人駅あの子も風になったのか
虹追ってゆく少年の一輪車

松山市　宮尾みのり

ジェラシーも欲もあるから生きている
パソコンで私の過去が管理され
美談にされたことで人生狂わされ
くよくよは止そう生命線笑う
クランケが決断せよというカルテ
孤独死も想定内にある独り

鈴虫を買う釣銭が冷っこい
脱ぎ捨てるストッキングと世間様
ブランドの誇り亀の子タワシにも
お日様に言えないことを月に言う
ガラガラポン運は大きく使えとさ
破ったのは男　捨てたのは女

橿原市　居谷真理子

仮面みな脱いで独りの昼ごはん
塩辛い話が海の向うから
もみ消したはずの昨日とまた出合う
髪切れば手っ取り早く消える罪
標本の蝶は死ぬこと許されず
サイコロを振って出た目にまた迷う

松山市　髙橋宏臣

ニワトリもブタも私もバテてます
楢山は深く静かに町々に
あれそれで通じ合うから金婚だ
新さんまやめて赤魚買いました
札束を食べたことないマイポッケ
集中治療室に入りたいネ地球

羽曳野市　徳山みつこ

ヤキモチ妬くなんて可愛いおばあちゃん
欠点の三つ四つはあたたか味
六十九小さく狼煙あげている

藤井寺市　太田扶美代

菜食主義ちょっと弱気になってきた
傷だらけでも腐ってはおりません
おしおきのような痛みに耐えている

海南市　堂上泰女

目的を無くした風がピタリ凪ぐ
自己評価それは他人が決めるもの
私のプライバシーに触れないで
脚色をされて噂は飛散する
誉められて油断してたら先越され
高潔な人柄同性が惚れる

熊本市　永田俊子

その人を傷つけるから貝になる
その先を言えば火がつくアンダンテ
ボールペンも心も枯れてゆく旅路
美しい嘘かも知れぬコマーシャル
知らぬ人ばかりになった古里よ
泳いでた川が私を呼んでいる

鳥取市　深澤千恵子

懸命に生きて品格できてくる
ゆっくりとテンポを合わす夫婦道
何事もないのが良いと後で知る
学校のルールが縛る子の未来
お付合いつかず離れぬ距離が良い
敗けて知る痛みが人を強くする

松山市　古手川　光

阿波おどりよさこい伊予は野球拳
日本語壊す片棒担ぐコマーシャル
甦れ龍馬日本を託したい
地球は温暖化社会は寒冷化
成仏もさせてはもらえない長寿
一隅も照らすことなく終りそう

大阪市　谷口　義

おばあさんの取扱説明書
とりあえず生きているので顔洗う
ラストダンスどころではなくなるだろう
ご破算で願う一日の始まり
浄土真宗だから帰りますという
湿疹のことに詳しい友がいる

大阪市　升成　好

奇跡より努力と胸に刻むべし
大抵はやる気があれば片がつく
カビ掃除だんだん意地になって拭く
あきらめぬ人に手を貸す徳俵
夫婦ではないな男がよく喋る
食べ頃を知らす西瓜の音と艶

豊中市　安藤　寿美子

七人の家族でいたが今ひとり
年一度生前葬で皆集め
せんならんと思うばかりでせぬ掃除
ほっといてくれと婆さん意地を張り
賞金はなくて賞状だけだった
金かかるお話私遠慮する

愛知県　早川　遡行

恵まれた身体に職がありません
クラス会みんな上手に化けてくる
真剣になって悩んでいる脱け毛
人並に人を愛した恋もした
高過ぎて好きなサンマに手が出ない
台風のあとの楽しみ栗拾い

大阪市　榎本　日の出

上げたいが使い古しのこの臓器
ペンと紙持ってこの世を楽しもう
見栄という衣を脱いで軽く生き
よく転ぶおっちょこちょいが直らない
隠すこと何にもなくて皆喋り
おばちゃんが貝になったら元気ない

鳥取市　倉益　一瑶

仏壇の前で傷口舐めている
干涸びた影がわたしについて来る
水かきが破れて溺れそうになる
噂話利息がついて風に乗り
心棒がポッキリ折れた低気圧
色あせた花でも笑顔美しい

鳥取市　岸本宏章

トラ一途六十年を自慢する
ワンパターンのドラマが好きな日本人
それぞれの持ち味残しおでん煮え
走り書き残して妻は忙しい
円高で儲けた人はおとなしい
赤ちゃんの泣き声聞けぬ町になり

藤井寺市　鴨谷瑠美子

歌をたくさんうたった後の早い秋
貝よりも深く眠った人魚姫
なよなよとコスモス調で生きようか
ゆるやかな坂道ゆるく昏れてゆく
釣り人も川面も秋のシルエット
夏終る吊したままの一張羅

羽曳野市　三好専平

泣いたって何も変わらんけれど泣く
手に余る診察券に支えられ
百歳の誇り崩れてゆく日本
守宮まで厨這ってるこの暑さ
目も耳もとても口にはかなわない
ゼニばかり持って卑屈な国になり

川西市　西内朋月

白内障オペ見えたのは初めだけ
若武者が完封をしたタイガース
効きそうな気がして飲んでいるサプリ
鏡かて気にしてくれている天辺
そろそろと輪から抜けだす風当り
最初から決めてはいない休肝日

鳥取市　近藤佳子

若き日の未完の恋に似る花火
大花火届かぬ慕情炸裂す
底晒しダムが雨乞いする猛暑
初盆を待っててくれた友の墓
坪庭の茗荷を盆の仏前に
風ひかり浴び生かされる仕合わせよ

堺市　村上玄也

遠花火音がしばらくして届き
始めから予定されてるアンコール
客席を促し手拍子とらす歌手
よう言うてくれたと苦言聞き入れる
今やもうあなたと呼んでくれぬ妻
老い進むほどにシンプルイズベスト

八尾市　髙杉千歩

まだ少し生きる自信で猛暑耐え
料理酒で納得してる舌音痴
カーナビを無視してやっと辿りつき
長寿電球私の方が持ちません
ヘルパーさんに喋ると日誌につけられる
たこやきを三つ売ってとおばあさん

三田市　北野哲男

朝一に茶柱多い番茶淹れ
定年になって世間の時給知る
理性より気力体力要る我慢
念押せば語調の変る反抗期
旅三日体重計は震度四
譲られた席で老人らしくする

京都市　高島啓子

真四角の隅は丸みをつけておく
切り株の脇から生えてくるいのち
小波の下の謀叛に気がつかぬ
後ろ指ぼんのくぼから発火する
結論を迫る薬缶の湯が滾る
至らないふたり乾いた咳をする

堺市　加島由一

スーパーのそろいすぎてる茄子胡瓜
ストレスを癒す女将の里なまり
通ぶって高い地酒を飲まされる
だんじりを見上げてぐいと発泡酒
出る杭は打たれ人生横並び
糖尿の主人と犬も歩かされ

美作市　大石あすなろ

ときめきをくれた出会いよありがとう
ほどのよい距離でふたりは響き合う
空想をかき消すようにチャイム鳴る
体重計と約束をしてしまう
秋が来て俄詩人になりすます
一日の縮図を乗せて終電車

和歌山市　福本英子

義理欠いています猛暑を生きてます
どうにでもなる血圧計持っている
バリアフリーにしてから手足怠けだす
補聴器を捜してるのによく聞こえ
音信不通三十年は親不孝
猛暑煽った蝉の死骸が馬鹿らしい

橿原市　安土理恵

まちがえた気がしてならぬ選択肢
時どきでいいの聞かせてほしい声
ページワンこの一枚がわたしです
ジャムになるいちじく何か言うている
何となく買った秋色の便箋
再生品ですとロール紙誇らしい

米子市　吉田陽子

一夏を燃えたTシャツありがとう
そうめんが向かなくなった朝の冷え
お隣とすき間を埋める立話
恥をかく明日への投資だと思う
いつ皿を割ろうかマグマ煮えている
想像は無限わたしを枯れさせぬ

枚方市　海老池　洋

過疎守りあせもに耐えてきた老母
白骨にも年金を出す長寿国
光るだけ光りホタルの尊厳死
踏まないで欲しいしょげてる影法師
平和だな夕焼け空が美しい
コスモスの道ゆっくりと車椅子

鳥取県　山下節子

墓地買って余生の終り定めます
ライバルにゃ見られたくない悔やし泣き
負けて泣き勝っても泣いた甲子園
嘘一つ隠し他人の顔になる
優秀なＤＮＡの婿探す
履歴書に自分をさらし就活す

東大阪市　佐々木満作

歳時記を狂わす地球温暖化
災害にほどがない恐ろしさ
生きてきた証拠に何か残さねば
人間のしがらみあの世まで続く
古希過ぎて百歳までの青写真
輪唱に不協和音の僕の声

田辺市　岡本昇

枝豆はビールが無いとただの豆
Ｕ型の胡瓜は牛の鼻ピアス
大根は嫁に行く日もスッピンで
里芋は子ども手当で家を建て
お行儀の良さは負けないなんばきび
究極の紫色は茄子だろう

東かがわ市　清川玲子

苦労したんだ言葉の端に味がある
アルプスの水で豊かなティータイム
あらためて日本人だと思うお茶
ディズニーランド娘一家の夏休み
ジェットコースター心臓から声が出る
夏休みの研究親の知恵くらべ

羽曳野市　酒井一壺

そこまでと送って行って帰らない
手作りと言う真心のプレゼント
好きなだけ遊びなさいと叱られる
目に見えぬ神の怒りを噛みしめる
バーゲンへ漁る女のスリル感
ケータイの範囲夫を放し飼い

大阪市　板東倫子

旬九月秋刀魚一匹三百円
端然と乱れぬ男名は「イチロー」
夢で見よう紅葉の寺と仏さま
やすらぎは孵化した子亀送る朝
呪われたとしか思えない世の姿
褒めるのも叱るのも良し愛あれば

大阪府　米澤俶子

いつまでも若くないよと丸い影
冷房の部屋で聞いてる虫の声
意義悪い言葉はいつも女偏
当分はいけると医者のお墨つき
医学書の指摘が全部あてはまる
もう我慢しなくていいよ鳳仙花

堺市　遠山唯教

名月が自信に満ちて冴えている
ひまわりが強い性根で空仰ぐ
寄り道でストレスすべて脱ぎすてる
無理をせず人に好かれて歳をとる
リベンジの握手にのこるさわやかさ
六Bで答えを書いて迷わない

唐津市　樋口輝夫

饒舌のうらに彼女の無知が見え
絵馬堂の裏に叶わぬ札の山
無理と無駄無くして生きる姑の知恵
数珠と杖金婚夫婦の記念品
借金はしない人にも貸さぬ主義
白鵬が君が代歌う名古屋場所

堺市　大隅克博

まごころは人の心を動かせる
まけてまで売らんと言われ買うはめに
ひとつだけ空いてる席に行く勇気
高気圧そないがんばらんでいいよ
秒針と同じ速さで脈が打つ
お気持で結構ですに悩んでる

姫路市　古川奮水

子が来ると朝から御萩こしらえる
スキップを見せる年長幼稚園
相槌を打って聞き出す屋根の猫
理由ありの西瓜甘さは引け目なし
鳴き砂の白砂青松守りましょう
舗装した小川ドジョウのすみか消え

阪南市　森村美花

澄んだ空がすべてを洗う里帰り
里の秋歌う貴女の目は童女
無理ならいいよ優しく言われ引き受ける
お月さま私の悩み見えますか
頬染めた人が今では小煩い
病気よりましや悪態つく方が

三田市　臼井二英

川柳で自我の哲学気付かされ
恥ずかしいこと思いつき照れている
吸わないがどうも分からんタバコ税
独占の路線運賃高いなあ
肉親の生死ほんまに知らんのか
年金をネコババしてて平気なの

シドニー　坂上のり子

政治家がこねて壊していく日本
資源を探り合う世の中を残る意地
人になって還るんじゃないと猫送る
マリちゃんと遺灰の箱にそっと呼ぶ
したい事こんなにあって未だ迷う

札幌市　三浦強一

満腹であればよかった芋かぼちゃ
人脈のこんなところで枝分れ
一人より独りが怖い無縁都市
息子より優しかったんです詐欺師
自分史は脚色をして膨らませ

札幌市　小沢淳

箸二膳並ぶ仕合せ忘れがち
特老の介護現場は背にも目
こんなにも安くついたか二日酔
馬鹿になるこれが馬鹿では出来ぬこと
友からの誘い逃げてる空財布

弘前市　福士慕情

日曜は混むから行かぬ映画館
願い事アッで終った流れ星
星空が事故の真相知っている
声高に言うから誤解されている
血圧が血糖値がとしたり顔

弘前市　今愁女

暑いから逆手をとったいも煮会
七十路もショートパンツでいる暑さ
朝顔の屋根まで延びて日覆いに
ヘチマコロン懐かしい名の化粧水
烏瓜妖しくもつれ咲く夕べ

弘前市　髙橋岳水

祈らずにおられぬ小児癌病棟
生と死の谷間に飛ばす千羽鶴
陽の当る場所へ孤独を捨てに行く
戦列を抜けた男の認知症
平凡に生きた武骨な手を洗う

弘前市　岡本花匠

起き掛けの水ゴクリとのんで永らえる
足湯して炎暑に対処身を守る
検診の異常なしにはえっ本当
梅干しの種子胚を噛む欲ごころ
残暑続き生物異常疼く秋

弘前市　須郷井蛙

有難い雨雑草も待っていた
結核でなかった咳でホッとする
総理交代ギネスブックになるだろう
清貧にいても陽気な妻だった
脳天にバリバリ響く歯の治療

黒石市　佐藤古拙

根っからの商い好きで水を打つ
睨めっこ草食系はすぐ笑う
大根を抜く女房の太い足
蟻地獄地球の呻き声をきく
農を継ぐ倅は知らぬむしろ旗

黒石市　相馬一花

遠慮なくどんどん飲めぬ只の酒
臨終の声にむっくり起き上がる
金持も貧乏人も買うティッシュ
髪買う金があったら飲み捲る
行列を見るとひとまず並ぶ癖

青森県　松山芳生

寝たきりの父の商い継ぐ昭和
形状記憶いつも背中に父母がいる
一筋の汗が滲んでいく　いのち
開口一番笑顔を添えておめでとう
車椅子と会話をしたいおじぎ草

平川市　小寺花峯

夕立にひさし借りてる縄暖簾
密談の話しが溶ける狸そば
回復期左手チョコにそっと触れ
昭和史は辛い甘さのサッカリン
後期高齢笑顔で耐えた深い皺

さいたま市　星野育子

猛暑が続き出無精の夏太り
箸使いきれいで涼し冷奴
世の中に何もしないと言う罪も
書道も俳句も何故だか甲子園
仕事に上下あり人に上下無し

八王子市　播本充子

天高く阿呆陀羅経が風に乗り
新米の艶が仏を喜ばせ
真心を込めパソコンで書く手紙
会社ではお荷物だった楽天家
骨太の夫も順調に老いる

東京都　岸野あやめ

秋祭お顔のわりに渋い寄付
のほほんと見せているけど火の車
暢気さを見かねた人が世話を焼き
狡いことみんな見ていたダルマの眼
やりくりがたった一つの主婦の芸

川崎市　三浦きぬ

夢で会う亡母は割烹着の笑顔
浄土には恋し懐かし顔々々
想い出は幼き頃の母の胸
ポストにはやっぱり赤がよく似合う
寝つかれず庭の千草を口ずさむ

臓移植愛の命が蘇生され
マンションの木陰に老いの指定席
風化せぬ御巣鷹山の懺悔録
昼だけは外で食べてと言われてる
蛍光灯替える脚立にでためまい

横浜市　小野句多留

一匹のさんまも食えぬ秋迎え
庭石を誉めて廊下で茶を出され
遺伝子の鎖なかなか断ち切れぬ
野次馬が業を煮やして取り仕切る
気が向くと五目並べを誘う妻

横浜市　菊地政勝

一〇〇〇へ船出してゆく乗船者
風を読み雲と話して船出する
煩悩にゆれる人間弱きもの
故郷の山河良薬だと思う
点滴をしたこと妻は口にせず

富山市　島ひかる

うわついた物見祇園に断られ
住職の法話が弾む布施の額
文無しと解ればプイと横向かれ
庶民など心に留めぬ党首選
めでたい日腹を立てない事にする

静岡県　薗田獏沓

千円の床屋で男磨きあげ
ご馳走の後は御飯に香の物
遠慮して掴みそこねた良い話
サンマまで不漁となればまた豆腐
そのうちがいつのことやら食事会

可児市　板山まみ子

クーラーに命託した夏ごもり
メダカにも氷を入れてやる炎暑
順調におなかのすいてくる猛暑
避暑に来て花の伊吹に生き返り
郡上節踊り納めの阿呆になり

犬山市　金子美千代

旅行誌をめくればどこも青い空
子を叱る勢いのまま出る電話
飲みっぷり婿に負かされ静かなり
欲しいのにティッシュ飛ばして渡される
校則も足のマニキュアまで追わず

犬山市　関本かつ子

前向きが取り柄どうした夏バテか
天目指す夢へ道草させてやり
友引の寺がライブの音頭とり
共稼ぎパパひとりだち炊事番
腹よじれるほどに発散した旅路

犬山市　吉田幸子

好きな名前思い出しては書いている
居酒屋にたっぷり愚痴を置いてくる
菊香展競り合う顔に草臥れる
いざという自分の動き恐ろしい
鳩尾の我慢が弛み困ってる

京都市　坪井孝一

猛暑から甘いブドウのプレゼント
期待した雨ゴロゴロの音だけで
やっと雨花も野菜も生きかえる
我が家には鬼を一匹飼っている
暑い庭にサルスベリだけ元気なり

京都市　西村益子

もう少し家族の傘でいるつもり
思い出になった家族は美しい
マージャンの好きな家族で飴も賭け
父の素顔一番知らぬのは家族
家族いる煩わしさも楽しみも

京都市　桝本宏子

メタボだけで分類されて負け組に
大阪にはロマンたっぷりタイガース
老境は惚けを決め手に生き上手
沈黙の空気に負けて口を割る
沈黙の我慢比べは妻の勝ち

京都市　藤井文代

値上げせずこっそり減らす飴の数
センサーが僕の湯加減知っている
怠けたらあかん自分に鞭を打つ
呆けぬよう重箱の隅つつき合う
千秋の思いで待って不採用

京都市　三宅満子

健康のモデル深山の仙人か
ありがとうから次々にありがとう
猛暑ならここぞ達者に汗をかく
切開は孫誕生の日が選べ（帝王切開の力）
元気とは今日の身体に明日の夢

亀岡市　井上森生

病名を疑いながらきいている
無言劇避けて謝ることにする
手抜きにはバレぬひと手間かけておく
責任を感じしゃっくり止まらない
手の届きそうな星空独り占め

長岡京市　山田葉子

雲悠ゆうコスモスもみな見とれてる
ハイハイと妻の話はちゃんと聞く
飲みこんだ本音が消化悪くする
酷暑続きでこけしの汗も拭いてやる
まだ生きているよと友のハガキくる

大阪市　吉村一風

大阪市　神夏磯　典子

露草を愛する人を愛します
美味しいが戦がよぎるふかし芋
千人針昔話がまだあった
ショートステイ所詮は束の間の離婚
日々疎しやがて猛暑も去ってゆく

大阪市　津守　なぎさ

虫すだく夜を夢みる散歩道
車窓から揺れる稲穂を見てあきず
里の庭ブドー西瓜に迎えられ
猛暑にも温泉めぐり超元気
ルンルンの温泉旅行グリーン車

大阪市　古今堂　蕉子

あなたが居て私が居ると思った日
私が居てあなたが居ると思い出し
甘い汁吸うか吸わぬか任される
やはりある甘い汁から毒の味
忘れないそれが女の悩みです

大阪市　鶴田　遠野

朝刊の第一面にある憂い
豊かさが奪う日本の底力
意地張って妻との溝が深くなり
念願の茶髪を叱る母と妻
三面鏡服をだんだん派手にさせ

大阪市　川端　一歩

千号で見た鉄人も快人も
辞めてゆく背中に拍手鳴りやまず
幼な児のごちそうさまという躾
灼熱が嘘だったよう秋の風
当てのない散歩に背からごゆっくり

大阪市　小谷　集一

日向ぼこだけでも腹は減って来る
年金の暮らしで知った詫びと寂び
攻めるより守りが性に合ってくる
褒めるだけ褒めて止めを刺しておく
職退いて仮面を脱いで無を悟る

大阪市　小泉　ひさ乃

子の未来本音建前交差する
素っぴんでひと夏過ぎていく猛暑
ばれているらしいちくりと妻の針
利益優先心の余裕見失う
一冊の本とローカル線に乗る

大阪市　岩崎　公誠

好奇心大人になってもアニメ好き
背くことばかりで輪から外される
蛸配当先の儲けを喰っている
地理化学やっぱり嫌い脳昼寝
鼻息が荒い割にはけちん坊

電気代には替えられません熱中症
坊ちゃんは朝令暮改苦にしない
長梅雨の後の猛暑に脅される
長寿国威張ってたのが笑われる
地球異変心の奥が痛くなる

大阪市　小糸昭子

もみじ手がセミが持てると自慢顔
かき氷この夏一の人気もの
精も根も萎えさす暑さ憎らしい
四季の花みんな迷って咲いている
夕立が恋しいけれど来てくれず

大阪市　岩崎玲子

抑止力なる言い訳は聞き飽きた
満月にふと振り返る己が陰
一兵卒とは言えこわい小沢さん
年寄りに無利子国債買えという
基地の網トンボすいすい通り抜け

大阪市　近藤正

お返しが来ないと愚痴る癖がある
近道で迷ってからは正統派
美辞麗句整いすぎて任せない
テーブルの薔薇に記念日教えられ
無駄口を叩く元気がまだあった

大阪市　坂裕之

家族愛仲をとりもつサムマネー
一房ごと丹精こもるマスカット
苔化粧の水掛不動優しそう
大根と鰯なんでこんなに仲が良い
まさかの時やはり家族が頼りです

大阪市　田浦實

一と一足して明日は三にする
黄泉の国下見ツアーを申し込む
嫁姑まだまだベールはずせない
酒を飲むなんの苦労も無いように
盆提灯母と夫を待っている

大阪市　熊代菜月

伊吹山鹿やイノシシ狐たち
五能線乗って来ました水森さん
動いては汗かき水を飲んでいる
到来のスイカいまいちだが感謝
赤トンボ見て感動をする都会っ子

大阪市　松尾柳右子

成長に揃わなくなる夕餉時
三世代想いそれぞれ墓参り
スーパーに涼しさ貰うお買物
動く歩道も小走りで行く都会人
北方領土返す約束知らぬ振り

大阪市　澤田定子

大阪市　平嶋美智子

手加減をされて勝負を投げ出した
睡魔には勝てぬ仕事は明日でよい
二日分一合半の米を研ぐ
おかず兼ねうちの味噌汁具沢山
お食事が楽しい水なすのお漬物

大阪市　寺井弘子

一坪の庭を守っている暮し
安売りの魔術にかかる人の列
アナログの昭和と違う波にのる
初恋の想い出夜店かき氷
クラス会昔の華は萎れてた

大阪市　中村叡子

天気予報風雨竜巻何か変
秋場所が放送されて元通り
わたくしの周り大事な人が消え
通販ばかり深夜放送誰見てる
足腰が自由にならぬいまいましさ

大阪市　榎本舞夢

風鈴をなつかしんでる里の夏
底ついた頃に年金振り込まれ
華やかな深みにはまりもがいてる
なっとくが行くまで私死ねません
浄瑠璃の熱き語りに涙する

大阪市　奥村五月

好きな酒姿も見せず入院中
この猛暑汗も知らずの入院中
酒ビール夢で乾杯絶食中
四季の国春秋消えて夏と冬
子を殺す動物よりも落ちた親

大阪市　井丸昌紀

酒五合なんにも怖いものはない
窮地に立ち思えば父は凄かった
そんなとこ触れたら僕は困ります
ぼけた顔眼鏡でちょっと引き締める
せかされて隠す所を間違えた

大阪市　大川桃花

無記名のアンケートにもヨイショする
わが町は難読地名と知るクイズ
損得で善し悪し決める小市民
食事会四角い顔もまるくなる
敷居に顎のせて番犬ばてている

大阪市　原田すみ子

人責めた言葉じぶんの身に刺さる
言葉の海浅瀬で遊ぶ未熟者
簡単に謝らぬ国も男も
挨拶をするだけなのにお人柄
おしゃれした友見て背筋伸ばしてる

一言が胸を突いたり和んだり
がりがりと奥歯でうつを噛み砕く
独り居は自問自答で明け暮れる
ＭＲＩ脳を刮げる音がする
六畳で羽根を広げて好き勝手

大阪市　津村志華子

六十路すぎ好きだ好きだと言われても
なんとなく僕の心を握る女
あの人とまだ握手さえしていない
都会にはあちこちにあるゴミ屋敷
赤信号子供いるのに大人無視

大阪市　江島谷勝弘

くさい球ファールで粘りチャンス待つ
おぼえるより忘れるほうに得意技
手配書の顔一向に歳とらず
缶けりをしながら待った紙芝居
値切る妻に他人の振りをする夫

大阪市　伏見雅明

次次と老舗が消える街に住み
売り出しの手頃な値段待っている
山里の長閑な暮らし憧がれる
淋しいな所在不明の高齢者
デパートへ避暑に出かけてショッピング

大阪市　山本加お里

その内と言っている間に秋の風
秋彼岸忘れはしない曼珠沙華
エレベーターついてやさしくなった駅
マスク越し打者の心の裏を読む
二人して思い出せない一人の名

大阪狭山市　矢野梓

夕映えて風の気配で気づく秋
梨ぶどうやはり季節は裏切らぬ
食欲のおきない秋も珍らしい
長命に白内障というリスク
未来よりわたしの過去が長くなる

池田市　栗田久子

妻変身今日は子供の参観日
旅プラン楽しく迷う時刻表
屋上の稲荷拝んで社旗揚げる
明日開く蕾気迫に満ちている
子の下宿驚くなかれ女靴

茨木市　藤井正雄

金のない分だけ夢がたんとある
ご近所の土産は義理の嵩で来る
よく回る舌だ選挙のたび思う
ペイオフが二千人様居ると言う
戸籍には百六十歳も居る役所

泉佐野市　山本蛙城

交野市　森本弘風

台風も猛暑に負けてふうらふら
エアコンが電気たっぷり食べた夏
ガン退治十七年も前の今日
ＯＢ会昔良かった愚痴ばかり
人の世は推理小説点と線

河内長野市　山岡冨美子

怖いもの見たさに新聞を開く
現在地たまには叱えて確かめる
忙しいというと自慢に聞こえそう
贅肉が少しはとれた負けいくさ
度量ではかなわないので汗を積む

河内長野市　村上直樹

逆らってみてもボロボロ欠ける脳
固め撃ち口鉄砲にまたやられ
ゆらゆらと酒樽担ぎ地獄まで
長生きのサインか妻のシワとシミ
物忘れ嗤った妻の物忘れ

河内長野市　坂上淳司

肥桶を上手く担いだ焦土の子
おっとっとやすやす転けぬ千鳥足
妻病んでバランス崩れ出す家族
ご機嫌な親爺風呂場で浪花節
ふるさとを歌って終る同窓会

河内長野市　植村喜代

太陽がぎらぎらすると気が重い
電話は貰うのもするのも好き
考えを変えたらお喋りになったかな
六百七十一号からのご縁が有難い
持ったら使う人持ったら増やす人

河内長野市　黒岩靖博

気晴しのタバコも失せた市民権
万博で告白されてハネムーン
妻の留守ちょっと一息して自由
強がりを言って損する頑固者
炊きたての湯気の香りに唾を呑み

河内長野市　井上喜酔

愛犬と朝の散歩をする日課
散歩にはいつも携帯持たされる
沿道で車が並ぶ回り寿司
流行のトップ眉毛を剃る美人
山が燃え夕日が沈む里の秋

河内長野市　水谷正子

百句集一人で咲いたわけじゃない
先輩の墓前に捧ぐ百句集
上梓は知らぬ存ぜぬ人まかせ
足向けて寝られぬお人また増えた
新聞の威力過去から祝電話

岸和田市　井伊東吉

暫くは脳細胞も夏休み
晴れマーク続く予報に泣く庭木
芝枯れの酷さ目につくゴルフ場
傷つけた地球が受けるこの猛暑
駅前のマンション高齢者を誘う

岸和田市　岩佐ダン吉

ありがとうたった五文字を伝えたい
ひとりだが反対論が鮮やかだ
福祉だとまた言うている消費税
無理通すそれなり汗をかいている
お疲れさま変哲もない言葉だが

岸和田市　原さよ子

後戻りして約束に念を入れ
まだ生きるつもりか人間ドック入り
応援の汗に報えず負けた汗
ノックする音で静かになる話
石仏にしゃがめば藪蚊まったなし

岸和田市　土橋房枝

未来より今を大事に生きたいな
マイペースで生きて行くのもむつかしい
病む人に一日の大事教えられ
ケータイで喧嘩しながら通り過ぎ
胸痛む小さき子らの虐待死

岸和田市　森元ふみよ

健やかに老いる白寿の祖母無欲
祖母の言う盆は殺生しては駄目
年重ね訃報が続き息をのむ
この暑さ負けるものかと戦中派
球児からパワーを貰い希望湧く

岸和田市　堤楢代

ハイビスカス我が世の夏と誇ってる
もうがまんしないで生きることにする
水やりをしたら夕立やって来た
夜もすがら冷房切れぬ熱帯夜
大口を開けて笑える友が居て

岸和田市　雪本珠子

輪の中で教えられたり教えたり
分岐点違うレールに乗って見る
そよ風に誘われ散歩遠回り
あちこちで欲求不満弾けだす
散る花に命重ねる老いの坂

堺市　志田千代

日本がアフリカ並みになる暑さ
猛暑日の涼をとるのに渋うちわ
行列のリズムに乗れるお年寄り
川柳になりやすいこの老夫婦
大部屋の退院は順不同です

堺市　奥　時雄

核だけに縋って生きる国もあり
核兵器抱いて痩せ犬よく吠える
二番では満足しない人である
上司には言い負かされたふりをする
テレビ消し今の時間に復帰する

堺市　柿花和夫

タレントの色紙飾った不味い店
外づらの裏にたっぷり涙壺
ばれないと信じていたは二人だけ
ママさんを片手で拝み今日は付け
義理果すように出かけるフルムーン

堺市　宮本かりん

あったかい色だな秋の絵具皿
責任をいつの間にやら背負わされ
近すぎて視野には入らないあんた
少し古びた墓石をなでて父母を恋う
住み慣れた街が年々変わります

堺市　源田八千代

重陽の残暑厳しい日の宴
台風の余波をチャンスに草を抜く
百歳がまだ十年は持つと言う
たっぷりと飲んで天使の笑みくれる
ありがとうハートの絵文字弾んでる

堺市　西村りつえ

笑いたい話題がほしい荒れた国
誉め殺し知らずに乗った泥の舟
双子にも浪費とけちで揉めている
大声で毒舌ふるい憎めない
酷暑続きサプリメントに命かけ

堺市　荻野像山

お供えの苦瓜へ父苦笑い
本来の人相になるデスマスク
お見合いへ父親なりに胸弾む
どう見ても富豪と言えぬ僕の顔
飽きないようにあんまり見ない妻の顔

堺市　大久保のん子

喜寿すぎて騒げるうちは大丈夫
鬼の面借りて弱さを内に秘め
年金を集めポックリ寺栄え
心まで見透かれそうきれいな目
余生という未知の次元へはばたこう

四條畷市　吉岡　修

三人がばりばり咬んだ脛の傷
ぎりぎりのプライド崩さない介護
孤独感こんな楽しいことはない
時計台見ながら歩幅ギブアップ
いらだってみても年金そのまんま

吹田市　山本希久子

この地球に生きてルールを守り抜く
消えた名を惜しむこの世の蝉しぐれ
百人よりあなた一人の後楯
失言へ微妙に変る風の向き
御使用のカード残高ありません

吹田市　太田昭

延命無用父の享年越えたから
周波数みだれわが家で孤独なり
喝采も乾杯もない誕生日
肋骨を広げ飲み干す大ジョッキ
立ち止まり貧乏神に追いつかれ

吹田市　大谷篤子

バーゲンで放したとたん買う他人
ちょっぴりの色気消さないように生き
毎日を歩け歩けと天が言う
孫も子も思うようにはまいりません
眠れぬ夜忘れたいこと思い出す

吹田市　野下之男

二人して波風立てるノー天気
鐘だけは突かねばならぬ寒山寺（中国）
父の日に心ならずもカレーライス
トロッコで黒部の秋を掻き分ける
なにやねん犬がオウムに尻尾振り

吹田市　須磨活恵

ふるさとの味のひとつに鯖へしこ
鬼火の祖母から習った鳴らし方
百歳まで生きたらバンザイをしよう
散歩する途中で掛ける丸い石
手で撫でて石にお礼を言って立ち

吹田市　瀬戸まさよ

母さんと父さんがいてありがたし
この歳になって初めてわかること
仏像の善さわかりません済みません
命オンリー非常持ち出しやめとこう
山国の日本はいいな水清涼

吹田市　木下敏子

朝の月散歩の足を弾ませる
夢中になる物を掴んでまき直す
ありがとう電子音にも礼を言い
極楽へ逝くまで足と腰鍛え
精いっぱい生きてるつもり汗を拭く

高石市　浅野房子

友からのやさしい電話癒される
賞味期限少し残って生きている
八十路坂まだ夢を追う宝くじ
風呂上り手の爪足の爪も切る
一人分作って食べて後仕舞

涼風が熱風になる昼下がり
人も草も猛暑酷暑に茹ってる
涼しげに胸の釦を一つ開け
通りゃんせ通りゃんせして改札機
暮らし向き手頃が好きな青い鳥

高槻市　指宿千枝子

自作自演ストーリーなき朝が明け
身を削る思い沖縄記事の鬱
国事忘れ民主内輪の泥試合
何一つ出来ぬが皮肉なら言える
気を揉ませながら辛勝タイガース

高槻市　乙倉武史

欲無いが老いには老いの願いごと
大胆に生きろと他人になら言える
快復期ボクだけ見える窓がある
貧乏に飽きて悪戯を思いつく
問題も活力源も同じ酒

高槻市　富田美義

旅なれたカバンの底に常備薬
のこのこと出てきて議論蒸し返す
アイデアがひらめいてつい長湯する
燃えつきた祭のあとの空虚感
泳ぐより見せる水着が闊歩する

高槻市　佐甲昭二

ちょっとあんたと呼んでるときは怖い妻
できぬこともあるさと頭切り替える
病人の問いに思わず立ちすくむ
渋いはず彼のお家はお金持ち
保証印家訓を盾に突き放す

高槻市　片山かずお

終着は天に任せて楽しもう
高齢の健康セミナー花ざかり
春秋が無くなって行く我が老後
憎らしい宅配の声また隣
選挙戦今じゃ相手のあら探し

高槻市　生田義一

年一度家族全員揃う盆
卓袱台を囲んだ家族なつかしい
今年もまた母の化身か黒揚羽
幼児をほったらかして親メール
阪神の暑さふっとぶ22点

高槻市　安田忠子

流れには逆らえないと言ったはず
ふらふらとまた付いて行く浅はかさ
変化球相手の急所見え見えだ
幸を拾った気がする五円玉
泡風呂でムードいっぱいひたります

高槻市　執行稲子

高槻市　峯村勲弘

坂の上雲見失ない迷う民
こつこつと学んだ知識萎み行く
かさかさの妻の指先ありがとう
アタックは止めて下山を決意する
エルニーニョやはりお前かこの暑さ

高槻市　左右田泰雄

絵手紙の金魚がそっと囁やいた
水撒けば植木もしゃんと若返る
パッタリと思いがけない人と会う
祭りの夜浴衣の渦にまぎれ込む
争いの渦中にはまり抜け出せず

豊中市　江見見清

叩いてもわかるもんかという西瓜
次次と事件を忘れさす事件
予定表に腰を上げろと急かされる
青空を区分けして見る街に住む
反骨心歳はとっても緩めない

豊中市　水野黒兎

回り道それも生き方古希の坂
口げんか勝つも負けるもほろ苦い
追伸の乱れた文字にある悲哀
それぞれが哀楽抱え交差点
老いばかり残り漁村の浜荒れる

豊中市　藤井則彦

生き様がほとばしるジャズピアニスト
次次と毛も歯も抜けてから元気
美人とはそっと距離おくエレベータ
赤信号に気付いてはっと立ち止まる
次次と出るお笑いに笑えない

豊中市　松尾美智代

検査前ひたすら歩く血糖値
検査終え冷えたビールが待っている
もう無理は出来ぬ体と膝が言う
流し目のつもり眠いのかと言われ
ひと言を引いて笑顔を足してます

豊中市　松村里江

泣く仕草見せて上手に切りぬける
目を皿に鮮度比べる特売日
損得を比べる秤だれも持つ
言い負けた夫只今フテ寝中
エンゼルか手話がとっても美しい

富田林市　中井アキ

ふたりでも編める幸せな輪っか
淋しくて八つ当りする花時計
父母の居ない里にも巡る四季
八十になっても母を恋しがる
四季咲きのばらは何時でも愛される

富田林市　片岡智恵子

一族でパンダ見に行く白浜まで
梅樽の露天風呂波静かなり
観光は土産店から第一歩
投げた餌に鯉ラグビーのごと走る
耳打ちへ邪魔な大きいイヤリング

寝屋川市　籠島恵子

三日置きに買ってリンゴを確かめる
夫婦して梅のエキスを飲みはじめ
道の駅めぐって秋を連れ帰る
一旦は貰って捨ててあげるゴミ
付き合ってあげる夫の動揺に

寝屋川市　冨山ルイ子

連続猛暑に負けられぬ負けられぬ
電動自転車フル回転の炎天下
やはり冬がいいと思えるこの猛暑
エコ思いつつ終日クーラー付け
畝作り炎暑に今日も延期する

寝屋川市　森茜

あやかりたい介護に千手観音さま
噴水のしぶきかき分け日焼けの子
編み棒の一目一目に君が居る
あこがれは静かな湖を持つ瞳
マネキンの作り笑いも辛そうに

寝屋川市　平松かすみ

紫外線避ける泥棒スタイルで
スーパーへ連れて行きます影法師
電気代言ってはおれぬ三十五度
新聞に今日も白骨載りました
積立ておこうミイラにならぬよう

寝屋川市　太田とし子

裏長屋親しく軒を這う匂い
したたかな松にとどまる秋の風
耐えること教えてくれた冬木立
国民のための政治も裏表
千号に天から地から湧く拍手

寝屋川市　森田麗

歳時記も喘ぎ覚える夏地獄
猛暑から逃げ籠り日記閉じたまま
孫の日記満杯にする里帰り
麺好きの孫につき合う盆まつり
陽炎の如親が消えたと言うニュース

羽曳野市　吉川寿美

逆流を泳ぎ人生第三章
歳に甘えたらあかんと言い聞かせ
病にも怪我も負けると終になる
雅号三つどんぐりなれど支えにし
眼の見えぬ世界手引きを待つ子達

羽曳野市　安芸田　泰子

野の花の情けを貰う石仏
熱帯夜拷問の如干蒲団
草取れば猫の額が広くなる
古里を語れば母は饒舌に
緊張が解かれてどっと汗が出る

羽曳野市　吉村　久仁雄

拝観料仏心が少し揺れ
平和への思い猛暑が熱くする
ロボットに聞く原発へ行く覚悟
年金も好きな湯どうふ冷やっこ
あばらから鳩出すぼくの平和論

羽曳野市　永田　章司

悔しいが相手の指摘的を射る
この国はまだ大丈夫円が売れ
一服の煙草も駄目でストレスに
気配りが皿にこぼれるコップ酒
粘り腰の土俵の鬼も黄泉にたつ

羽曳野市　福田　悦子

化けないで素顔のキミの方が好き
地球より重い大きい母の愛
能書きは人の心をもて遊ぶ
あの暑さ流してくれた秋の雨
秋夜長お供をします深夜便

東大阪市　北村　賢子

他人の中でも動き続ける子の臓器
娘が来る日元気な笑顔見せる母
閉ざされた表情とかす思いやり
自分のこころ殺してまでも無理するな
物は無くとも情あふれていた昔

東大阪市　笠井　欣子

流行を追えば自然と若返る
お隣もそのお隣も卒寿です
三十五度思考力なし昼寝する
女医さんの庭にアロエが植えてある
暑ければクーラーつける仕合せ度

東大阪市　米田　水昇

地蔵盆金魚の命持ち帰る
猛暑の中出かけた足をひっこめる
世を渡る不思議な出会い友元気
窓叩くうつをとばした夜の豪雨
宇宙旅行科学の力信じたい

枚方市　伊達　郁夫

トイレでは内緒のメール打ってます
スッピンの顔を想像して見つめ
愛というカードの裏は憎だった
忘れてた記憶が故郷に落ちている
手付かずの明日に私の虹を描く

父さんの形見の時計よく停まる
今日から姑いじめられるかいじめるか
居酒屋の片隅にあるかくれ里
酒飲みは酒好きな人すぐわかる
年金でまったり暮らす粋な方

枚方市　寺川弘一

とめどない涙ベッドの手を握る
逃げ水に新幹線が千鳥足
憧憬が胸につかえてまどろこしい
スクランブル杖が一息入れている
営業力一目瞭然棒グラフ

枚方市　丹後屋肇

大声を出して呼ぶのはあなただけ
さりげなく大事なことを言ってくる
大変だ母さんお洒落し出したよ
どうしても白髪一本染まらない
強ければいいというではない躾

枚方市　小林わこ

言わないが沢庵だけが旨かった
浴衣着でもう一段といい女
次次とジョーク飛ばしていい座持ち
持ち合わせいくらで決まる手頃感
ふるさとの路地も地蔵も消えてビル

枚方市　安達忠央

この猛暑今日も元気に万歩計
寝つかれず今宵聞いてるクラシック
それなりに猛暑乗りきるこのからだ
人生を流れる雲のよう流れ
すすきの穂ゆれて散歩の足を止め

枚方市　二宮山久

ストレスを泡で飲み干す生ビール
故郷の海に抱かれる母見舞う
激暑にも負けず刻んだ万歩計
脇役に徹し咲き切る野りんどう
大役を終え伸びやかに露天風呂

藤井寺市　二宮紫鳳

国技館四本柱が頼りない
激辛のカレー如きにシャッポ脱ぐ
杖持ってエレベーターの隅にいる
天に向かってつば吐いたのは青い鬼
同郷の誼みちゃん付けで話す

藤井寺市　髙田美代子

二度目の花嫁に父はもう泣かぬ
デパートのハシゴ女の鬱晴れる
時価のトロ避けてタコ　イカ　カッパ巻き
「ほな」のひと言残しあっさり逝ったヤツ
妊婦かと席を譲れば只メタボ

藤井寺市　鈴木いさお

神経質の割にお尻の重いひと
今となれば健康だけが宝物
練羊羹まずは私のおちょぼ口
嫁だった事もう忘れたか嫁いびり
加齢とや一度で通じない会話

藤井寺市　俣野登志子

体内で突然石が騒ぎ出す
入院に今更悔やむ不養生
入院の備品は百均店で足り
点滴の合間に一句考える
有難う今日の出合いに感謝する

藤井寺市　若松雅枝

薔薇のトゲ取って本音を問うてみる
マジックショー騙されていて拍手する
豪傑と言われ男の顔になる
不出来な野菜ですまぬと里の荷が届く
生まれる前の歌をなぜだか知っている

藤井寺市　津田シルク

金婚の写真サービスしてくれる
熱中症ならないための水肥り
窓越しに耳をすませば虫の声
いわし雲出て秋桜の風が吹く
訃報来て予定変更して勤め

藤井寺市　伊藤アヤ子

朝歩き無口のままに過ぎる人
土俵の鬼青春の日をありがとう（初代若乃花）
老眼鏡買ってびっくり深い皺
涼風に誰かに電話したくなる
富士登山蟻の行列見るごとく

藤井寺市　吉田喜代子

稲穂たれリボンのように赤トンボ
表向きいい人ぶるのヤメテンカ
坪庭にバッタ　コオロギ放し飼い
オミナエシ漢字で書くと嫌な花
千号大会指くわえてる車椅子

藤井寺市　増井ヨシ枝

子の自立当てにされないのも淋し
子の部屋にまだ残したい子の匂い
子が居ないから弾まない夫婦旅
まだ老いたと認めたくない物忘れ
血圧が嘲笑ってるカラ元気

箕面市　出口セツ子

黄信号何とかせねば病む地球
青信号ほっと一息エコ談義
絵本展幼い頃に舞い戻る
絵本好き今は絵手紙愛好家
予定表妻の旅から記入され

箕面市　広島巴子

亡びゆく国を正していく覚悟
思い出す泣いて帰った終戦日
病気でも知識欲だけ忘れずに
すごい炎暑景色もゆらぎ陽炎に
うす曇り今朝も暑そう予想でも

守口市　井上桂作

三日外出今日休まぬと娘が叱る
派手な物着たらと娘買うてくる
世話いるのに長生きせよと娘言う
むつかしい事は何でも娘に頼み
娘が通訳カタカナ語と流行語

八尾市　宮崎シマ子

千号を生きて手にした有難さ
日々普通これが最高病んで知る
酒呑めぬ日が暮れかけて終らない
喘息が治まり雨のリズム聞く
沈む気へ看護士愛の叱咤くれ

八尾市　内海幸生

秋刀魚無し食卓の秋まだ来ない
宿題を家族で手分けして捌く
暑さ惚けも平和惚けもしています
考えるポーズでうまく寝ています
許す気になっておいしい水ごくり

八尾市　村上ミツ子

教えてもいいがと御託並べはる
病状が良くなり出すと我がもたげ
快復を待ってたように酒が呼ぶ
ペラペラが過ぎて墓穴を掘る総理
粘るほどだんだん見えてくる球種

八尾市　寺川はじむ

熱帯夜の夜明け虫の音きく九月
夕立に灼熱の町洗われる
監督がチームカラーを染め上げる
スマートなタッチ場数をふんではる
念入りにポケット探るランドリー

大阪府　籾山隆盛

愛情のシャワーが嬉し里帰り
安心は同じ匂いのする家族
暑い日は熱いうどんと父譲り
テーブルの端っこ母はにこにこと
熱いよとそっと手渡しする湯呑み

大阪府　山本柳昌

大関を他国が占める大相撲
子の齢を仏前で繰る秋彼岸
好きな酒ほろ酔い気分つなぐ明日
五回目の二十見据えてめざす百
9号が恵みの雨と変る畑

大阪府　野田栄呼

髪染めて三面鏡に旅支度
大切な命粗末にするやから
玩具箱片付け出来る子に育ち
タイガースのジェット風船宇宙旅
よく喋る熟女グループ黄昏る

大阪府　桑田ゆきの

飽食の猫でまんぞくそうに寝る
字引くり友への手紙やっと書く
顔をみておいくつですか何故きくの
毎日が飛んでいくよう暮れていく
風船の少ししなびて祭り過ぎ

大阪府　井上照子

口裏を合わせて以後のくされ縁
古希過ぎてへそがだんだん曲りだす
血統書つきのペットを五匹飼う
ゆとりある顔が上座でクラス会
ひっそりと無声映画のような秘湯

神戸市　伊勢田毅

下駄箱の中で三代睦まじい
口下手がふいの挨拶見事なり
のり代があると思っていた不覚
ねぎ刻む嫁はやさしいママになる
少子化を嘲るように柿たわわ

神戸市　山口光久

生き下手は親子で認め合っている
裏方があっての舞台幕上がる
後まわしにしたつけちゃんと後で来る
探し物昨日一日鬱でした
留守番はいやだと犬の目が拗ねる

神戸市　山口美穂

ばあちゃんが産むんじゃないがいそがしい
羊水と思えば波も子守唄
徴税はきびしく後はムニャムニャムニャ
かわいいからやはりパンダはいてほしい
初めてのおつかい孫をほめてやる

神戸市　田中章子

間引かれた大根の意地花芽つけ
車座になって解け出すわだかまり
パン食の妻だが腹が据わってる
一輪の献花にダンプ黙礼す
羊水に抱かれて命泳いでる

神戸市　山崎武彦

電気水停まっていての熱中死
暑いとはこぼすがうれし食べられる
エルニーニョ日本の四季を取らないで
台風の雨に涼気を期待する
目覚めたら先ずは仏に感謝する

神戸市　木村貴代子

神戸市　早川孝子

父さんの粘れのサイン受け継がれ
習うほど終わりがないと気づく道
空港で異国の風に慣れておく
隠れてた蕾見つけて撫でてみる
足踏みがきっとチャンスを連れてくる

神戸市　山田婦美子

変えられぬ人より我身かえて生き
不自由をものともしない生き上手
相棒があるから苦楽共に出来
いたずらな運命線の出来心
生命線延び過ぎ後期高齢者

相生市　中塚礎石

僕の手も手袋も指五本なり
ヤジロベエ善と悪との根くらべ
あかんべえすれば鏡は笑いこけ
貧乏の財布をじっと見て育ち
不平不満押さえる酒が逆に効き

明石市　糀谷和郎

負けたのにまだ納得をせぬ涙
千切ってもじきに織り成す人の綾
どの家も常備してない尊敬語
柔な身を案じて影がついてくる
米櫃の底が気になる子沢山

芦屋市　黒田能子

充分と思える日まで生きてみる
午後からの雨はわたしのオフタイム
うやむやの責任転嫁政治劇
物忘れ脳が痺れてきたらしい
子育ての力加減が難しい

芦屋市　竹山千賀子

ピーヒャラ子らが未来を曳いている
手巻き寿司包みの中に母の味
肩書きをはずし溶け合う趣味の友
自分史の結び亡夫にありがとう
ご先祖と心つながる墓まいり

尼崎市　春城年代

埴輪にも小さな乳房ふたつある
寝て起きて脚が動いて言うことなし
サプリメントそろそろ飲むか卒寿
辞書を手繰ればあっという間に夜が更ける
鼻緒擦れして君と歩いた大文字

尼崎市　長浜美籠

誕生日のケーキが少し面映い
なんでやねん言えずに豆の筋を取る
言ったこと忘れ言われたこと忘れ
思い返せばははとおんなじことを娘に
御元気か投句の欄で拾い読む

長生きの薬いまさらでも貰う
お手頃な値段の前でまだ思案
飲みに行くサインが昼間から出てる
体力がつくもの食べて注意され
お酒飲むにも体力がいるお年

尼崎市　山田耕治

二百十日昔台風いま残暑
日本の四季を知らないこの猛暑
図書館を別荘にして涼をとる
九月場所番付表に見る決意
十両の全勝もある夢の場所

尼崎市　軸丸勝巳

レターセット使わぬままでメールする
入社試験変身させる服と髪
雑草だけが生き生きしてた夏酷暑
雲海にジャンボ機の影連れて旅
面影を探し合ってるクラス会

尼崎市　藤岡りこ

三日目の通院の日に髭を剃る
歳だろう着席するとすぐ眠る
娘から食後の薬チェックされ
ばあさんが薄味にして言い聞かす
この地では地車の時季ご神燈

尼崎市　林昭三

涼しげに泳ぐ金魚がうらやまし
請求書見るのが恐い電気代
誘いたいこんな美人を傘の中
孫に負け手加減したとホラを吹く
下手な嘘作り笑顔が歪ませる

加西市　金川宣子

戦時下の我が青春がいとおしい
遠かった米寿への道あと少し
居ながらに世界遺産を目の辺り
もう知らん言ったけれども放っとけず
地の人のもうすぐそこは遠かった

川西市　米原雪子

好き嫌い微妙な位置で揺れている
無遠慮に蒔いた噂に花が咲く
まだ少し悔いが残っている妥協
まとまらぬ答を急かす砂時計
命が先か保険が先かいい勝負

三田市　久保田千代

土佐から嫁が龍馬ブームに乗ってくる
ジィジィのDNAと叱られる
禁煙へ禁酒もしたらノイローゼ
キープするはずが底まで飲み干した
見た顔だ愛想笑いをしておこう

三田市　堀正和

三田市　石原歳子

夕立が景色を洗い絵のようだ
考えに幅ができたと誉められる
ごめんねと言って蜘蛛の巣取り払う
帰省の子夫と同じ声してる
独り居の人によろこばれた握手

三田市　上垣キヨミ

国民を引き合いに出す党主戦
敬老の日には国旗を掲げたい
オレオレに勝って引ったくりに負ける
若乃花角界浄化神となる
ミイラ化にしてまで親のスネ齧る

三田市　福田好文

舐めるなよ川も怒れば人を呑む
柳誌一冊読んで眠って皆忘れ
怒ったなとことん熱いお茶が出る
百歳の祝い呉れるも今の内
鳴きやんだ蝉がおしっこかけて逃げ

西宮市　山本義子

内気ですのすこし俯く鳳仙花
花桔梗あなたは星になりたまえ
床の間より月に生くべし女郎花
藍の花いずれ佳人に抱かれる
人間と寄りそうて咲くそばの花

西宮市　亀岡哲子

大家族てんやわんやの嫁だった
気遣いのがんじがらめを解きほぐす
オタオタはしないばあちゃん出来上り
病院で半日避暑の待ち時間
長命で鯉に変身した金魚

西宮市　牧渕富喜子

雲すべて消えがっかりの青い空
まだ虫にかまれた跡のさくら色
馴染み出す時が捨て頃のスリッパ
踏み出せぬ事も猛暑の所為にして
すだれにも情けがあって揺れている

西宮市　秋元てる

知識にも賞味期限とは知らず
お供えのメロン食べ頃子等帰宅
夫はいい友は一人で足りません
孤独もいいそれを伝える人が居る
立葵未だ立話続いてた

西宮市　片山忠

罪と罰読みこなすのが難しい
結婚をしたい男のランキング
リフォームをすると妻まで生き返る
どろどろの関係誰も手が出せず
しこしこと貯めて淋しく死んでゆく

西宮市　緒方美津子

ケイタイが次次進化してこまる
湯割りの湯値段自在でございます
勢いはモンゴルばかり国技館
スーパーで歩きつかれる特価の日
ロボットと三角関係の老後

西宮市　藤本直

まっさらな風を感じる朝の道
異常気象人が地球をいじめてる
あと少し老いよゆっくりついてこい
後戻り出来ない道も迷いなし
心にはためらい傷の数知れず

西脇市　七反田順子

照り返し恨めしい目で空を見る
夕暮が屋根くっきりと写し出す
ウーロン茶で熱く語れる友が居る
顔つなぎ笑顔ひとつがあれば良い
五〇ミリ降っても許す雨よ来い

奈良市　天正千梢

落ちこぼれ路傍の花を楽しく見
こぼれ種拾う廊下をうろちょろし
杖持って遠吠してて今日も暮れ
貧乏が板についたか心痩せ
頬つたう涙ふかずに酔うている

奈良市　米田恭昌

蚊取線香匂いが昭和よび戻す
落城の秘話ほり起す村興し
今更に過ぎた昭和を恋う孤老
妻も年齢趣味の仕分けを仕始める
演出満点振込め詐欺の大芝居

奈良市　辻内げんえい

有り余るはずの時間に追われてる
愛想して保母さん達に孫託す
髪の毛の話題にそっと逃げる友
背広より喪服着る日が増えている
百歳の叔母の所在は分かってる

奈良市　阿部紀子

手の平に祖母の好物大和柿
共に生き年をとったね影法師
相談を聞えぬふりで席を立つ
出雲そば食べ縁結び願をかけ
勾玉を磨けば厄を祓うらし

奈良市　岩本浩二

深追いをすれば躓くことばかり
決断が鈍く背中をどやされる
躊躇わず押しの一手で攻めまくる
時々は開き直って吠えてみる
ひたむきに取り組む姿惚れ直し

あまりにもあほらしいからまた寝ます
首の凝り無理したつけがけだるさに
秋桜の根っ子に秘話がうずくまる
会いたくて鰭をこぐ手元月明り
無意識の導き芯が温まり

生駒市　飛永ふりこ

新風と塔を支える手を繋ぐ
品格を保つ背筋も軋み出す
嘘のない暮しへお日さまが笑う
父母偲ぶ想いは褪せぬ夕茜
直球の愛をかわしてからの悔い

香芝市　大内朝子

ともすれば独り善がりになる過信
折りに触れ子に語り継ぐ人の道
ユーモアに長けるピエロの無表情
核心に触れる手前で風を読む
枯れ葉舞う秋の音符を抱いたまま

大和郡山市　坊農柳弘

幽霊も年金受けて生き延びる
ちょい悪の笑顔で誘う縄のれん
輪の中に波紋を起こす人ひとり
賞罰なし馬鹿正直に生きてます
ストップウォッチ押して老化を迎え撃つ

奈良県　渡辺富子

それぞれが個性で美人には遠い
灰汁抜きをして再起へと賭けてます
鱚白し今夜も熱帯夜だとか
野心など見せることない盆踊り
罪秘めたように静かな月の露

和歌山市　岩本美智子

乾物にもならず生きている超猛暑
処暑なれど微熱下がらぬ体温計
入道雲よ隠れん坊はもうよそう
つくつく法師遠慮しいしい鳴き出した
ああしんど不思議に動く口だけは

和歌山市　木本朱夏

炎昼にバスを待つのも刑なのか
風鈴の舌にも秋がしのび寄る
待ち時間よろよろと来て残暑
カウンターパンチくらったまま残暑
太陽へ吠えてヒマワリ立ちつくす

和歌山市　古久保和子

温かいお茶がおいしい秋の夜
モザイクを入れると本音よくわかる
終電車やっぱり一人積み残す
こめかみの辺でプチッと音がする
忘れないようにメモする隠し場所

和歌山市　牛尾緑良

和歌山市　田中みね

いざ行かん川柳塔のおまつりへ
見様見真似鯛の刺身もご覧あれ
もういいよ下手な弁解きあきた
それにしても妻のお口はよう回る
聞き捨てならぬお言葉胸にたたき込む

和歌山市　武本碧

青空にぽっかり憩う雲一つ
善人に化ける手品を編んでいる
試着室の中で魔法はかけられぬ
るんるんの目はエゴイストかも知れぬ
生臭い意見あなたも魚偏

和歌山市　玉置当代

すぐばれる嘘堂々とついている
飾らないあなたに期待しています
納豆おくら夏を乗り切る常備薬
時間だけ過ぎて仕事がはかどらず
再発の兆しはないと言うカルテ

和歌山市　松原寿子

逆ろうて刺激あたえて見たくなり
つき添いなしで自由に跳ねるショッピング
地球からのサインへ何も手が打てず
はずまない会話へ胸が痛み出す
盃に本音ひとつが溶け切れず

和歌山市　喜田准一

顧みていろいろあった古稀半ば
その声で歌う度胸を見習おう
一杯の酒がハードル下げて秋
知恵付いた妻にフェイント掛けられる
ぶっちゃけて終えば腹も決まるのに

和歌山市　松尾和香

ガス予報ゴンドラ揺れて風も吹く
阿蘇五岳雨に洗われ心癒え
大の字の送り火拝む癒し旅
愚かさを重ねてひとり寺参り
さわやかに動けるからだ感謝する

和歌山市　堀冨美子

心まで病むまいかっと目を開く
夫迎え盆火あかあか子等集う
炎天へ花もジーンと喉鳴らす
無念さに心が痛む八月忌
単純な昨日と今日の泣き笑い

和歌山市　坂部紀久子

未知数を抱き太陽が昇る朝
猛暑続き夏の予算が狂い出す
待ち合わせうんと涼しい場所にする
割り勘のコーヒー話よく弾む
説明のつかない音で眠くなり

鳥取市　鈴木公弘

指示どおりすれば工夫がないと言い
猛暑にもじっと我慢のサルスベリ
オクラ納豆噛みしめて食う定年後
農業の明日は分からぬ稲みのる
銀行行きのキップ警察からもらう

鳥取市　土橋はるお

ちぎれ雲頑固な雲もいるようだ
大仕事成し遂げ叩く大太鼓
大空に俺の死顔見せるなよ
助手席に妻を乗っけて旅に出る
昔には癌にお灸をすえていた

鳥取市　福西茶子

兄妹八人同じ形の躾糸
建前は猫なで声でしとやかに
ヒロシマに来てもやっぱり核捨てぬ
親の死を知らぬ世の中摩可不思議
年金日百円寿司へふたりして

鳥取市　加藤茶人

妖怪がオバケがなんだ恐い妻
平凡は良いな朝昼晩の飯
アナログが消える昭和がナツメロに
毒を飲み毒に染まった出世欲
女房のお下がり着れるほどに痩せ

鳥取市　太田幸枝

卒寿坂旅にさそってもらえない
すず虫の声にうっとり長湯する
世界歩きテレビで旅をした気分
美しい水も狂えば手に負えぬ
海外の旅で翔んだ日夢に見る

鳥取市　春木圭一郎

会合へいつも出過ぎず引き過ぎず
まず笑顔形だけでもやってみる
前向きな発言みなに波及する
感謝ならすみませんよりありがとう
ともかくも相手の話聞いてみる

鳥取市　岸本孝子

あてにならぬ夫に味見してもらう
デザートは別腹ですという女
長生きが怖い世だとはさみしすぎ
年金の枠で生きると言い聞かす
うやむやな返事が命取りになる

鳥取市　中村金祥

アルコールゼロの夕餉で無口なり
ボロ家だが愛はいっぱい詰めている
共白髪お互いカバーして生きる
金婚へようやく咲いた愛の花
豪快な夏やわらかな秋を待つ

鳥取市　奥谷彩子

一人旅風とすすきの無人駅
夜空染めあっけらかんと散る花火
波瀾万丈三角波に夫婦舟
雑魚の正論強気に吐いて火の粉あび
核もつ国で平和のルール決めている

鳥取市　山宮愛恵

ヒレステーキ老いのスタミナ補充する
にんにくのソテー明日は家に居る
焼肉にしょうお隣呼んで来る
婿さんの料理は何時もハイカラだ
サービスのつもり秋田の特級酒

鳥取市　永原昌鼓

傷口が人の歴史を語り出す
付箋書く夫の寝息聞きながら
一番の幸せ家族みな達者
メール来る予感が当たる雨の午後
計るたびどんどん縮む我が背丈

鳥取市　夏目一粋

半熟は未完じゃないよ魅力なの
やさしい愛だことことと煮詰めてる
老いたれど心は走り続けてる
無理せずに叶うものなし冬の蝶
亀さんのように完走して永眠(ねむ)る

鳥取市　宮脇道子

日に一度無心の世界草を抜く
泣くことも出来る幸せ残してる
この暑さ人も草花も共に萎え
猛暑つづき夜はソーメン流し込む
息子等は私を子供の如く言う

鳥取市　平尾菜美

早起きの分だけ積める徳がある
心にも欲しい栄養補填剤
抜け殻の貝と在りし日偲んでる
つらかろう笑って耐える父の主義
道標とだぶって見える父の顔

鳥取市　中宇地秀四

愛してるくすぐったくてよう言わん
お賽銭今は手付の五円だけ
共白髪期待はずれのつんつるてん
事業仕分け先ず国会の無駄遣い
綺麗好きゴミは車でコンビニへ

鳥取市　横田春名

癪だけど善人ぶって褒めておく
閉じ込めたうっぷん夕日そっと抱く
深い泥吐き出す友にふらふらだ
やつぎばや言葉の刃突きつける
年ごとに積んだ知恵持つ老年期

鳥取市　吉田弘子

山陰も記録づくめの夏の空
炎天下外出ぎらい未だ続く
この猛暑蚊やハエまでも飛んで来ぬ
クーラーに馴染んだからだもてあそぶ
列島のあちこち旅の恥捨てた

鳥取市　山本益子

八十路来て漢字検定通過する
秋の空ぽっかり浮かぶ白い綿
里かえり坐る涼みに流れ星
有頂天こんな気持を攻め立てる
クロスワード時々徹夜続く日も

鳥取市　稲村遊子

お参りを忘れぬ距離に墓地を買う
いい朝だ五本の指がよく笑う
赤ちゃんの笑顔が辛い不妊症
まな板に乗って私を曝け出す
出直しヘランチョンマット買い換える

鳥取市　田村邦昭

胸さわぎ予感があたりそうな気が
いい予感なんだか足が地につかぬ
不景気か花火が高くあがらない
今日の波なにかくやしい涙かも
役員をうけたが脳に笑われる

鳥取市　西川和子

病状に見舞う言葉が見付からぬ
色褪せた写真は母の晴れ姿
語れども思いの丈は伝わらぬ
大空の御機嫌次第苗を植え
足腰が付いて行けぬと愚痴り出し

鳥取市　高浜勇

アナグロの丸い時計が手放せぬ
湯たんぽのような胸だがあったかい
使うことない一級の漢字たち
珈琲にたった一杯湯を沸かす
痛がればホイホイ薬だすお医者

鳥取市　池原天馬

八十は別れのしらせ聞くばかり
こおろぎが猛暑日さけて部屋でなく
東京で人に酔いかつモノに酔う
駅ポスター法被の知事が人を呼ぶ
白鵬関国技を守る宣言す

倉吉市　牧野芳光

掴むまで美しかったシャボン玉
主役より黒子の方がよく喋る
胸像の笑った顔を見てみたい
猿真似は易しいようで難しい
年寄りにならないように恋をする

倉吉市　山本玲子

かなかなが夕餉を忙しなくさせる
俎の窪みは母の勲章だ
目歯耳ともうこれ以上病まれない
注射は嫌い卒寿の祖母がすねている
花泥棒花に最敬礼をして

倉吉市　猪川由美子

刑場公開新たな一歩論を呼び
石の下根性ユリに気が和む
ファン力士解雇に愛子さまも泣く
節約へ工夫も楽し脳も活き
総理よりママを目指した野田聖子

倉吉市　野口節子

八十路坂さざ波さえも身に応え
前向きになってるんるん生きてやる
嫁達が花丸くれた嬉しい日
敏感に他人の腹が読めすぎる
巻き返しあって人生捨て難い

倉吉市　山中康子

何も彼も知って意地悪おばあさん
常識が欠けぬ程度のおつきあい
未知の道たがやしながら嫁姑
目の前に猫を出されてぞっとする
微笑めばほほえみ返す仏さま

米子市　白根ふみ

一〇〇〇号に会える傘寿の坂のうえ
背のびして釣り合う席を見失う
きれいごとの裏の犠牲を考える
仕切りやになって介護をしたがらぬ
晴れの席笑みを絶やさぬようせめて

鳥取県　石谷美恵子

お誘いも断わり電話する猛暑
介護の手払う可愛くないバアバ
後なんど娘と行ける旅ごろも
金と暇合わず見送る旅プラン
手の混んだ料理しばらく目で食べる

鳥取県　細田裕花

言い勝って強気の虫を引込める
エコカー減税へすべり込みアウト
束の間の旅の残像ハイチーズ
君の主義いつのまにやら染められる
嘘っぽいきれいな歌に酔うている

鳥取県　鈴木一弘

長生きをせんと借金返せない
敗戦の痣はとれない基地移転
ちょっと待て焦るな敵も困っとる
滝にうたれ五体の汚れ叩きだす
暑い夏昆虫どもと小屋住まい

母ちゃんは旅行おいらは冷奴
赤トンボやっと飛んだよ秋の空
ニンニクと玉ネギ植えて年暮れる
米寿過ぎ飛ぶの止めようころぶから
朝昼晩水のシャワーで汗流す

鳥取県　北村稔

名監督一人かかえて有名校
ガイドブック手っ取り早くグルメ通
わが将来お告げの変化未だ見ず
マイペース他人はそれをせっかちと
歳だから時間をかけて当り前

鳥取県　池澤大鯨

好きなどと言えず終った戦中派
生涯を倍に楽しむ老いの恋
充電と言う名で呑める生ビール
五十年飲んだ体だまだ止めん
一泊のツアー旅行で三日寝る

鳥取県　山本正光

秋の雲待って居ましたお月さま
ひた走る後に綺麗な花こぼれ
連日の猛暑へ今朝のうろこ雲
国訛りそのまま次男東京へ
秋ですネ明るい声が隣から

鳥取県　深田倶久

海水温高くて魚沖へ逃げ
漁火が烏賊に届かぬ海になる
秋の味かんかん照りの味がする
猛暑避け朝駆けだけの野良仕事
残暑にも猛暑真夏日容赦なし

鳥取県　竹信照彦

千代というとても優しい母でした
今年の蝉ジデジジデジと鳴いている
熱帯夜月下美人が狂い咲く
元気な太陽で地球は熱中症
タイガース勝てば関西盛り上がる

鳥取県　鳥越鬼一

イケメンにうなずく運命の彼女
三度目のデート衣装に選り疲れ
熱中症の話はつきぬ夏でした
政界を野党見下す関ヶ原
町長も残暑残暑と口火切る

鳥取県　松川行男

すぐ乾く夏の衣のいいにおい
甘ずっぱい葡萄を口に友の情
連日の日照りエアコンキューピッド
エアコンに守られ二人酷暑越す
活もらうグレープジュース乾杯だ

鳥取県　岩崎和子

鳥取県　斉尾くにこ

全身に浴びてる君の水しぶき
ありがとう楽しかったと手を放す
フレームの内でおはじきが始まる
しあわせでいるのに涙こぼれだす
まろやかな思い出たどる日暮れどき

鳥取県　田中一眸

人は人で憂さを晴らしている地獄
脱け殻に未練残さず蝉は翔ぶ
豆つぶの腫瘍に心乱される
アイロンに掛けたい過去を持っている
顔のシワ喜怒哀楽に忙しい

松江市　三島淞丘

核心を外して風を和ませる
変わり身の速さ三色ボールペン
裸婦像の前で寡黙になる二人
余生まだ等身大の夢を追う
先人の暮らしに学ぶエコライフ

松江市　松本知恵子

猛暑日の隅でコオロギ鳴き出した
もう一本付けましょ秋の月が澄む
青魚食べてサラサラまだ生きる
病む父に白身の魚下げて行く
エステサロン私を絞る玉の汗

出雲市　小白金房子

暦通り行かず猛暑の中に住む
収穫の稲穂波打つ野田の風
とべそうでとべなくなった水溜り
金星の輝きしばし立ち拝む
ドングリの森から秋が歌い出す

出雲市　石倉芙佐子

子供も馬も誰も通らぬチンカラ峠
湧き水の処まで行けば助かる命
夕焼け小焼けみーんなどこに行ったかしら
あした天気になあーれ私の靴が裏を向く
何のため誰のために死んでしまったの

出雲市　森茂美

税金が此処でも無駄をしています
日一日迫る老後をなんとしょう
ほっとするたびに命が長くなる
走っても馬はお尻を叩かれる
半月もすれば世間はまた変る

出雲市　富田蘭水

クーラーよりもやわらかい風大自然
忘却の彼方にあなた生きている
さもしいな年金親も子も無くて
酷暑にも泰然庭木愛でている
春夏秋冬無常の風に叶わない

好きだった人の誕生日も忘れ
町中に暑いあついが斃する
喜寿祝い沖縄旅行してもらう
保険金受け取り人を確める
嫌いな人と血液型が同じとは

出雲市　岸　桂子

扇風機売り切れましたこの猛暑
石ころを磨いて丸い輪を作る
まっ白い雲の向うに母を見る
ふわふわの煙の中に消えた愚痴
グルメより田舎料理を子や孫に

出雲市　多久和　敬子

こだわりを捨てると声も弾みだす
青空になるまで絞り出す絵の具
皿の隅主役光らすプチトマト
烏賊連れて一升瓶がぶらり来る
頑固爺隅に置けない女好き

出雲市　伊藤　玲子

泣き面を見せぬ男の力こぶ
戦争をしのぶ傘寿の生き残り
里帰りネギも大根も持ってゆけ
腰曲りセンスもロマンもあるものか
太陽の恵み食卓まで届く

島根県　持田　多輝子

会者定離駅吹き抜ける風になる
カナカナが鳴いて亡夫の忌が巡る
わたしの横で老母が安心して眠る
後ろにも列が続いてほっとする
方便の嘘が後引き嘘重ね

島根県　伊藤　寿美

この先はハッピーエンドで有るように
あと少しの命脇見など出来ぬ
矢印がまだまだつづく都落ち
ユニークな言葉に酔うて行き迷う
孤独にも耐えて喜劇をくり返す

美作市　山本　玉恵

ひとり住み迷いながらも前向きに
締め直す再出発の靴の紐
墓洗う明日の策を父に問う
音沙汰がなくても手繰る絆糸
父母からの畑も今は手に余り

美作市　福原　悦子

読み聞かせ会子供達の輝く眼
音読が嗚咽に変わり戦争記
看る人の笑顔の皺も深くなり
折れるまで杖に柱になり夫婦
一等米食べて終日ごろごろと

真庭市　国米　きくゑ

真庭市　福嶋智恵子

迂回してやっぱり散歩露地通り
露地裏の世間話に仲間入り
朝顔の花を数えて日々達者
愚痴るのも生きてる証ひとり部屋
白骨にならぬ方策思案する

竹原市　岩本笑子

オハグロトンボの合掌する姿
母のおむすび塩で握っただけでいい
雲流れ雲には雲の行き先が
虫達の出番だひと月ぶりの雨
クーラーも遠慮がちです熱帯夜

竹原市　時広一路

半世紀やあ下駄箱に桐の下駄
関節炎だけど杖などまだ持たぬ
三食も好きな時間に食べ独り
なるようになるしかないね運不運
見て欲しい心が染みる花の色

竹原市　石原淑子

一晩で秋のモードに入れ替わる
お隣の熱中症に気付けない
虐待を受けても母を信じきる
親子だな電話のトーンで分かり合う
免許証古希はめでたしきびしかり

府中市　藤岡ヒデコ

喜べぬ記録をのばすのは日照り
風鈴に風を送っているひとり
35度みんな無口になっている
台風は嫌でも雨が要る畑
夏バテを知らぬか炎えるさるすべり

府中市　馬場利子

クラス会戦後の苦労語り合う
車窓から見える家並みなモダン
あのグラマン重ねみるよな赤とんぼ
パレットへ思い出の過去夏を溶く
たっぷりと青をふくませ絵筆取る

宇部市　平田実男

ワンカップ杖に柱になってくれ
大喰いを映す阿呆に観る阿呆
肩書きがとれて自分の顔になる
子離れが出来ない親を持て余す
合格をするまで神様仏様

美祢市　安平次弘道

良い話らしい笑って聞く電話
幸せは妻も健康管理する
条件は減ったがやはり嫁探し
コンサート聞きに土曜の街に出る
指の出る軍手で老いの庭いじり

東かがわ市　原　賢

がむしゃらに生きて涙は忘れさる
蹴躓くたびに足腰鍛られ
平凡にまさる倖ないと言う
未練などないが薬は飲んでいる
腹の虫そっと押さえて風を読む

東かがわ市　川崎ひかり

何んでもが美味しく食べるありがたさ
器からあふれる愛を盛りつける
孫連れて行けば楽しい旅になる
十人中十人ケイタイいじってる
雨宿り軒借る知人ない故郷

東かがわ市　伊勢八重子

盆おどり絆深めた里がえり
名月を肴に一献憂さ晴らし
心臓の鼓動を包む岩田帯
ひとりでは喧嘩もならず膝を抱く
自己流で季節楽しむ山野草

大洲市　中居善信

潮時かも知れないな冷めている
ユーモアが届いて来ない修飾語
こぼれ種小さな花が咲いて秋
沖の灯のあれは漁火暮らしの灯
おどり食いすんなり食べた訳で無い

西予市　黒田茂代

家中のどこにも行き場ない暑さ
花火師の技大空で演技する
夫婦共いつか草食系になる
体調を崩すと鈍る思考力
ジーンズの履ける若さがまだ残る

高知市　小川てるみ

素うどんが一番わかる店の味
真夏日が容赦はしないシミと皺
よそ行きの顔を仕上げるコンパクト
豆腐にも格差ピンからキリがある
遺伝子の数単純なわけがない

高知県　小澤幸泉

ラッシュにも負けない父のちびた靴
それぞれの秋を編みつつ旅の宿
赤と黒墓石に刻む夫婦愛
一枚の絵画に酔える父の青春
血糖値と仲良く暮らすことになり

唐津市　市丸晴翠

ワンタッチの傘が噂を撒き散らす
猪が先ず味見する自家菜園
使い捨て馴染めず納戸ゴミの山
仏壇に愚痴こぼしたり頼んだり
個人情報盾に気遣い断られ

生前の妻の癖など盆の客
精霊送り済んで一人の夏座敷
夏の雲朝から蝉の油照り
深夜帰るナースは午後もまた勤務
情ないインチキせねば渡れぬ世

唐津市　井上勝視

敗戦から以来ずーっと芋嫌い
金婚を間近かに妻が鼻につく
政党のからくりげっぷしてる民
喜寿の足ゆっくり思いは忙しない
学帽のない学生が頼りない

唐津市　坂本蜂朗

一字一音万葉仮名の歌碑に佇つ
涙さえ出ない娘の不慮の事故
献体を請われりゃ嫌と言えぬ親
信念があると無しとで変る運
頂点に立つと孤独の風が吹く

唐津市　山口高明

早朝の涼しさ照らす酷暑の陽
赤道直下はさぞやと猛暑まだ続く
テレビから曜日教わる老い二人
病院の薬真面目に四十年
雑草奢る庭から怠惰責められる

熊本県　髙野宵草

残暑厳しき中を鈴虫鳴き通す
渋滞の中の雷鳴身が縮み
外食のメニュー決まらぬまま帰宅
旅優先定期健診延期して
大鎌で草刈り体調確かめる

熊本県　岩切康子

第121回 大阪川柳の会

日時 12月1日（水）17時開場　18時締切
会場 サンケイホールブリーゼ　八階　八〇三号室
宿題と選者 △夜明け・平山繁夫　△胸・森中惠美子
△遠い・西出楓楽　△ペン・礒野いさむ
会費 千円　欠席投句　11月30日迄
〒532－0025 大阪市淀川区新北野1－3－4－706　本田智彦　宛

第60回 西大寺会陽川柳大会

とき 平成23年2月27日（日）
開場 9時30分
ところ 西大寺ふれあいセンター
岡山市東区西大寺中2-16-33
事前投句 兼題3題（各題2句）
『ひとすじ』　森中惠美子　選
『困る』　新家　完司　選
『耕す』　山口　流木　選
投句締切日 平成22年12月15日(水)(当日消印有効)
投句料 1000円（郵便小為替）
投句様式 専用用紙。又は、B5用紙に3題6句
投句先 〒704-8193 岡山市東区金岡西町833-4
野島　全　宛
TEL 086-943-4627
主催 西大寺川柳社
後援 岡山県・岡山市ほか

川柳塔の 川柳讃歌 ㉑

木津川　計

去るものは追わずほんとは逃げられた

村上玄也

人間は体裁をとりつくろい、格好をつけます。逃げられたとあっては世間体が悪いから「去るものは追わず」と鷹揚に構えるのです。表面を見ただけでは人間をとらえられません。人間の真実は、往々にして裏面に潜むと玄也さんも言うのです。

中国の名詩「去る者は日々に以て疎く、来る者は日々に以て親しむ」はむしろ表で、「来る者は拒まず、去る者は追わず」と変形して実は裏をもあばく人物の炯眼です。

裏表ない人だから頼りない

小谷集一

酸いも甘いも噛み分け、裏も表も知りつくした、そんな人物がもめ事のまとめ役に選ばれます。世の中を熟知しておればこそ、妥当な判断でまとめてくれよう、の期待です。

が、「裏表ない」真っ正直な人がおれば、「裏表ある」複雑な人もいます。広辞苑は「裏表」を「かげひなた」と説明します。そんな人物を待望するのは本当は恐いことです。政界に多い「裏表ある」人物が、公約やマニフェストと称する約束を反故にするのです。

立飲み屋嘘のつけない顔ばかり

柿花和夫

立飲みの安酒に酔う人生があり、美妓をはべらし座って飲む人生もあるのです。特等席に座る人物もおれば、生涯を立ち見席で送る人間も沢山います。

嘘をつけず、まっ正直に生きてきた人こそ報われねばなりません。が、人の世の表街道を誠実に生きてきた人たちの慰めが、立飲み屋であることに涙する思いで僕は恥じるのです。久しく立飲みしていない、と。

左遷地へ軽い握手で見送られ

鶴田遠野

東京駅の見送りはみな左遷めく、と言った人がいました。左遷されるにも訳がありましょう。昂然たる都落ちもあれば、悄然とした旅立ちもあるのです。

関わる人間を値踏みしながら人は生きています。その中で、勝ち馬に乗りたいのが人情でしょう。軽く握手する人がい、される人がいます。悲しい場面です。遠野さんもよく見送りの風景を観察しておいでです。

忘れることばかり謝ることばかり

白根ふみ

年老いて忘れることばかり、とは誰でも口にすることばです。もう一つ「謝ることばかり」もあるのですね。老いの切なさをふみさんに知らされました。以前納得したふみさんの句に「雑踏に入り立ち泳ぎで抜ける」があります。神戸ルミナリエの犇めきを、立ち泳ぎで抜けた夜が僕にもありました。

忘れてばかり、謝まってばかりで、ふみさんは小さくなるばかりです。回りの方にお願いします。ふみさんを守ってあげて下さい。

みんな死ぬそのことだけをなぐさめに

新家完司

（「私の一句」からも選んだ一句です）

完司さんともあろう方が僕と同じ思いになぐさめられていた、とわかってほっとしたのです。同病でなく、同憂もまた相憐れむのですね。たかだか百年で地上にいるいまの人間は例外を除き、一人残らず姿を消す、と知れたら選ばれた不幸は遅いか早いか、でしかありません。「しがみつくほどのこの世でなかりけり」と麻生路郎は、完司さんと僕のためにも詠んでくれていたのです。

（「上方芸能」誌発行人）

自選集

小島蘭幸

大阪は近い二時間ほど眠る
百歳の友から初物が届く
美術館うしろ姿の亡父がいた
妻が見てると卵が上手く割れません
古い屋根ばかりやさしい人ばかり

林瑞枝

雪舟の虎がいっぴき夜の散歩
鴉啼く裏の南瓜がよく笑う
惜しまれて呼べどかえって来る谺
悔い新た森の大樹で拭き清め
田舎出の魅力に都会っ娘が惚れる

前たもつ

一千号の隅に小さく名を刻む
大自然極暑沈黙秋彼岸
メモしても脳に書いてもよく忘れ
半年ぶり大阪城の土の道
趣味預け聖書を開く日曜日

政岡未延子

歌いながら陽気にまわる洗濯機
精霊とんぼまた来年も会えるかな
おとうとの音痴を私笑わない
過ぎ去った時間の中にいる弟
夏生きるためにこっそり呑む薬

三宅保州

三日月に腰を掛けたくなってくる
三日月の切れ味テストしてみたい
上弦と下弦と人も然りなり
生きている証のようにゴミを出す
もがいたら少しずつでも進むもの

宮西弥生

巻き戻す昭和純情物語
過ぎた日の数数繋ぐ古都晩歌
よろこびも失意も秋の出来ごころ
天辺の席で只管汗を拭く
ぼろぼろを紡ぎ合いして人と書く

八十田洞庵

海荒れた日の灯台は男の目
門閥も学閥も無くお人柄
縁を切る男へ胸のすく啖呵
がたがた言うな風が運んだ噂だよ
銀行で社長の決意ゆれてくる

上中下あって棺選びに迷う
俺の余生だ医者の忠告など聞かん
欲望の海犬掻きで渡り切り
人許すこれも明日への踏み台だ
君となら輪廻の渦は越せそうだ

両川洋々

東京都世田谷等々力渓谷
東大も慶応早稲田も見て回り
逝くまでにナポリに来いと言う絵画（上野公園美術館）
男性の首をかかえている美人
相続税どないなってるのか知らぬ

板尾岳人

たんとんとんコリコリ肩に可愛い手
緑陰にママと二人のブーランコ
揺れやまぬブランコ愁い抱いたまま
人恋し夜のブランコ泣いている
昨日は吐いて胸にいっぱい明日を吸う

奥田みつ子

お互いに自由尊重して夫婦
寡黙でも心が通じ合い平和
寺参り親友を誘って普茶料理
姑の味調理の秘訣落とし蓋
名刹の庭に心を癒される

河井庸佑

乗り越しもいいな熟睡できたから
輪になろう仲間外れがないように
脳内革命ひとときのかき氷
昔なら朝飯前に出来たのに
まだ過去に住民票を置いている

川上大輪

錆付いた釘が一番効いている
謀過ぎると墜ちる蟻地獄
寺の庭園水琴窟も秋の詩
碧空へ核廃絶の鳩が舞う
台風が日本列島狙ってる

木村あきら

霜月の月と楽しい恋遊び
たしかなる愛を枕に詰めて寝る
沈丁花わすれていない恋の歌
つくり笑いにいくたび男騙された
愛は風妬心も風に舞う峠

小西雄々

新聞紙に包んで贈る僕の秋
壮絶な戦いでした逆転打
何事もなかったごとく椿落ち
竹とんぼ遥か宇宙へ飛ぶつもり
逆上りヒマワリ後押ししてくれる

斉藤姦

塩満敏

これからは二千号めざして句作せん
今年も鶴彬忌やって来た
週一はデイケアで遊びます
つばめ達ミナミの国で元気かい
暇をみてぼつぼつ賀状の準備する

新家完司

糖尿病予備軍士官候補生
盆提灯点灯御先祖様歓迎
空調機器神仏以上熱帯夜
孫台風襲来仕事等不能
御手洗新聞持参禁止令

恒松町紅

八月の雲戦友の顔浮かぶ
ご近所に杖持つ人がまた一人
米寿の手クラスメートが振っている
炎天下軍靴の汗を思い出す
両替をしてもいつしか空財布

津守柳伸

満ち足りて戦後が疼く衣食住
バーゲンで時代錯誤を思い知る
横文字が癪なスイーツバイキング
円高が秋波うながすパスポート
枝葉付き交るリンゴの宅配便

遠山可住

珍しくこれはこれはの墓参り
起死回生母の祈りが深くなる
奥さまに教えてもろた安い店
ええとこはみんなわたしに似ていとし
夕立が天のひと味連れて来る

都倉求芽

土壇場の流れに確かな藁つかむ
遠い灯へまだ充電の日がつづく
訳もないのに不機嫌なストロー
人知れずスパルタ式を自己に課す
採血に身に覚えあり検査表

土橋螢

火の輪くぐりの戦争に負け残り
人殺す練習をした青春期
幅跳びも三段跳も夢の中
少年のとき飛びこんだ海である
死ぬことが難しいので生きている

中原諷人

秋の実のチームワークよ去年今年
きざはしに先達の祖も師の影も
椅子一つ放すものかなパラダイス
あれは裏切り人を導く言でなし
罪つくる虚言ばらまき症の風

片付けた部屋で思案がまとまらぬ
躓いた石でケルンが積めそうな
ダラダラとしてると見せて策を練る
昔話ばかりしている気の弱り
万病に効くと言われるウォーキング

西出楓楽

食文化例えばそれは鯨カツ
オムレツを稽古している父子家庭
ゆで玉子おでんつぎたす妻の留守
牛丼のチラシが競う新団地
お隣と同じ時間に秋刀魚焼く

仁部四郎

京都塔の会 第64回 秋の吟行句会

日　時　11月29日（月）午前10時半集合
集合場所　阪急「桂」駅西口送迎バス
行　先　大森サン・バレイ
行　程　桂―嵐山パークウエイー周山街道―大森サン・バレイ
予　定　12時昼食　1時句会　4時頃帰路
兼　題　「当日雑感」「○○心」「運　ぶ」「効　果」各題3句
会　費　5,000円（当日いただきます）
申し込締切　11月20日
申し込　申し込票にて　都倉求芽　まで
〒600-8428　京都市下京区松原下る弁財天町328-202
℡ 075（351）4109
080・6113・4342

温故知新

川柳句文集『川柳寄席』

不二田　一三夫

ヘルスセンター姥捨山にされている
孫弟子の稼ぎまくるを見るテレビ
長生きしすぎたとおもう老芸人
「早慶戦」寄席の神話として遺し（横山エンタツ死去昭和46年）
寄席囃子ここでも食うか食われるか
女芸人楽屋で衣装くらべあい
おんなトリオ相も変らず顔のこと
夫婦別れしたけど舞台そのまんま
恵まれたコンビ夫婦という強み
志ん生という教科書が一つ減り（古今亭志ん生死去昭和48年）
辛辣な批評は客席からアクビ
笑わないしぶとい客をもてあまし
爆笑のあとをこわごわ出る高座
新作へ初心忘れぬ老眼鏡
台本が読めずテープでおぼえこみ
拍手まだ楽屋へ追ってくる冥利
名コンビ師匠をもったいなくも撲ち

【昭和51年発行　著者不二田一三夫氏は川柳雑誌、川柳塔誌編集人・漫才台本作家・秋田實主宰『漫才』編集担当者】

西出楓楽選

風入れて発想ガラリ変える脳
種袋の底がそろそろ尽きて秋
進行はあなた任せのバスツアー
不揃いのリンゴ豊かに出す個性
幸せは卵に黄身が二つあり
僕よりも軽い悩みを聴いてあげ

和歌山市　上田紀子

立ち直る力をくれた一行詩
内視鏡医師の笑顔にホッとする
この先が解らないから夢を追う
子のために楔しっかり打っておく
小休止すればヒントが見えてくる
アングルを変えて楽しさアップする

和歌山市　福井菜摘

栃若時代ぼくの家にもテレビ来た
生き甲斐はゴルフ麻雀酒に馬
お歳暮の中味も見ずに礼を書き

堺市　内藤憲彦

初孫が生まれ思わず指鳴らす
お賽銭自然とはずむ七五三
明日からゆっくり生きて行くつもり

奈良市　大久保真澄

抜かりなく年と体重増え続け
謙遜も自信過剰も自己顕示
巣立つ子に親が自立を促され
ごろごろと音がしそうな怠けぶり
子の虐待天の憶良は何と詠む
これ以上脱げば犯罪ああ猛暑

河内長野市　木見谷孝代

棘のある言葉は丸くして返す
絵筆持つ心はいつも無心なり
青空が憎いと思うほど降らず
手入れする野菜をほめて育てる
喋りすぎひとりピエロになっている
欲ばってばらばらこぼす夢の種

良心に従い気持ちよく生きる
怒らずに賢く生きる老いの知恵
ややこしいことはすずしくなってから
酒量減る注意信号かも知れぬ
定年後徐徐に替わった主導権
波の音聴くと心が軽くなる

神戸市　木村忠義

平和っていいな言葉がまるくなる
エアコンの悲鳴止まらぬ熱帯夜
記録的猛暑地球が壊れてく
紅一つ引いて猛暑の中を行く
言い訳を考えている負けている
思考力戻してほしい秋の風

横浜市　川島良子

ユーモアで少し色付けする会話
悪態もユーモアのうち飲み仲間
住む場所をゲリラ豪雨に乗っとられ
夕立が甘露甘露の草である
八月の暑さ歴史を塗り替える
雑草の強さに夏も冬もない

大洲市　花岡順子

もう飽きた暑いですねの挨拶も
三十年つき合ってます四十肩
ペンションの主無口な人で良し
還暦の祝い母親からもらい
ペイオフや円高とんと縁がない
途中下車美味いタコヤキ屋を見つけ

大阪市　高杉力

この猛暑眠れぬ夜のもの思い
飲んだっけ残りの薬数えてる
百合活けて心美人になりました
今日よりも明日が良い日と頑張って
笑う字も怒ってる字もある日記
出かかった言葉奥歯で噛みころす

篠山市　石田久子

天命と知ってる森の蝉しぐれ
潔く三分で果つ砂時計
リベンジに燃える男の坊主刈り
審判も共に闘う炎天下
逆転の一球神はよそ見した
夏やせも爪には伸びるエネルギー

岐阜市　平野あずま

胃カメラがついにマグマを探し出す
新盆にお酒が無いと遺影の目
大文字見とおみやすと団扇風
深呼吸血圧計と向かい合う
手の出ないものは嫌いと言っておく
広い視野人の粗まで見てしまう

堺市　澤井敏治

メルボルン　藤原ポン吉

シミにシワ思案かさねてハデな服
長く濃い服でしのいだ二段腹
母からのお下がり今のニューモード
虫食いの穴や破れでシャレた服
ネクタイの結び伝えて子が巣立つ

塩竈市　木田比呂朗

スパートと十一月のカレンダー
去年まで代返出来た百五歳
ついてないパソコンにまでごねられる
ケータイを忘れ一日落ち着かず
割当てで町内会のボランティア

栃木市　岡野すみれ

東京へお金を捨てにゆく息子
この写真まだガン告知される前
なさぬ仲互いに秘密守りあい
老人の曲る背中にある歴史
花火音ばったり止んで虚脱感

東京都　井上つよし

熊蝉がわが世の夏を謳歌する
エアコンも暑中休暇が欲しくなり
熱中症の悲鳴にも似る蝉の声
土砂降り猛暑時候挨拶書きにくい
抱き合い心中矢張り芝居だったらし

東京都　高岡弥生

日差し浴び家屋も欲しい日焼け止め
廊下より教室暑い小学校
免許取り出かけた子供待つ深夜
暑くてもお腹欲しがるホットティー
水害や地震に弱い都市機能

昭島市　野口忠

長生きの秘訣はちょっと太目とか
遼君の出ない日はないコマーシャル
一夜だけ月下美人の香に抱かれ
おっとっと下戸も乾杯だけは干す
飲屋には総理候補がたんといる

横浜市　巌田かず枝

寝付くまで扇いでくれた優しい手
三回忌母の日記はそのままに
母さんを年を取るほど思い出す
ドクターに縋り付くしかない患者
空想の世界へ孫の供をする

富山県　有澤嘉晃

聞き返す耳から招く内緒ごと
呑気ではないの仕事がないのです
百貨店ひと足早い秋の色
むしゃくしゃもぎくしゃくも消す青い空
ルビなしで読んでもらえぬ子の名前

神風が吹くと信じた乙女の日
今朝もまたついうっかりで始まりぬ
五人目の曽孫誕生逢えるとは
生れし子この世の中をどう生きる
今日もまたここらでちょっと一休み

静岡市　渡辺芳子

夢で見た親の笑顔をもう一度
バカ野郎何んで俺より先に逝く
育ちすぎアッと言う間の夏野菜
黒わくから微笑んだ母喋りそう
古希坂に爪と髭だけ良くのびる

江南市　脇田雅美

ランダムな指名の好きな閻魔さま
ギブアンドテークで貢ぐ下心
贈賄にならぬ程度の心付け
早口の披講に耳が置いてかれ
脈搏がアップテンポのプロポーズ

豊橋市　藤田千休

気づかってくれる人ありかもめーる
墓参り先祖の声か風の音
人生劇場九回裏はサプライズ
等間隔で行く雲水の急ぎ足
重い命こんなに軽い骨となる

京都市　清水英旺

ゆっくりとできるつもりでいるあの世
ありがとね花に水やりながら言う
まあいいかそのうちなんとかなるやろう
九月かな疑いたくなる九月です
せなアカンこと多いけどこの暑さ

大阪市　安藤なつ子

話聞き背中を押してくれる友
息子一家盆に二時間やっと会う
ジミーの絵色がはねてるおどってる
デパートの心地良い風秋を買う
さるすべり猛暑に咲いて誇らしげ

大阪市　笠嶋恵美

長い歴史の千号に遇う幸に謝す
超高齢が敬老会の出演者
近所みんなとお医者通いに手をつなぐ
猛暑攻めクーラー背負い生き延びる
リハビリの体操耐えるしびれ足

大阪市　片岡松枝

易の灯に一瞬揺れる時がある
愚痴こぼし合うのに集うティータイム
通夜の席赤の他人と通じ合う
土壇場の力と勇気母ゆずり
寝返りを打っても冴えて来る怒り

大阪市　西川更紗

大阪市　橋村容子

褒め言葉一言あって気負い立ち
空仰ぎ気力で活きる今の僕
かげろうがゆらぐ歩道に人の波
広告につられて動く人の波
酷暑ぼけ右脳左脳も小休止

大阪市　平井露芳

猛暑でも休まれません医者通い
平均寿命延ばす検査と薬漬け
日本国何とかせんといかんぜよ
未だ来るの早いと先祖言って居り
旧姓は何だったかね銀行さん

大阪市　松田聰

親の死を隠し年金もらう人
円高に喜ぶ人と泣く人と
矢の如し追いつめられる締切日
好かん人に優しくされて身構える
喜びは続いた柳誌千冊目

大阪市　吉田和之

迷い箸父は厳しくたしなめる
混む車中ミニ放列に目のヤリ場
修行僧三度の粥に手を合わす
識者でも読めぬ名前が流行ってる
此の猛暑和装姿が凛と見え

泉大津市　助川和美

国産の松茸と肉食べたいわ
ないしょやで言った本人言いふらす
無理するなおかゆも炊けぬ亭主言う
クーラーが風鈴の音を消す残暑
猛暑にて秋刀魚に変るイワシ焼く

泉佐野市　稲葉洋

体脂肪冬に向かって怠らず
名月に先ず一献と老いひとり
昼の月昨夜の忘れもの気付き
本日は目出度し傘寿にて候
先ず母の次に女房色に染み

池田市　上山堅坊

ポケットの運を信じて歩いてる
失言を咄嗟に庇う友がいて
シャワー浴び少し元気な夏の午後
何が本音だいつも自分に問うている
お付き合いゆるい縛りで長続き

茨木市　島田誠一

苦労してつけた学歴背にニート
ここだけの話はみんな知っている
老舗だと音で知らせる古時計
この人に喋ると知れる社の噂
ヘボ英語止めて身振りが良く伝い

待っていた秋刀魚不漁で当て外れ
平成に姨捨山があちこちに
長寿には耐えねばならぬ事ばかり
同窓の安否気になる熱帯夜
保険料きっちり納め介護なし

河内長野市　木太久　正一

蟠りほぐしてくれた塩むすび
沢山の知恵を絞れる祖母の腕
思い出を袋に詰めて球児去り
入出金バランス取れずまた赤字
嘘見抜く黙った母の千里眼

河内長野市　谷　久美子

昼下り唱歌流れていた校舎
歌手の夢持って駅前弾き語り
器量良し仲間に一人居て揉める
深い眠り誘ってくれる万歩計
明日というまっさらな日を待つ眠り

河内長野市　針生和代

初めての客に毎度と言うてはる
おでこには探し回った眼鏡あり
コンピューター僕の器量を笑ってる
気がつけば何を探しに来たのやら
若い時詰めた知識が出てこない

河内長野市　松岡篤

口の先骨身惜しまずよく動く
稲穂揺れ風の手足が見えてきた
目的を忘れて手段もてあそぶ
悔い一つ瞳の奥に揺れている
屈託が心に棲んで晴れぬ胸

河内長野市　山室光弘

お腹だけ威厳そなえるメタボ夫
俺の名と同じ名がある訃報欄
コンビニで手軽に買えるエネルギー
サイズLだんだん数字増えつづけ
青筋を立てても子供へのかっぱ

岸和田市　中岡香代

そこ値知る主婦良い物を安く買う
一つ上だからと上座すすめられ
認められ一日心日本晴れ
安いから買って後悔不用品
お茶席で足がしびれて気もそぞろ

堺市　近藤治子

痩せる思いしてもサイズは変わらない
土産物一足先に宅配で
こんなことなんで悩んだ若い頃
拝まれても出る知恵はない金もない
なっとくしたと口では言うが目はそっぽ

堺市　羽田野洋介

欲少し残して明日を待っている
朝取りのトマトバイクでやってくる
ときめきは忘れてませんまだ六十路
写メールで月下美人が届けられ
所在不明なんと悲しき長寿国

高槻市　島田千鶴子

第九条ほんにいいもの頂いた
遥かなり蚊帳と団扇の夏模様
灼熱の恋に負けじと油照り
くま蝉の死骸ころころ秋の風
久々に赤い表紙の智恵子抄

豊中市　荒巻夢

わがままを味方につけて喜々と生き
いい訳を猛暑のせいにできた夏
クーラーと切っても切れぬ仲になり
コーヒーがやっと美味しい朝になる
ほおずきの明りをつけて亡父母を待つ

豊中市　池田純子

千号の人間賛歌先ず乾杯
颯爽とわけありバーゲン着て元気
ふっとした失言友が遠くなる
この暑さ人絶滅の序章かも
人住まぬ里の寺には狐狸が住む

豊中市　源田啓生

いつまでも子の成長を願う脛
農に生き農を愛する友がいる
ボンネット猫が残した江戸小紋
靖国の御魂が在ってこの平和
三面鏡今日も私占なって

富田林市　古田千華

エコ減税廃車山積みしてる無駄
虫の声体感温度下げている
熱帯夜月見だんごも汗をかき
今日のやる気は青空がくれた
幸せを掴んだらしい友の顔

羽曳野市　宇都宮ちづる

小雀も祖父もにっこり豊作だ
金木犀香りは強し明日は雨
生野菜色や姿のファンタジー
くさめ三つ風邪とは判る体験者
防災の訓練真剣さまだ足りず

羽曳野市　安本美喜

じいちゃんと呼ばれ二歳と積木する
脱サラで栄枯盛衰身にしみる
ふっくらつやつやお米は天日干しがよい
ネクタイを替えて気分を引きしめる
ボランティアと趣味に嵌まると底がない

東大阪市　西田いくひろ

所在不明家族の絆問われてる
犬猫も家族に入れて年賀状
いざという時は家族に助けられ
いとこ会昔話に花が咲き
好きな事出来て夫に感謝状

枚方市　河田洋子

沖縄へ紫紺深紅が海渡る
再挑戦土持たず去る甲子園
ロボコンに青春の夢世界一
暫くは育児休暇初体験
風切って檀家を回るミニバイク

箕面市　寺井柳童

兎も角と娘に携帯を持たされる
杖を買う要らぬで母と娘で揉める
したたかに生きた軌跡は忘れない
原っぱに子供がいない夏休み
温暖化僅かに旬がずれていく

八尾市　赤木妙子

産声に立ち会いパパのシャッター音
寝言では本当のことを言ってます
健康が明日の運気を呼んでくる
長寿国戸籍の上のことだった
パソコンのトラブル孫だけが頼り

八尾市　田邊浩三

贅沢に囲まれ育ち愚痴ばかり
サービスの裏に商魂見えみえで
温い友ほどほどの距離心得て
生き下手と死に下手同居八十路ゆく
幸せは自分の足で歩むこと

八尾市　中島春江

農園の自慢話に茄子主役
蚊が秋に異常繁殖要注意
大相撲空席目立ち翳り見え
イケメンのゲストに一度呼ばれたい
八十六年命ある句を生み続け

八尾市　前田紀雄

カレンダーにつけた印が意味不明
つばくろの末っ子今年も飛び立って
アルバムを整理のはずが日が暮れる
ひまわりの色紙外してコスモスに
来週の約束迷う歳になり

八尾市　山根妙子

歳月と生き方刻む深いしわ
子に躾けられて厳しく老い自立
幸せは何か打ち込むことがある
返事ない愚痴仏壇へ語る老い
あの気骨失せて尻尾を振る孤老

大阪府　小栢こずえ

子供から贈られ気付く敬老日
電話口柔らかそうで絆される
内緒やと隠していても目がばらす
健診の結果知るまで気もそぞろ
朝顔に明日も咲くかと訊いてみる

大阪府　初代正彦

幸せを感じるあつあつの御飯
感性が豊かその気になりやすい
通院で待つ忍耐を鍛えられ
親子とは何だと思う記事ばかり
ネグリジェのような服着たアナウンサー

大阪府　神野千恵子

家中に爽やかな風招き入れ
つんのめりエノコロ力む夕野分
音符なき虫のコーラス最高潮
越冬の相談するか小鳥二羽
のんびり屋に釣瓶落としのサスペンス

大阪府　高木道子

霧包むあいだの山をふところに
乾き切るセメント状の土となり
猛暑避け猫も地べたで身を冷やす
姿作り捌いて飾る妙味あり
朝露をたっぷりためて茄子元気

大阪府　西川冷子

ストレスが老いのハートに絡みつく
玄関に色とりどりの靴の華
刻むほど辛さ負けん気唐辛子
煮えたぎる地球の悲鳴か滝の汗
メロン狩りメロンの尻を撫でて採る

大阪府　畑中節子

わだかまり溶ける極上のスイーツ
まあいいかすぐ妥協する加齢とは
あやまちはアダムとイブのりんごから
一人が好き一人が寂しイチゴジャム
夕焼けが団地六畳間を染めて

神戸市　白川淑子

本読めよ漫画もよいと言い聞かす
独り居に今も表札亡夫の名
キャンセルを信じて待って粘り勝ち
病歴を自慢しながらタバコ吸う
禁煙はやはり無理だと今も吸う

尼崎市　市坪武臣

千号のご縁ありしにただ感謝
エアコンの助けを借りて夏を越す
秋風に稲の穂日日に頭垂れ
杖を突く時期をそろそろ考える
癒された犬介護する時がきた

尼崎市　小池幸子

川西市　日野岡和之

引き分けはどちらも勝ちと笑い合う
穏やかに包み隠したど迫力
闊歩する足で地球を回す気で
健康は先ず足からと一万歩
川柳をひねりひねって脳トレ日

篠山市　北澤稠民

秋虫が出番未だかと待っている
この暑さ農作物も悲鳴あげ
年金に感謝しながら日々送る
実る穂を手の平にのせじっと見る
この夏は冷気なしでは生きられぬ

篠山市　酒井真由

亡き父の言葉じんわり効いてくる
いろいろの風いろいろの人へ吹く
古書街を抜け夕焼けの中帰る
回想の波が寄せたり返したり
名案がうかぶ吊り皮揺れている

篠山市　沢山啓子

蔵出しのスターが父の目をしてる
炎天にじりりとエゴがこびりつく
擦り切れたフレーズ糠味噌に埋める
うっかりや刺草枯れてしもうたは
絵具いろいろどの色先に捨てようか

篠山市　永井かほる

暑い夏西瓜今年は大あたり
自家製の西瓜の味にゆたかな気
家の中33度狂いそう
久し振りめぐみの雨にすくわれる
ガス器具をかえたら脳が右往左往

三田市　辻開子

売上げが猛暑でのびた水ビール
愛犬に主人ももたぬ席作る
疲れてはいないはずだが出る吐息
海の日の素足の浜辺忘られず
旬の香がぶらり寄らせる道の駅

西宮市　泉水冴子

生活の手段キーボードに慣らす
ＩＴに魔物が居そう泣かされる
新聞を読まなくっても困らない
傍目には元気印のおばあちゃん
直葬でお願いと書く遺言書

西宮市　株元玲子

激痛に心が折れて無口になり
痺れる足老人の意地打ち砕く
大丈夫いいきかせつつ迷路行く
老親をいたわる気配まだ見えず
こんなはずじゃなかったのにと嘆く絆

冷酒が心の襞を縫うてゆく
通院が出来る間は安心だ
熱中症逃れ写経の筆を取る
隣りの子叱って塀が高くなる
記録的猛暑列島不整脈

西宮市　寺井秋果

大粒の雨をまくらに眠れそう
だからからヒステリックになる模様
こってりと絞り出してる脂汗
おやすみのメールが欲しい秋の空
魔窟へと吸い込まれそう赤い月

西宮市　吉井菜々子

青丹よしせんとくんとのツーショット
二百十日何事もなく暑さボケ
海温の低いところへサンマ逃げ
生真面目がしゃれた句作り邪魔をする
予定表ぎっしり詰めて生きがいに

奈良市　前田弘恵

一時も離したくない扇風機
猛暑でもなんとなく秋空の色
路地風に風鈴の音心地良い
走り穂の風の匂いに安堵する
メールより声が聞きたい雨の夜

奈良市　矢野良一

赤とんぼ秋の虫でもまだ猛暑
権力を一番に置くエセ政治
沖縄の夢を叶えた甲子園
周平の海坂藩に人の機微
冷房の温度がもとで別居する

奈良県　谷川憲司

秋の虫腹の中から鳴いている
宣伝に負けて地デジに買い替える
ベテランも迷う子供の育て方
夫にはお宝だけどごみの山
酒たばこやめてストレスだけ溜まる

和歌山市　磯部義雄

空睨み出番待ってるコンバイン
砂浜で誰を待つのかお月さま
サプリメントどれも効くなら医者要らず
長い夏もういいかいと彼岸花
一日一つ面白い事見つけたい

和歌山市　根田よしこ

蹲いた時に寄り添う五七五
揺るがない父の背中に辿りつく
溜め込んだ塵と埃を振り払う
山坂を越えて大地に根を下ろす
つつがなく今日を迎えて米を研ぐ

岩出市　藤原ほのか

電気代どうでもいいと言う猛暑
死後のこと寝つきを悪くする仮想
身の回り整理したいと思う年
相談に心うつされ長い夜
物忘れ二人は今日も名勝負

岩出市　村中悦男

激震に耐えたあなたの力こぶ
わたくしのまん中辺が不透明
二人目の私がつんと責めに来る
ほかほかと突発性の恋ごころ
兄作る有機野菜で夏を越す

海南市　小谷小雪

然るべき時正論を吐く無口
運のない雑魚は水にも流される
水たまり覗くと浮いてきた微罪
一人っ子無菌室から出られない
秋の陽が真っ正面に斬ってくる

紀の川市　宇野幹子

名言の中から捜す生きる糧
夢うつつ虹の絨毯織っている
虫食いの辞典のような記憶力
夜の音拾って歩く過去の恥
花の香を嗅ぐと目覚めてくる希望

紀の川市　辻内次根

流れてる時間の上で浮いている
恩恵を返せぬままにぶらさがり
仕事終えグラスの底にひとり言
化けて出るほどでもないが憎い人
父の道を目指して息子ジャンプする

橋本市　石田隆彦

農業研修平均年齢七十歳
猛暑続いて植え付け出来ぬ秋野菜
いつのまに私の孫が選挙権
使い道あって年金貯金する
昼食は茶粥冷やしたグルメ食

和歌山県　森下よりこ

飽きるほどお肉食べたい体脂肪
飽きたのかペットフードは減りはせず
土壇場で転ばぬ支度木を植える
ことさらに言い訳しない流れ雲
田の稲は頭を下げて支度する

鳥取市　大前安子

歴史的酷暑八十歳の夏
八十歳まだまだ呆けてなどおれぬ
新サンマ三分の一付けてある
人生はきれい事では生きられぬ
そのうちに寒い寒いと言う冬に

鳥取市　近藤秋星

鳥取市　坂本智子（なつみ改め）

魚干し飛びつく猫は宙を舞う
慈雨が降り草木も命吹き返す
説教は聞き飽きました妻許せ
夕焼小焼好きな彼女が嫁に行く
恋をした彼女に小骨みな抜かれ

鳥取市　津村律子

我が町に熊まで出たと回覧板
赤トンボ黄金の波をスーイスイ
捥ぎたてのトマト眩しい朝の膳
嬉しいね自分で風呂に入れます
今日の汗流した分の福掴む

鳥取市　前田孝子

間違いも長い人生たまにゃある
ちっぽけな悩み気にせず生きている
かけがえのない人生を共に生き
気の強い私にあなた丁度よい
思い込めあなたの胸に矢を放つ

倉吉市　倉繁泰輔

脳トレに難問クイズ解いている
朗報は予感どおりにやって来ず
平穏に波風立てぬ老い二人
生涯に一度は花を咲かせたい
一升瓶いつも手許においてある

米子市　後藤宏之

隠してたブランド嫌い実はウソ
値上りで買いだめするか禁煙か
芒野を思いめぐらせあれこれと
秋雀団体戦で飛び回り
五十年終戦の日に同期会

米子市　後藤美恵子

名月のスポット浴びて独り酒
絡みあい咲く朝顔に妬けている
台風に耐えたコスモス力まない
夏枯れに錦まとえず散るもみじ
明日を見る老眼鏡を拭いて寝る

米子市　竹村紀の治

スイミングふっくら同士仲が良い
ゴキブリに動体視力試される
二次会で止せば良かった二日酔い
暇になると遊びの虫が目を覚す
問診に金欠病も入れて置く

米子市　田村周子

押し売りのことさらの世辞聞き流し
黒い露払って進めお角力さん
敬老会ちょっとおしゃれで二人づれ
日々のどか平らかなこと有難や
いつまでも続く猛暑と戦いだ

ロボットでないから私疲れます
割り勘の貸したお金が返らない
猛暑日に梅干ひとつお茶に入れ
金婚の夫婦仲良く祝い膳
笑顔より怒った顔の似合うボス

米子市　中原章子

監督の予感背負って立つ打席
自家菜園虫の残したものを食う
皺たるみそれがどうした胸を張る
副賞の金一封が狙いです
遅いのは偏平足のせいにする

米子市　成田公一

灼熱のありがたすぎる布団干し
感性に休暇与えている猛暑
まだやれる暗示そろそろ切れてきた
買う物が減ってカードも邪魔になる
捨てに行く嘘はやっぱり深い穴

鳥取県　加賀田志延

息抜いてプラス思考に変えてゆく
許そうという気になった青い空
かけ違うボタンが波を引き起こす
心身の虫干しをしてカビ落とす
ほどほどに忘れることで生きられる

鳥取県　西谷悦子

生き方をかえて人生楽しもう
夫婦いて互いに杖になる動き
必要とされているから元気でる
さまざまな出合いがあった長い道
さまざまな苦労があった若い日日

鳥取県　橋谷静江

エコ給付テレビに車慌て買い
新刊のニオイが好きと読書通
決心のマンモグラフィー痛くない
衣装借り平城宮の風に立つ
ダイエット次々本が出ては消え

松江市　松浦登志子

暑くてもアンテナだけはピンと張る
雑草の我慢強さに負けられぬ
笑顔には弾ける言葉隠れてる
痛いとこ手が慰めにかけつける
雲が行く秋を含んだ匂いする

松江市　山根邦代

素っぴんの描いた顔より愛らしい
店頭の桃はうぶです触れないで
久し振り靴を磨いて何処へ行く
似たような夫婦と言われウッフッフ
遠回りして来る話ややこしい

雲南市　菅田かつ子

雲南市　武島ちよえ

もう少し先が見たくて薬飲む
おーいお茶聞けなくなって早七年
貼り薬届かぬ背へ四苦八苦
繕えばよりややこしくなる話
常識のないのが大手振って行く

美作市　小林妻子

敬老会まだ現役というお方
また今日も肉のメニューと大家族
扇風機今年は昼夜無休です
白菜だ大根だ暑うても秋だ
国文祭岡山県が鳴って居る

竹原市　國實力

短命を切り札にして蝉は鳴き
ＤＮＡの薄いコピーが孫に出る
会えるかと一・五倍の回り道
どちらにも似ずに育った噂の子
ある日コロリ願いながらの万歩計

竹原市　若年幸子

何よりもクーラー命この暑さ
東京の看板日本語を捜す
立ってると必ず席を譲られる
余生は鈍行車窓楽しむことに
親看ぬがペットの生涯看ると言う

竹原市　土井輝恵

耳にアイポットテレビもつけてする宿題
性善説それが私の不満です
夫より同級生の旅選ぶ
検査よし猛暑に勝った自信つく
二十四時テレビ健康の幸胸をうつ

竹原市　六田半徳

秋めいて部屋の片付け取り掛かる
硝煙を駆け抜けた友今いずこ
秋祭り自家用豆腐母の作
手づくりの万華鏡から夢のぞく
民主党党首は誰がなろうとも

宇部市　高山清子

雑談の中からさぐる肚の虫
八月の雲は昭和を映し出す
ピリ辛で不快指数を乗り越える
便利さがすぐゴミになる使い捨て
さりげなく褒めてやる気にさせる母

阿波市　三浦千津子

曖昧な相槌だから外しとこ
和を保つ堪忍袋返し縫い
ライバルの含み笑いが気に刺さる
振り向くと立ち枯れになって来た野心
肩の凝る話はしない日向ぼこ

作り笑いの底が次第に読めてくる
微笑した瞳の謎が怖くなり
すぐ曲がる釘が自分を笑ってる
健康にいいと言うから笑いましょ
生きている証しのようによく笑い

今治市　渡邊伊津志

血液型はユーモア型と言っておく
すいとんを煮ると昭和が浮いてくる
偏人の店主ではやるラーメン屋
パス回し上手な妻の小銭入れ
くすぐれば貴方はきっと本音吐く

四国中央市　篠原久

八十年オッチョコチョイで恙ない
七転びもっと転んだかも知れぬ
扇風機金鵄勲章あげようか
四季告知ひやと燗との酒の味
明朗闊達じいの遺訓として大書

香南市　桑名孝雄

残り火が馬鹿にはならぬ喜寿の恋
老夫婦まだ現役の鍬を振り
爺さんが日の丸揚げた敬老日
赤字線ここにもあった縄電車
世間体世間に何の義理がある

香南市　近森功

シーサーが基地の行方へ目を凝らす
温もりが欲しくて枯葉吹き溜まる
尻尾振らねば仲間はずれになる予感
趣味の会まだ役があるありがたさ
そっぽ向く人へお世辞を言う落ち目

北九州市　岡田幸生

みな薬のんで揃いの宿浴衣
人の手を借りずに長く生きたいね
何もかも水に流して灰汁を出し
できること悔いのないよう心がけ
老いて子に従う電話かかりくる

唐津市　岩崎實

塩漬の駄句に未練の雑記帳
知的には遅れをとれど祖母介護
耳鳴りは別れできない居候
盆参り行けるうち良し八十五
御仏前冷茶にします熱中症

唐津市　北村松風

現実と夢がさまようボケ進み
風吹けば子孫を残す種の旅
夫逝きて戦友会で励まされ
老大に若さもらって四股を踏む
我が子でも注意するのも怖い世に

唐津市　吉冨節子

八王子市　上原酒坊

ビァガーデン暑さ凌げぬ蝉しぐれ
お彼岸に亡父の声する風の音
すれ違う元カノの目は空泳ぐ
本心はカガミの中にいる私

佐渡市　髙野不二

千円の時計で余命よりは持つ
あと何年生きる積りか本は買う
体重計コンマ以下までくらべてる
朝からの電話保険と薬売り

大阪市　太田としお

ネグレクト隣は何をする人ぞ
ネグレクト虫も殺さぬ顔をして
たっぷりと弾んで長い経を聞く
腐るほどお金があって友がない

大阪市　前川善之

平和の鳩フン害おこしこまらせる
マジシャンの手際の良さに目を見張る
母はまだかつお削ってだしを出す
いつまでも迷い続けてまだ独り

大阪市　吉川弘泰

ぴったりと我が季節だと鈴虫が
ウィンドーは秋の装い撫でる風
解凍をしても本音は出てこない
おおきには人の世称える温い風

河内長野市　内海綾乃

歳をとると何かにつけて涙出る
酒に酔いお小言だけは堪忍ね
温泉宿ロビー琴の音たまらない
願い込め宝クジ買うスカばかり

河内長野市　梶原弘光

暑気あたりの案山子にも水かけてやり
ＯＢ会早速比較万歩計
切り出せぬ話の時は友を連れ
ナンバ着く頃に気になるガスと鍵

河内長野市　辻村洋子

女房の含み笑いに棘チラリ
メロドラマ未だに好きなお婆ちゃん
お裾分け生け垣越えた隣人愛
ばあちゃんが宿の女将に夏休み

河内長野市　宮守正博

病院の待合室は皆達者
嬉しくて金魚の水をかえてやる
お父さんペラペラ喋るからばれる
よく喋る男のなんと軽いこと

河内長野市　山本エミ

夕餉の膳孫がゲストの夏休み
夫婦仲荒れないように黙秘権
お茶一杯荒れる心もホットする
美味い物食べ放題へすぐに乗る

寝屋川市　岡本　勲

阿波踊りぼくを阿呆にしてくれる
ふる里の記事に包んだ芋届く
太っ肚と言ってほしいとメタボ妻
宿題は核なき平和被爆国

寝屋川市　小谷滋彦

バランスをうまく取り持つやじろべえ
暑気払い活を入れるに苦労する
気合いだとしらじらしくも拳振り
見えずとも心高鳴る遠花火

羽曳野市　仲谷真一

母亡くし笑いの無い日過ごしてる
おそすぎた婚活そろそろ始めよう
胃カメラをのんでわかった胃年齢
黒船に乗ってみたいと思ってる

枚方市　小川良吉

傘寿越え猛暑にも耐え今日を生く
円高の高波越えよ日本丸
朝ドラのセリフに今朝もやる気出す
夏弱い妻によいしょと皿洗い

枚方市　坂本ミヨノ

ゆっくりと文殊の知恵で見栄をきる
敬老日リボン結んで拗ねている
思い出す父の風貌鬼やんま
デコボコ道舗装をされて田舎消え

大阪府　坂口公子

スケジュール抛り出させて秋の客
久し振り土産交換会でない
のどから手びしゃりといかぬのが惰性
孫曽孫いつまた来ると言うオモチャ

大阪府　中井記久乃

誕生日この年なればケーキなし
パソコンに振り回されて汗だくに
今はなきびしき義母を思い出す
庭先のひまわりにこり首かしげ

大阪府　若月祐作

紙吹雪舞って舞台を整える
縄張りへ来るなと蜂が怒り出す
つくり笑いして鏡台を困らせる
万灯籠川面に映えて影を追う

神戸市　山根弘子

開演のベルが気になる初舞台
日暮道えんえんと続く愚痴話
大海を舞台に釣師大漁旗
家の中妻が主役で見えをきり

加東市　安達厚

墓地だけが絆と思う里の道
高速道シルバーマーク儂だけか
平和なら命は長い方がよい
同い年入歯のことで小半時

いつまでの残暑かチリ紙雨坊主
十七回忌ひとり暮らしは草臥れた
杖ついて敬老会へ顔見せに
乾き筆濡らすひと時そろり秋

加東市　岩本美緒子

診察を待つ間うつむく人ばかり
台風は少し雨涼おいて去る
芽を出した白菜苗へいやな虫
暑いから鰻横眼にみて思案

加東市　黒崎美紗子

虐待に助け求めるランドセル
記念日をあの世と結ぶロゼワイン
布団干しそっとたたいて隣家見る
寡婦になりはため気にせずケセラセラ

川西市　岡嶋洋子

世の旅路自立の歩幅立て直す
幅のある男心に恋をする
赤子抱く母に戸惑う姉二歳
あやまちに素直になれぬ別の顔

三田市　尾崎一子

天命と神と仏に従いてゆく
残照のあの坂の上萩の寺
人並の暮らしコスモス揺れる庭
追憶のまわりは秋の花ざかり

篠山市　谷田多美子

薬にも毒にもならずマイペース
まぐれやで謙遜している口先は
悩み事解けて心は虹色に
友がいてライバルも居て元気出す

篠山市　藤井美智子

家紋とは何ぞやと問う子の世代
ここまでが限度と決めて楽になり
叫びたい心の闇を引っ剥がし
悟りなぞとうの昔に諦めた

宝塚市　丸山孔一

困難な仕事にいどむ孫娘
わが耳も蝉に負けじとうなっている
終戦日モンペ竹やり思い出す
赤子泣き母親までが猛暑負け

三木市　山口久子

見回せば無くて過ごせる物ばかり
家中に時計があってみな違い
定退後無駄で埋めてるスケジュール
立ち枯れた熱中症の土手の花

奈良市　尾畑なを江

無関心デモクラシーの芽をも摘み
愛憎が冷めてみつめる無関心
逃げ口上うまい男の腰ゆらぎ
義務を捨て自由気ままな芽が育つ

大和郡山市　牧野隆之

奈良県　加門萌子

この猛暑平城宮址ようお越し
日本の八月戦掘り起こす
戦後何年やっと日の目を見る秘話も
鳴きしきる蝉もいつしか命の灯

和歌山市　坂部かずみ

このままで時よ止まれと夢の中
水ばかり飲んで手足が浮腫みだす
色付きの眼鏡通して見る世間
猛暑にて待ちくたびれる彼岸花

紀の川市　北山絹子

ポジションを忘れた妻の遊び癖
さわやかな風に女が磨かれる
父の河ゆっくり流れ安堵する
こっそりと猪口一杯が顔に出る

田辺市　大峠可動

曼珠沙華怒りがこぼれ赤くなる
生きのびて満ちて自由にほほ笑んで
一喝で悟り頭痛が少し癒え
ほめ合って花を咲かせている夫婦

鳥取市　松原ひとみ

つまずいて他人の痛みをやっと知る
門くぐり今日の荷物を下ろす肩
湧き水に歴史とけ出しまるい味
玉葱を犯人にする泣いた顔

鳥取市　山口千代子

愚痴は言うまい三度の食事戴ける
歩かねば老いは足から弱り出す
赤チャンの仕種見てると時忘れ
花束を派手に見せますカスミ草

倉吉市　前田喜美子

うっかりで済まぬ総理のご発言
足腰を鍛えて上る八十路坂
キッチンでかまどの時代思う母
さざ波の境地に老後つつがなく

境港市　中井虎尾

解禁の港秋色ベニズワイ（境港）
キラキラと浮ぶ漁火白兎沖（鳥取）
そよ風の風鈴聞けぬ耳となる
田は黄色頭をたれたコシヒカリ

米子市　小塩智加恵

無理矢理に迎えた嫁は気が強い
秋の無い夏から冬になる恐さ
ありがとうレジの人にも言っておく
草取りと障子張り替え予約する

米子市　加藤正二

送り火にさそわれて逝く年になる
太ったか老いてか腰が重くなる
戦中のにぎり弁当うまかった
自炊して一人がよいと痩せ我慢

星取表黒い噂にヤヤヤヤヤ
ポイントがことさら煽るエコ貧乏
黒枠の父を肴に盆の膳
四十年やっと馴染んだ飯茶碗

米子市　野川宣子

とてもいい法話も睡魔おそい来る
向日葵に元気もらうウォーキング
冷奴手抜きの夕餉毎夜出る
深夜のベル嫌な予感がすぐよぎる

米子市　見山温子

歳月が心の傷を忘れさせ
傷ついた心も癒える青い空
後わずか気ままに生きる風になる
大声で呼んで見たいな秋の風

鳥取県　飯野菖子

髪染めて少し軽めの靴をはく
もう少し若けりゃ飛んだ水溜まり
雑念を仏に預け座禅組む
すき焼きの肉をめがけて箸が舞う

鳥取県　大塚美代子

茶柱は立つが可もなく不可もなく
カラフルな色と共存また楽し
薄幸な親を選べぬ児が哀れ
心地よい汗をかいたよボランティア

鳥取県　岡本幸枝

名言は時が経っても廃れない
釈尊の教えにまたも感動す
逆風を凌いだ父の深い皺
定時の水補給続けて猛暑越え

鳥取県　岡村孝明

頑固爺の顔色ばかりみて夫婦
収入が少し増したと税を取る
今日一日元気を呉れてありがとう
老人に三割医療身が凍え

鳥取県　下田茂登子

裸からやり直しする大相撲
拾えない影はそのまま置いてゆく
稲作も今日も雀が見にきてる
責任の重さが語る肩の凝り

鳥取県　田口清帆

葬儀屋のスマート過ぎる式次第
うっかりと愚痴が言えない孫の耳
仲裁に水と油を差し違え
ここも過疎百選の水溢れ出る

鳥取県　吉野いさお

名女優愛しく思う深津絵里
父つけたわが名誇って強く生き
ファミリーに守られ守ることのさち
妖怪像ふれて安らぐ港町

松江市　柏井日出子

夏の温泉シニアのペアで花が咲く
エンドレスのごとくフラ大フェスティバル
御来光山肌黄金に染まる
腹立ててどうなる余生長くない

松江市　錦織禮子

辛かったそれでも昭和なつかしい
戦友との昔話はキリがない
ひと休みまた一休み卒寿坂
寝ていても腹が減るのがありがたい

雲南市　福間博利

ここに来てまだまだ夢のある世界
なかなかに線引出来ぬ認知症
思い出の中でどっぷり里の秋
湯上りにコップの水のうまい事

雲南市　渡部好榮

じゃんけんができる手がある指動く
目の奥の愛をただただ深くする
窓開けて心の換気扇まわす
天国に還る土には戻らない

松江市　相見柳歩

猛暑日の秋見つけたり雲と風
盆二日孫と遊んでどじを踏み
お隣はとなり芝生を見るでない
歴史とは戦争という人殺し

安来市　原　煩悩児

水飢きん日本の技が世を救う
雨水も粗末にしない島の人
うっかりか物忘れかがわからない
うっかりに効く薬なら飲んでみる

広島市　岸本　清

早朝の畑耕す頬被り
竿の蜘蛛ごめん洗濯干す時間
百均へたまにストレス捨てに行く
ネコちゃんも暑いかお腹まる出しに

福岡県　本田さくら

赤トンボ残暑見舞の貌でくる
朝顔が大きな口であいさつ
バイキング目は食べたいと欲を出す
砂を噛む悔しさバネに生きている

札幌市　佐藤登美子

肩叩き背中を押して出す路頭
オホーツク智恵子の空が何枚も
きみまろの餌食が笑い転げてる
歩を止めて振り向いたのに見もしない

網走市　角谷幸甚

選者交代のお知らせ

十二月号から川柳塔欄の選は小島蘭幸主幹に代わります。

第16回 川柳塔まつり

川柳雑誌・川柳塔通巻1000号記念川柳大会

《同 人 総 会》

と　き　平成22年10月9日（土）　午前10時～11時
ところ　ホテルアウィーナ大阪　３Ｆ　生駒の間

《各賞表彰式・記念句会》

と　き　平成22年10月9日（土）　午前11時開場・午後１時開会
ところ　ホテルアウィーナ大阪　４Ｆ　金剛の間

開会のことば　理事長　西出楓楽
祝　辞　㈳全日本川柳協会　理事長　大野風柳　氏
番傘川柳本社　主幹　礒野いさむ　氏
表彰式　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬抄・一路賞・各地柳壇賞
おはなし　「路郎と薫風 ― 牽引車の火と継承者の灯」
『上方芸能』発行人　木津川　計　氏
兼　題　「虫」　川柳展望社　天根夢草　選
「深い」　時の川柳社　平山繁夫　選
「渡る」　ふあうすと川柳社　赤井花城　選
「車輪」　番傘川柳本社　森中惠美子　選
「スピーチ」　川柳噴煙吟社　田口麦彦　選
「価値」　柳都川柳社　大野風柳　選
事前投句　「千」　川柳塔社　河内天笑　選
閉会のことば　副主幹　川上大輪
記念品呈　『麻生路郎読本』・『河内天笑川柳句集』

《懇 親 宴》

ところ　ホテル・アウィーナ大阪　３Ｆ　葛城の間

同人総会

平成二十二年度45期川柳塔社同人総会は、十月九日午前十時からホテルアウィーナ大阪・生駒の間で開催された。村上玄也副理事長の司会で開会し、河内天笑主幹が開会の挨拶、議長に川上大輪氏を選任して議案審議に入った。

第一号議案の事業活動は村上直樹常任理事から具体的な事業活動を、後記の「事業活動報告」に沿い、各部別に整理して報告した。

・路郎川柳を継続して紹介し、好評である。
・路郎読本の発刊に向け資料収集などに注力をした。
・1000号記念大会に向け各種PR、万全を期しての体制作りに努力を重ねた。
・本社句会運営上の改善、充実に努めた。
・各地の句会への参加に努め、他柳社との交流を深めた。
・収入増が見込めないなか、無駄を省き会計の健全化に努めた。
・塔誌販売店の増強や小冊子「川柳しませんか」の贈呈など川柳拡大策に努力した。
・パソコンによる事務の効率化を継続した。

次いで山口光久常任理事が収支計算書・財産目録を提示して2009年の会計決算報告を行った。藤村亜成会計監査が監査承認の旨を報告した。一号議案は拍手で承認された。

第二号議案の10年度の事業について村上直樹常任理事から各部別に活動計画を提案、また山口光久氏が新年度予算案を提案した。

二号議案も承認され、会議全般につき質疑応答を行ったが特に質疑は無く、古川奮水氏から各地柳壇の掲載枠が三十五句にまで増枠された事に対し謝意表明があった。また宮崎シマ子氏から各地柳壇への掲載基準について意見があり、別途回答することになった。

第三議案として、西出楓楽理事長より役員新任、再任人事が提示され拍手をもって承認された。新任役員者名は後掲。

西出楓楽理事長より役員新任、再任人事が提示

最後に河内天笑名誉主幹および小島蘭幸新主幹の挨拶があり、河内月子副理事長の閉会の辞で総会を終了した。

■事業活動報告

2009（平成21）年
10月12日　第15回川柳塔祭（川柳塔創刊85周年記念大会）及び平成21年度同人総会開催
11月7日　川柳塔碑合祀法要（高野山大霊園・24名参加）
2010（平成22）年
2月15日　川柳塔社代表者・役員拡大会議
5月　1000号記念大会に向け同人・誌友の参加予定アンケートを通じ参加意識の高揚を図った
10年2月から選者交代「檸檬抄」三宅　保州
10年9月から選者交代「水煙抄」西出　楓楽
「檸檬抄」山本希久子

【主な受賞・表彰】

三宅保州　本社句会　月間賞杯永久保持者
高田美代子　（社）全日本川柳協会80歳以上の功労者顕彰

【出版・句集の刊行】

宮崎ヒサ子　『流れつく』
春城　年代　『遺句集・武庫坊』
吉村久仁雄　『命のほうび』
朝日ケ丘長友会合同句集　『丘の上川柳句集』

中塚　礎石　『仏教四字熟語川柳句集』
川柳作家全集（新葉館出版）
　板尾岳人　牛尾緑良　塩満　敏　新家完司
　鈴木公弘　高瀬霜石　三宅保州　山本蛙城
須郷　井蛙　『福寿草』
西口いわゑ　『女ごころ』
川柳塔まつえ　『復刊四十周年記念合同句集』
水谷　正子　『四十二・一Q五粁』

【物故者】（8名）

川竹	松風	平成21年9月4日没	88歳
南原	正和	同 21年9月11日没	82歳
八田	敏	同 21年9月28日没	86歳
工藤	甲吉	同 21年9月1日没	95歳
久米奈良子		同 22年4月6日没	
住谷	石舟	同 22年5月2日没	82歳
穴吹	尚士	同 22年6月13日没	74歳
川原	章久	同 22年7月19日没	89歳

■新任役員（再任・留任は含まず）

名誉主幹　河内　天笑
主　幹　小島　蘭幸
副主幹　新家　完司
常任理事　柿花　和夫　久保田千代
参　与　川端　一歩
理　事　小林　わこ　坂　裕之
　原田すみ子　松尾美智代
　森松まつお

■新同人（21年8月～22年7月）

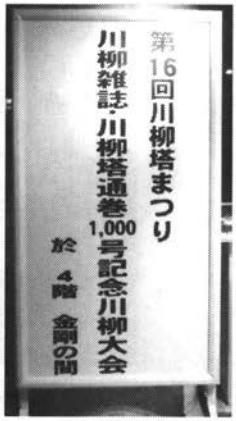
藤岡ヒデコ（府中市）　馬場　利子（府中市）
竹山千賀子（芦屋市）　早川　孝子（神戸市）
林　さだき（福岡県）　小沢　淳（札幌市）
片山かずお（高槻市）

【同人総会出席者】（順不同・93名）

川端一歩	井丸昌紀	伊達郁夫	居谷真理子
古川奮水	北野哲男	岩崎公誠	中原比呂志
村上玄也	坊農柳弘	河井庸佑	鈴木いさお
亀岡哲子	早川遡行	藤村亜成	山岡富美子
井伊東吉	米澤俶子	山口光久	山本希久子
山田葉子	山田耕治	加島由一	久保田千代
山本三郎	高瀬霜石	松山芳生	古今堂蕉子
福士慕情	板尾岳人	岩本笑子	松尾美智代
籠島恵子	池澤大鯨	木本朱夏	奥田みつ子
桝本宏子	川上大輪	新家完司	原田すみ子
三島淞丘	長浜美籠	吉田孔美子	
森山盛桜	福西茶子	河内月子	宮崎シマ子
小島蘭幸	衆原道夫	柿花和夫	出口セツ子
森村美花	西内朋月	小澤幸泉	鴨谷瑠美子
奥谷彩子	北村賢子	松原寿子	太田扶美代
大内朝子	江見見清	長井善純	飛永ふりこ
吉村一風	藤井則彦	渡辺富子	冨山ルイ子
河内天笑	西出楓楽	村上直樹	岩佐ダン吉
横山捷也	鶴田遠野	榎本舞夢	七反田順子
岩切康子	岸本孝子	吉川寿美	榎本日の出
髙杉千歩	杉本義昭	藤井正雄	水野黒兎
森本弘風	黒田能子	吉岡修	小沢淳
塩満敏	土橋螢	今愁女	堀正和　谷口義

同人総会の模様

岩本　雅代（府中市）　大隅　克博（堺　市）
森松まつお（松原市）　吉内タカ子（大阪市）
萩原　大朔（大阪市）　坂部紀久子（和歌山市）
池澤　大鯨（鳥取市）　堀　冨美子（和歌山市）
糀谷　和郎（明石市）　寺川はじむ（八尾市）
山崎　武彦（神戸市）　藤岡　りこ（尼崎市）
佐藤　忠昭（大阪市）　足立　茂（西宮市）
阿部　紀子（奈良市）　辻内げんぇい（奈良市）
岩本　浩二（奈良市）　鳥越　鬼一（鳥取県）
寺井　弘子（大阪市）　吉田喜代子（藤井寺市）
鈴木　一弘（鳥取県）　山本加お里（大阪市）
三浦　強一（札幌市）　藤井　文代（京都市）



記念式典

川柳塔社が総力を挙げて準備を進めてきた「川柳雑誌・川柳塔通巻一〇〇〇号記念川柳大会」は、平成二十二年十月九日、ホテル・アウィーナ・金剛の間で盛大に開催された。

前日からの宿泊組みを含め、出席者は五百名超。机を取り払った椅子席だけであったが、さしもの大会場も超満員となった。

出句締切りは予定通り正午。午後一時より、

麻生路郎の胸像

司会　居谷真理子

太田　昭

司会の太田昭の開会宣言によって、川柳大会に先立つ記念式典が開かれた。

会場正面には美しく輝く金屏風。演壇の右に飾られた麻生路郎の胸像は、今日の盛会を少々はにかみながらも嬉しそうであった。

まず、西出楓楽理事長からの開会の辞。

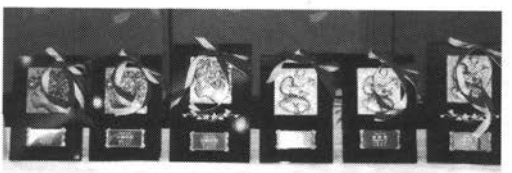
「上は九十歳代から、下は五歳まで、多数のご出席を賜りましてありがとうございます」との言葉に会場が沸く。そして、七十五歳定年制で辞した河内天笑名誉主幹に長年のご苦労を謝し、小島蘭幸新主幹に今後の川柳塔社の舵取りを期待された。

続いて、小島蘭幸主幹が新任の挨拶と出席者への御礼を次の如く述べた。

「本日は、天気模様の悪い中をご来会いただきましたご来賓の皆さま、選者の皆さま、そして、全国の皆さま、まことにありがとうございます。ただ、残念なのはご祝辞を頂く予定でした今川乱魚先生がお亡くなりになられたことです。心よりご冥福をお祈り申し上げます。また、毎月の川柳塔誌を印刷依頼しています美研アートさまにも立派な『麻生路郎読本』を作っていただきまして、さすがに美研だと感銘しました。ありがとうございました。この大会を前にして、麻生路郎先生のふるさと尾道へ行ってまいりまして、大会を開催するご報告をさせていただきました。先生の句碑を前にして歴代の主幹の顔が浮かんできました。このたび主幹の大任を拝命しま

河内天笑名誉主幹　　小島蘭幸主幹

河内天笑名誉主幹と小島蘭幸主幹を囲んでの六賞受賞者



六賞の楯

新同人の方々

をとっても、先人の足跡の偉大さが分かります。私が柳都川柳社を立ち上げた頃、最初に出合った本が麻生路郎の手になる川柳雑誌でした。以後、歴代の志を連綿と受け継いでこられた皆さまのご努力に、こころより敬意を表します。特に橘高薫風さんには、兄のように思ってお付き合いをさせていただきました」と、川柳雑誌時代から今日に至るまでの深い関係からの温かい励ましの言葉であった。

次いでの祝辞、番傘川柳本社主幹の磯野いさむ氏からは「大阪の新聞では、朝日と毎日。経済界は、住友銀行と三和銀行が競争しながら全国をリードしてきました。そして、川柳界では、番傘と川柳塔という二つの結社が切磋琢磨しながら全国の会を引っ張ってきました。川柳塔誌の各地柳壇欄や各地句会案内を拝見しただけでも分かりますが、川柳塔社の支店のような各地の地域句会からのサポートがあって、今日の繁栄があります。それは番傘川柳本社でもまったく同じです。」と、遠路からの参加者への配慮あるご挨拶であった。

続いて、居谷真理子より祝電の紹介。そして、恒例の六賞受賞者に対する表彰式が華やかに執り行われた。受賞者が壇上に上がり、受賞句が紹介され花束を受けると、出席者全員盛大な拍手によって祝福した。（受賞者氏

してその責任の大きさを痛感いたしております。微力ではありますが川柳塔社発展のために全力を尽くす覚悟ですので、皆さまのご協力をお願い申し上げます」

落ち着いた声は、五百名を超える参加者の胸に快く響き、新主幹の気概に感銘した。

次いで、来賓祝辞に移り、（社）全日本川柳協会会長の大野風柳氏からは「ここ数年、各川柳結社におかれましては、八百号記念や百年祭、そして、本日の千号記念など、節目の大会が催されていますが、そのすべてが、六大家の流れを汲んだもので、そのこと一つ

名と作品は、十月号に掲載）

六賞表彰に続いて、塔誌を長年に亘って印刷協力いただいている美研アート社へ感謝状が授与された。本大会の記念品として出席者全員に配られた「麻生路郎読本」も同社の印刷。多数の資料を収集した諸兄と、同社の苦労がしのばれる五百頁を超える大作である。

続いて、本大会の呼び物の一つ木津川計先生の、「路郎と薫風―牽引車の火と継承者の灯」と題した講演は別項のとおり、熱の入った感動的なものであった。

川柳大会

このあと十分間休憩。いよいよ記念川柳大会に移り入選句の発表。前半の脇取りは籠島恵子・居谷真理子。後半からは、河内月子・久保田千代のコンビで進行。盛会は嬉しいことだが、参加者数が増えるに従って入選率が悪くなるのが辛いところ。本大会も極めて厳選になったが、五歳の松尾涼さんの再三の呼名に場内が沸いた。すぐにでも同人になっていただきたいほどの逸材である。

松尾　涼ちゃん
西崎久美子さん

午後五時半終了予定であったが、少々遅れ午後六時、川上大輪副主幹の閉会の辞によって、記念大会は無事に終了した。（完司記）

月間賞は高槻市の安田忠子さん。

司　会（太田昭・居谷真理子）
脇取り（恵子・真理子・月子・㈣千代）
清　記（勝弘・黒兎・冨美子・保州・道夫）
撮　影（公誠）

会場風景

講演要旨

路郎と薫風

―牽引車の火と継承者の灯―

木津川　計

木津川　計氏

一句を遺せ

「川柳雑誌」の創刊は大正十三年の二月でした。この年の六月に日本の新劇運動の夜明け、築地小劇場が開場、翌十四年からラジオ時代が始まっていく。そしてやってくる昭和という激動の前夜的時代に、麻生路郎もまた試練の多い川柳草創期の困難と希望に情熱を傾け尽くすのです。

終生のライバルであり、友人でもあった岸本水府が「番傘」の編集に携わり、麻生路郎は「川柳雑誌」と名づけ、他の川柳雑誌は愕然とする。阪井久良伎が「僭越ではないか」と大層な雑誌名への抗議をしたとき、路郎は相手にせずこう書いたのです。「『川柳雑誌』が出てから川柳の雑誌は、柳誌とか川柳の雑誌とか言わねばならないことになった。その不便さは気の毒ではあったが、社会を目標に刊行するためにはやむを得ないことであった」。

路郎の思いは、狭い川柳界を相手にするのではない。社会を相手に川柳とはこういうものだ、の「川柳雑誌」を出す。まさに〝鴻鵠の志、燕雀いずくんぞ知るべけんや〟の気概で、「番傘」に負けまいと勇ましく戦った七十七年の生涯だったと思うのです。

大阪の作家、藤沢桓夫は言いました。「岸本水府には柔道を思わせる柔らかさがあり、麻生路郎には剣道を思わせるきびしさがある」。二人の人物や作風をよくとらえています。事実麻生路郎は「命ある句をつくれ」と門人を励まし、「一句を遺せ」ときびしく指導したのです。

近代の画壇で「東の劉生、西の楢重」と評された大阪の小出楢重はまだ有名でなかった頃、路郎に「僕は死ぬまでにたった一枚でいいから立派な画を描いて死にたい」と語りました。

大正十三年三月、「川柳雑誌」第二号に「一句を遺せ」との題で路郎は門人に訴えたのです。友人、小出楢重の言葉だけでなく、江戸後期、浮世絵の大家だった葛飾北斎の、芸術に命を削る次のエピソードを書いています。北斎の門人の一人が伎倆の未熟を嘆いて修業をやめようとしたとき、北斎の娘はその門人に笑いながらこう言ったのです。「わたしの父は幼年より八十有余歳の今日にいたるまで、日夜筆を採らざることなし。然るに過ぐる日、なお腕を組みて、『余は実に猫一匹をも画くこと能はず』とて落涙し、自らその画の意の如くならざるを嘆息せり』と言って励ました」というのです。

路郎の有名な「一句を遺せ」はこうしたすぐれた芸術家の老いてなお倦むことのない研鑽を語りながら、自分に満足のいく句のでき

講演風景

ていないことを告白し、次のように結んだのです。「私もまた小さな川柳に甘んじていないで、せめて一句でも後世の識者に示しうるやうな立派な川柳を遺しておきたいと思って居ります。本誌の読者におかれましても第二の北斎となって後世に遺し得る一句のために力作せられたい」であります。

燃える魂

路郎は昭和十年二月の「川柳雑誌」巻頭言で、「人間の魂に点火する川柳でなければ、十七音字工作がいかに巧みにほどこされてあろうとも、それは砂上に描かれた閑文字に過ぎない」と述べています。人間の魂に点火したら魂は燃える。そのように断じた路郎自身も燃えていたのです。

本日の演題の半分、〝牽引車の火〟とは何故なのでしょう。路郎の初期の有名な句に

行く末はどうあろうとも火の如し

があります。これをしも、牽引車の火と言わずして何というのでしょう。しかもその火は還暦を迎えても衰えず、またよく知られた句

六十一まだ情熱は燃えに燃え

と、詠ましめたのです。

路郎は本質的には淋しい人だったと、私はずーっとそう思ってきました。人間は強いこころだけでは生きていけないのです。やさしいこころがなくても生きてはいけないのです。実に路郎には門人に対するきびしさと同時に大きくつつむ抱擁力というやさしさを持っていたのです。しかし路郎は淋しさをつつみ隠すため、若山牧水のようにいつもこころの鉦を打ち鳴らしていたのでしょう。

今日もまたこころの鉦を打ち鳴らし
打ち鳴らしつつあくがれてゆく

そんな生涯だったと思います。路郎の句には淋しい句が多いのです。

二階はさびしふと取りだして見る鏡
僕だけをおろして汽車は消えにけり
お父さんはネ覚束なくも生きている
戯れに死ねればこころやすからん
子よ妻よばらばらになれば浄土なり
人生を暗いところで探りあて

燃える火の麻生路郎は、人の世の淋しさに、誰にも気づかれず泣きながら生きていたのです。その路郎の遺した命ある一句とは

二階を降りてどこへ行く身ぞ

に尽きると私は思うのです。「私の句はどちらかと言えば淋しい句が多い。私の性格がそうであり、私の歩いた道が嶮しかったからでもあろう。私は川柳に人間愛を求めてやまなかった」であります。

人間陶冶の詩

人間愛のある川柳は、真に陶冶された人間でなければ詠めないでしょう。だから路郎は川柳は「人間陶冶の詩」でなければならないと終生唱えつづけたのです。

路郎は生涯安まるときがなかったのでありましょう。まことに忙しいモーレツな人生を送りました。その忙しさは何故か。

麻生路郎の「川柳雑誌」以後の生涯は、川柳という外観をこしらえただけでなく、内装にまで力を注がなければならなかったからで

す。言うならば外観としてのエクステリアと内装としてのインテリアに全存在を費やしたのです。それなら本日、路郎と並べて語る橘高薫風さんはどういう川柳人生を送ったのか。薫風さんは路郎のこしらえたエクステリアとインテリアのメインテナンスに意を用いた人であり、その建物の中のクオリティ・オブ・ライフ、生活の質、つまり川柳の質を高めんとして随分の努力をされた方だったのです。良き師の元にすぐれた弟子は育つのです。クオリティ・オブ・センリューを薫風さんは高めたのです。

水府には柔道の柔らかさ、路郎には剣道の厳しさなら、薫風さんには相撲を思わせる品格があった、と申すものであります。

川柳のメインテナンスとクオリティ・オブ・センリューに励みながら、胃半分肺半分の細い細い薫風さんも命ある一句を遺したのです。その一句こそ

人の世や嗚呼に始まる広辞苑

であった、と私は評価してきたのです。薫風さんには朝青龍以前の相撲を思わせる品格があると申し上げたが、その品格が薫風さんの句柄、クオリティ・オブ・センリューを高くしていった理由であります。

恋を詠んでも、たとえば

恋なれやわれに鬣あることし

とその品格を崩さないのです。

愛する女人を詠んでも

恋人の膝は檸檬のまるさかな

にうかがう文学の香りです。思えば優れた弟子を麻生路郎は育てたのです。路郎の句にも世俗や女人をうたったものがありますが、句柄という尺度で眺めると薫風さんに軍配は上がります。そのことが『川柳塔』のクオリティ・オブ・センリューを維持し、高めてきた最大の理由だったのです。加えて薫風さんは〝継承者の火〟を点した方なのです。こう詠んでいます。

五十年花径遙かに香爐峰

句業半世紀、「人間陶冶の詩」であります。その香爐峰こそ、品格あるもの、美なるものを求めつづけた橘高薫風の灯だったのです。

田辺聖子さんの歯ぎしり

川柳の文学的評価が高まっても、歌人や俳人と同じように川柳人が正当に扱われず、不当に軽視され冷遇されているのが残念ながら現状なのです。そこに文壇最大の応援団、田辺聖子さんの歯ぎしりと憤りがあるのです。

田辺さんの大著『道頓堀の雨に別れて以来なり』は昭和二十九年二月の「番傘」例会席上での水府の次の講演を紹介しています。

「私は昭和二十二年に大阪府知事から麻生路郎氏らと共に大阪府文化賞を受けましたがその時、『新大阪新聞』の社説に井上吉次郎という人が『今回の表彰は間違っている。この中に雑俳屋が入っている。大阪の文化面で何を苦しんで雑俳屋を入れたか』、私たちは今こそ協力して川柳の文学運動に集中しなければなりません。岡本一平さんはポンチ絵と蔑まれていた漫画を、士丈夫の賞玩するものにまで高められ、川柳界も同じようにと激励されました。それには団結力が必要である。川柳家全体、打って一丸となって社会に進出せよ。皆さんとともに大いなる希望をもって柳界のために努力したい」

日川協の会長だった今川乱魚さんは、今年の四月に癌で亡くなられました。乱魚さんは毎日書いていたブログを二年前一冊に纏められました。そこに唖然とすることが書かれていたのです。

日本文藝家協会に呼ばれ、役員の鷹羽狩行さんからこう言われたというのです。

「日本文藝家協会の会員は現在約二五〇〇人です。以前、時実新子さんがエッセイストとして入っておられただけで、川柳人は他に誰も入っていない。短詩文芸としてはバランスを欠いているので、お入り頂けないか、というお誘いでした」

日本文藝家協会には詩人が三五〇人、歌人が一八〇人、俳人は二六〇人いますが、時実さん亡き後、二五〇〇人の日本文藝家協会に川柳人はゼロ。みなさんが携わっておいでの川柳という短詩の一翼は、文芸家たちによって全く認知されず、評価されていないのです。

これが川柳の二年前の現状です。私はこの夏、日本文藝家協会へ電話をいたしました。川柳家が何人加入しているのかと。「十人ほどです」と事務局は言うのです。やっと許されて入った川柳家十人の割合は二五〇〇人中の0.4%、1%にも満たないのです。現代の川柳の隆盛をみるまでにざっと一世紀、一〇〇年を要して、みなさんの試みは0.4%の文芸でしかなかったのです。

ここにこんなにも大勢が「川柳雑誌」「川柳塔」一〇〇〇号を祝われる、まことにめでたいことであります。

しかし、こんな祝賀の集まりで不謹慎、そして失礼なことを私は申し上げねばなりません。0.4%の現実からをみなさんに問わねばならないのです。一〇〇年を費やしていったいみなさんは何をやってこられたのか。

無名の人の一句

麻生路郎は「川柳雑誌」二三号でこう書いています。「従来の川柳が社会から認められないのは従来の川柳家が川柳を弄びすぎていたからである」。

皆さん、川柳を弄んだのは大正末の従来の川柳家だったのでしょうか。私は毎号、「川柳塔」の同人句評、「川柳塔の川柳讃歌」を六年近く担当させていただいています。

その間、私は「川柳塔」同人に川柳を弄んでいる人が一人もいなかったことを大きなよろこびとするだけに、麻生路郎の霊前に申し上げねばならないと思ったのです。

路郎先生、先生が案じられた川柳を弄ぶ川柳家は先生のご指導により、今日の「川柳塔」にその姿を一人も見ることがなくなっているのです。

先程の二九年二月の「番傘」例会で水府さんは正岡子規の言葉を借り、こうしめくくりました。

〈句会の一隅の、無名の人の一句が大きな力である〉、「まさにその通り。句の力と結社の力が協力して、川柳の文学運動に集中しなければならない時です」。

このときから五六年の星が流れました。私はやはり岸本水府の霊前にも報告しなければならないのです。

水府先生、先生が示された文学運動への集中はあとに続いた門人たちの努力により、すぐれた川柳家を生みつづけ、この方たちの献身で川柳を弄ばない、文学としての「番傘」に発展しています。水府先生、文化勲章を受賞された作家の田辺聖子さんは先生の生涯を『道頓堀の雨に別れて以来なり』で賛えられたのです。」

はやくに麻生路郎もにがり切っていたのです。「川柳雑誌」二二六号で、「なぜ私はにがり切っている乎」で次のように書いたのです。

「ふざけた川柳家に対して、川柳を誤解せる世間に対して、私たちはにがり切るまいとしても、にがり切らざるを得ないのである。私はそれらの問題に対しずいぶん多くの言葉を費やしてきた。従来のふざけきった川柳家も、川柳を誤解せる世間も、もういい加減に私を、にがり切らさないようにしてくれてもいいと思ってゐる」。

路郎の不愉快は今日も続き、田辺さんを初めとして真底川柳を愛し、文学として評価する心ある人たちをにがり切らせているのです。

耕人として

いったい川柳はどうしていけばいいのか。私は申し上げます。麻生路郎に帰れ。「川柳雑誌」の精神と志を受け継ぐ決意をもう一度

固め直すのです。

かつてレーニンのめざしたロシア革命に参加したインテリゲンチャーの掲げた目標は、「ヴ・ナロード」〝人民の中へ〟だったのです。路郎もまた〝社会の中へ〟、をめざし「川柳雑誌」という大きな名前をつけたのです。この志を「川柳塔」のみなさんは持ち合わせているのかどうか。世の中に川柳とはこういうものだったのか、とわかってもらい、つくっている人たちの人格が尊敬すべき、と思われたとき、川柳に敵対したり、誤解したり、貶めたりする人が出てきましょうか。そのために路郎は「人間陶冶の詩」と宣言し続けたのです。

路郎は「川柳雑誌」昭和三五年一月号でこうも言っていたのです。

「世のすべての人々が川柳を創作することの不可能であることは、言うまでもないが、創れない人々は読む、読めない人々は聴く、聴けない人々は匂いをかぐ、斯くして、心の和やか、豊かな、朗らかな、素直な人間性を創りあげたい」であります。

ですから創れない私は二十代から読みながら私は人生とは何かをすべて川柳から学んだのです。路郎は「川柳雑誌」の創刊でこう述べました。「私たちの主張する川柳の一句は一冊の長編小説よりも優れている場合があります」。

私が雑誌「上方芸能」の編集スタッフに言い続けてきたことは、「我々は背広を着た百姓になろう」ということだったのです。文化を生み出していく者は文化の消費者でなく、〝精神の耕作者〟、カルティベーターで文化の作物、そのよしあしは耕作者の質と働きにかかっている。このことを主張したくて私は三十年ほど昔、処女作『文化の街へ』を出版したのです。

麻生路郎も表現は違いますが、大正十年の「耕人（たがやし）として」（「百萬石」№25）というエッセイを書いています。

「駄洒落や穿ちばかりが川柳の畑ではない。耕してさえ行けば川柳の畑は幾らでも広がっていくに違いない。人格の低い人には人格の低い川柳しか生まれない。（いい川柳が出来ないのは）決して川柳の畑が悪いのではない。之を耕す人達が悪いのであろうと思う」。

いよいよ私たちは麻生路郎の主張に相応じなければならないのです。背広を着てはいるが、よき耕し手になり、すぐれた川柳を収穫するのです。

塔建つるもの

十年間、主幹として「川柳塔」をリードしてこられた河内天笑さんが「川柳塔」十月号巻頭言に主幹としての最後の句を掲げられました。

私たちの塔だ天まで伸ばさんか

であります。「か」という助詞には多くの意味があります。「伸ばさんか」は「伸ばさぬか」であり、天までも伸ばすとするか、という意思的な気持の願望の助詞であります。

もう一つは問いただす意味の助詞で、どうして天まで伸ばさないのか、というここでは期待と要請の意味に使われているのです。

「川柳塔」の皆さん、他の結社の皆さん、それにジャンルは違えども私ども「上方芸能」も加えさせていただいて、川柳や芸能の大地を耕しながら、天笑さんの言う天まで伸びる塔をコンストラクトしていくのです。

人は誰でも目標を持って生きています。ならば、生産的、創造的な生き方を選ぼうではありませんか。たとえば宮沢賢治のように生きてゆけたら、と私はいつも賢治を見上げて自らの理想の低さと力の至らなさを知らされてきたのです。それでも賢治が築こうとし続けた高く輝く塔だけは見失うまいとこころしてきたと思います。大それた望みではありますが、やはり私も賢治の詩句のように生きてゆけたら、と願うのです。すなわち

手は熱く　足はなゆれど
われはこれ塔建つるもの

ありがとうございました。

木津川計（きづがわけい）氏　プロフィール

一九三五年生まれ。大阪市立大学文学部卒業。'68年に自ら創刊し、編集長を務めた雑誌『上方芸能』は、能・狂言・歌舞伎・文楽・舞踊から落語・漫才にいたるまで、京阪神の芸能や大阪文化を幅広く紹介、論評する専門誌として42年の歴史を持つ。

'86年　立命館大学教授に就任、06年定年退職。他に民放連盟賞中央審査委員長（'04、'05年度エンターテインメント部門）、文化庁芸術祭賞選考委員、文化庁国際芸術交流支援事業審査委員会副主査、芸術選奨文部科学大臣賞選考委員会主査ほかを歴任。

現在は、『上方芸能』発行人、和歌山大学客員教授、兵庫県川西市生涯学習短期大学学長などを務める。NHKラジオ（関西エリア）で「ラジオエッセイ」を毎週1回レギュラーで担当して30年目、〝木津川節〟といわれる大阪弁のやわらかい語りにファンも多い。

また、一昨年から「木津川計の一人語り劇場」を旗揚げ、新国劇の名作「瞼の母」「一本刀土俵入り」「王将」、映画「無法松の一生」などを各地で口演して好評。

著書も多く『人間と文化』（岩波書店）、『趣味の社会学』（日本経済新聞社）、『上方の笑い』（講談社現代新書）、『上方芸能と文化』（NHKライブラリー）、『人生としての川柳』（角川学芸ブックス）ほか。

京都市芸術功労賞、京都新聞文化賞、第46回菊池寛賞（'98年12月）などを受賞。

懇親宴

五百人を超える句会の熱気が冷めやらぬまま懇親宴へ。こちらも例年にない百六十人強の柳友を迎える。

司会役は坊農柳弘、大内朝子。川上大輪副主幹の開会挨拶に続き、「川柳噴煙吟社」副主幹田口麦彦氏の音頭で乾杯。料理が運ばれるころには緊張感もほぐれ歓談がはずむ。

アトラクションの皮切りは吉川寿美さんの「扇舞」宝船で、艶やかな姿を披露、名誉主幹天笑夫妻のソロとフラダンスのデュエット、月子副理事長主宰の美女軍団による恒例のフラダンスに、鳥取の森山盛桜氏の絶妙なもの真似、東海林太郎の「名月赤城山」と芸達者が続いて宴は佳境に。尖閣諸島も検事の犯罪もさておき、結社を越え、地域を越え、北海道から九州シドニーにまで広がる柳友と一堂に会する幸せに酔いが加速する。

日川協の大野風柳理事長、本田智彦事務局

吉川寿美さんの「扇舞」宝船

田中新一さん、井丸昌紀さん、磯野いさむさん

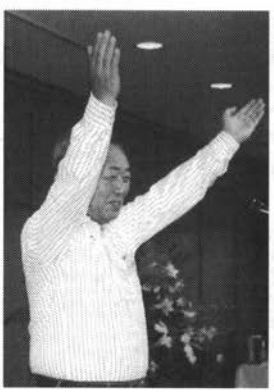
鳥取・森山盛桜氏の「名月赤城山」

月子副理事長主宰の美女軍団による恒例のフラダンス

長、番傘の田中新一幹事長、森中惠美子副幹事長等、お歴々もカラオケに飛び入り参加、今や表芸になった木津川計氏の「一人語り」で歌舞伎十八番の助六「三浦屋格子先の場」が飛び出し、クライマックスに。締めは完司副主幹のリードで全員輪になり「星影のワルツ」を大合唱、宴に幕を下ろした。

（富美子記）

大内朝子さん、新家完司さん、長井善純さん



福士慕情さんの万歳三唱

天笑名誉主幹を囲んで

川柳雑誌・川柳塔通巻1000号記念川柳大会
ようこそ　お越しくださいました

参加者の感想

ありがとう

森中恵美子さん（番傘川柳本社・副幹事長）
――一〇〇〇号の大会でお会い出来る塔の全ての人たちの、手を握りたい気持でいっぱいです。――河内天笑さんの最後になった巻頭のことばが大いに生きて手を握りあった一日をよろこぶ。ゆき届いた大会の運びも、ころよく〝いざ二千号に向かって〟の心意気に酔ったものだ。選者の立場から式典のよろこびに参加出来ぬことが残念。選句、発表の責任を深く反省するばかり。今後の課題だ。

天根夢草さん（川柳展望社・主宰）
スタッフの方がパート、パートでよく働いておられました。同人一丸となって大会を催されたことに感動いたしました。
河内天笑名誉主幹、小島蘭幸新主幹にお願い致します。これまで同様よろしくご指導下さいますようお願い申しあげます。

矢沢和女さん（時の川柳社・副主幹）
千号記念大会ご盛会おめでとうございます。
残務の山積み。まして雨。出席投句はしたものの少し躊躇してしまった。しかし、出席して大正解だった。温かい歓迎。久々にお逢いする顔。小島蘭幸新主幹の誕生。そして圧巻は、木津川計先生の講演でした。
嘗て、明治初期、小説は女、子供の読み物とされていた戯作を、知識人にも読まれる価値のある文芸、文学へと、社会へ進出させようとした坪内逍遥の「小説神髄」にも似た、川柳家への応援歌とでも言える叱咤激励。感動の一時間でした。
弄び過ぎた川柳の文学的評価の結果は、日本文芸協会二千五百人中川柳作家はなんと数人、百年費やして0.4%。十倍の4%に引き揚げるには、数学的予測では、九百年もの歳月を費やさなくてはならない。川柳の文学的評価の向上を心から願って止まない先生の情熱を、今日出席のおひとりおひとりの胸の中に印刻されたに違いない。今、私たちに課せられたことは、
「川柳作家よ！立ち上がれ！」
「私たちの川柳だ！天まで伸ばさんか！」

披講風景

ということであろう。
今夜はどうも眠れそうにない。

三村　舞さん（川柳展望社）

一〇〇〇号発刊おめでとうございます。
川柳誌千号発刊という歴史の重み、そして517人参加というスケールの大きさに、ただただ感激致しました。麻生路郎氏の川柳に対する情熱、そしてそれを引き継いで行こうとされている方々のエネルギーに、圧倒された一日でした。参加させて頂いて、川柳の魅力を改めて実感し、初心に還ることができました。ありがとうございました。

長谷川博子さん（番傘同人）

◎一〇〇〇号記念川柳大会おめでとうございます。粛々と進められていく大会に感心致しました。それもこれも役員の方、裏方の皆様の汗によるものと思います。
◎木津川計氏の話の中に「路郎には剣道の厳しさ、水府には柔道の柔らかさがある」この言葉には、感動で鳥肌が立ちました。
◎定刻終了の難しさを思いました。大会が大きければ大きいほど、リスクは大きいことも。

岩本笑子さん（同人・広島）

私はきっと雨女。朝から雨でした。
総会では河内天笑前主幹の挨拶に続き、小島蘭幸新主幹のさわやかな挨拶で、無事終りました。よろしくお願い致します。
千号記念川柳大会には遠方よりの参加者を含め、川柳大好きの方々が大勢集り、大成功となりました。スタッフの方は準備等大変だったと思います。ありがとうございました。

雨よりも強く花咲く五七五　笑子

福士慕情さん（同人・青森）

年初来、楽しみにしていた一〇〇〇号記念川柳大会へ、青森から総勢七名で参加できたことを喜こびとしています。
五〇〇名を超える大会の運営をされた方々に感謝、感謝です。
各柳社の代表の先生方の披講に、川柳に対する認識をあらたに致しました。また木津川先生のお話には、川柳に対する情熱を感じました。
新しい川柳塔の船出、天笑さん本当にご苦労さまでした。蘭幸さんの海が凪でありますように、心からお祈りします。

三宅保州さん（同人・和歌山）

倶会一処

千号記念大会という一大エポックに参加できる光栄に身の引き締まる思いでした。川柳塔にお世話になって柳誌にすると三百六十号分で、千号のうち約三分の一をその一隅に席を置かしていただいたことは、感慨一入であります。大会には和歌山からバスを仕立てて参加しましたが、初参加者が多く、今後入会と句会参加等に繋がればと期待しています。

千号の歴史を刻む倶会一処　保州

松本文子さん（同人・島根）

この日のために原章峰・竹治ちかし会長の掛け声で早々から準備し心待ちしていた。
電車で先行した人達も加え、三十名近くが早朝のバスにて出雲・松江・米子と合流し大阪へと驀進。
大阪本社の熱気に出合いたい新鋭とベテランを乗せて…。（八木千代・吉岡きみえ両先輩の欠席は残念!）
五〇〇人余りの大会の熱気に酔い圧倒され、生涯忘れ得ぬ感動を胸に、帰途についた。
荒れた世相なればこそ、川柳で心を癒やし友情の輪を大切にしたいと思った。

政岡未延子さん（同人・鳥取）

大勢の出席、豪華なセッティング、こうい

う大会に新しい人を連れてこられて体験出来たことに感謝しています。
遠方からの日帰り参加者にとっては予定通りの時間進行がなかったのは残念です。

坂　裕之さん（同人・大阪）

記念大会に参加できた事を感動しています。微々たるものですが、大会のお手伝いを出来たことを誇らしく思います。
木津川先生のお話には、厳しくも身のひきしまる川柳の世界を教えられ、感動しました。
川柳塔の末席の一員ながら大きな喜びを頂いた一日でした。

高浜　勇さん（同人・鳥取）

こんな大きな記念大会に参加できたことを嬉しく思います。近鉄の出口に案内の方がおられて大変良かったです。駅から近いホテルで雨が降っても濡れずにすみました。
木津川先生のお話も幅広く奥深いもので感銘をうけました。

石橋　優明さん（大阪）

板尾岳人さん、桑原道夫さんと親しくさせていただいている御縁で、出席しました。
木津川計さんの火を吐くようなお話、披講の場で読みあげられる句の面白さ、懇親宴の和気藹々とした雰囲気、いずれもまことに楽しく、あっという間に一日が過ぎてゆきました。麻生路郎読本を繙きながら川柳の勉強をしてみようかと思っています。

高瀬霜石さん（同人・青森）

弘前一行7人は、まず「一路賞」受賞者の今愁女さんに拍手。一緒に来た中で最若手、30歳代の村井規子が、天根夢草選の「天位」に抜けたので、もう最初から全員大騒ぎ。
僕以外は飛行機だけど、僕だけ夜行列車の旅。着いたのは8日の午前。ひょいと見たら「新歌舞伎座柿落とし—GACKT／2010眠狂四郎無頼控」とあり、一五、〇〇〇円奮発して観る。次の日も、大阪を満喫。特に、遠野さんと美籠さんに感謝。

西崎久美子（番傘・佐賀）

吉野ヶ里から来ました。父も母も番傘同人ですから、日川協の大会その他よく参加しています。大会は楽しいから大好きです。
川柳塔の大会は初めてですが、今日の雨を吹っ飛ばすようなパワーに圧倒されています。連れてきた五歳の姪もジュニアで川柳を作るのですが、今日はたくさん抜けてご機嫌でした。楽しい時間をありがとうございました。

川崎ひかり（同人・香川）

四年ぶりに大会に参加しました。五百人もの参加者と聞いて、今までで一番多かったのではないでしょうか。参加して良かったです。
木津川先生のお話には栞先生、薫風先生のお名前も出て、懐かしく嬉しい時間を過ごしました。木津川先生の川柳に対する愛情あふれるお話や、たくさんの作品を聴き、もう一度初心にかえって勉強したいと思います。

熱気！一〇〇〇号大会

都倉　求芽（同人・京都）

出席者で埋めつくされた金剛の間。もし雨でなければその熱気で空調も効かなかったかも知れぬ。日頃お目にかかれぬような各社代表の披講、地方人の小生には体が熱くなるのがわかる。千載一遇、この大会に僕はいる。披講される一句一句に時間の経過の早いこと。帰りの手には路郎師の人格そのままの重い読本と天笑主幹の句集がずしり。電車に揺られながらまだ余韻に体は火照っていた。

川柳大会入選句

虫

天根夢草選

国勢調査秋の一夜は虫になる　弘津秋の子
鈴虫が地デジ地デジと急き立てる　酒井　純子
パスポート持ってナポリへ行くホタル　板尾　岳人
他人とは思えぬ冬のダンゴ虫　柿花　和夫
丸まってぶりっ子になるだんご虫　足立千恵子
ダンゴ虫丸い心で丸くなる　鍛原　千里
かなぶんがわざわざ部屋に来てくれる　湯澤冬扇坊
ボーフラの儘で死ぬのは嫌なんだ　松本　文子
あなたは凄いゴキブリ素手でつかむもの　小林　わこ
ゴキブリの存在感に負けている　西出　楓楽
深呼吸虫をなだめているところ　大村美千子
職安でアリがキリギリスと出会い　川上　智三
揺れたのは私が毛虫だった頃　西崎久美子
ごねている虫だひっくり返っている　川本　畔
死んだふりしたゴキブリに逃げられる　岩切　康子

秋は本物ほらコオロギが啼いている　太田扶美代
小さな花小さな虫が寄ってくる　前　たもつ
てっぺんでてんとう虫は考える　片岡　加代
絵日記のために飛んでる赤とんぼ　濱山　哲也
ふるさとの虫耳底に飼っている　原　清晋
ゴキブリの艶にんげんを脾睨す　田頭　良子
おけらだって意地があるから鳴くのです　北川ヤギエ
がみがみと妻がちゃがちゃと轡虫　次井　義泰
黒揚羽　誰の化身か従いてくる　奥田みつ子
もう殻に戻る日もないアブラゼミ　海老池　洋
アスファルト蝉は地上に出られない　井丸　昌紀
少年を少年にした捕虫網　宇野　幹子
保護色の虫にころりと騙される　上地登美代
青い夢ばかり見ていたキリギリス　赤松ますみ
虫の声僕もハモニカ吹いてやる　山田　耕治
耳もとで蚊に遊ばれて朝になり　山根　妙子
ありがとう今年も虫が鳴いてくれ　多久和敬子
耳底でミンミン蝉が鳴いている　津村志華子
秋ですよつらくはないかキリギリス　田中　女里
昼間見る蛍はただの虫になる　両川　無限
秋深しさみしい虫が寄ってくる　遠山　唯敎
人肌を恋うように鳴く秋の虫　佐藤　治代
我が町に蛍をもどす川掃除　緒方美津子
虫が蠢く三月の月曜日　斉尾くにこ
終電車みな蓑虫になっている　川上　大輪

一人寝にちょっと寂しい鉦叩き　松尾美智代
嫋嫋と虫の音響く古戦場　八木　侑子
虫が虫食べてこの世は冬支度　長谷川博子
ファーブルを偲んで森を訪ね行く　喜田　准一
がんばって生きていますと虫が鳴く　新家　完司
朱雀門大宮人か虫の声　笠嶋　恵美
毛虫焼く心が夜叉になっている　桑田ゆきの
虫に刺されて真っ赤に腫れてくる命　寺川　弘一
蚊を打ってわたしの生を確かめる　たむらあきこ
突然の客をもてなす虫の声　加島　由一
虫すだく敵意はみんな消えました　柴本ばっは

佳

蜂の子もイナゴの味も知っている　平松かすみ
几帳面な尺取虫を見て飽きず　大川　桃花
図鑑からふわりとびたつ揚げ羽蝶　荻野　浩子
蝉の穴死んだら穴に入れない　原　章峰
自叙伝を書き終えたときとぶ蛍　岡田　俊介

人

昆虫採集平常心で針を刺す　中村　和

地

虫喰いの栗は素直に水に浮く　中村　和

天

先に立った不孝を詫びに来たホタル　村井　規子

軸

飢え死にをしないだろうか網の蜘蛛　坂部紀久子

深い

平山繁夫選

後悔の数深爪となっていく　村上　直樹
残り蚊のもう春のない深い鬱　山本　柳昌
深い川あなたとならば渡ります　萩原三四郎
投書欄市井を生きる深い智慧　山崎　武彦
深い闇ひとりの奇声から戦　たむらあきこ
サブタイトル付けて深さの示唆をする　齋藤さくら
政治家の深い話が週刊誌　吉川　哲矢
何ひとつ愚痴は言わない深海魚　西出　楓楽
身の内に詩人は深い森を持つ　安土　理恵
井戸の深さいつか子どもに教えねば　山本　義子
時計の針深いみちびき持っている　籠島　恵子
墨いろいろ闇の深さに突きあたる　北野　哲男
風船が空の深さを見に行った　渡辺　富子
深い山河持った男に惚れました　伊藤　玲子
深い闇抜けると待っていた蛍　松山　芳生
夢の裂目に底深い闇の雲　内田　久枝
モザイクで隠し通した深い傷

深い闇抜けてあなたの庭で咲く　清水美智子
因縁の深さは裏の井戸にある　髙田美代子
深層の思いあかさぬ帯の芯　田原　一兆
ときどきは深みにはまる調律師　前田芙巳代
くるぶしの深さで溺死する驕り　上嶋　幸雀
先に逝ったあなた深いとこでお待ちです　柴本ばっは
深追いをするから返り討ちにあう　片山かずお
根の深いうらみが柩までつづく　中田たつお
長ぐつの中まで入るあの噂　上田ひとみ
魂と深く生きたか影法師　矢沢　和女
深窓の佳人となっていく枯れ野　荻野　浩子
衝撃の深さ時計の針を止め　楠見　章子
俎板の上で眼を剥く深海魚　佐波　正春
刃毀れのナイフに深い川がある　赤松ますみ
霧が深くて今は身動き出来ぬ国　杉野まつ子
読むごとに深さに触れる歎異抄　岩田　明子
追伸へ深いくさびを打っておく　中　博司
寂聴の説話が秋を深くする　山本　昌乃
魂の深いところで手をつなぐ　宮田　宜子
深いポケットに銃弾二三発　黒川　孤遊
残照へ深みを刻んでいく時計　森吉留里恵
織田作に嵌る深夜の失語症　笹倉　良一
ふところの深さを知った遠花火　沢田　和子
深〜い話たんと持っている昭和　髙杉　千歩

５７５この水深がぼくに合う　田口　麦彦
情の深さは罪の深さか女郎花　岩本　笑子
草食系父の轍を抜け出せぬ　山岡冨美子
欲深い男で旗を二本持つ　片山　忠
白と黒互いの深さ探り合う　北川ヤギエ
ひと言も喋れぬ母の深い闇　早泉　早人
深読みをして真相に遠ざかる　山田　順啓
よろこびの声が届くか深海魚　森中惠美子
鶴の句の丸太の深さ語り継ぐ　奥山　晴生
詩を愛す女に深い森がある　片岡　湖風

佳

ふたりっきりの時間深みどりに染まる　小山　紀乃
深い吐息のこして花水木は散った　長浜　美籠
生きることに少し疲れて深い秋　小島　蘭幸
未使用の言葉を埋めてある　深い　松田　俊彦
ふところが深くて窃かえらない　山田　葉子

人

ふところの深さに海が凪いでくる　田中　新一

地

硯の海の深さが少しずつ違う　天根　夢草

天

深層に縄文杉は眠ってる　久保田半蔵門

軸

一〇〇〇号の深さで軽く溺死する

渡る

赤井花城選

いく世代渡る柳誌の金字塔　小沢　淳
黄信号むかしだったら渡るとこ　田原一兆
遷都祭海を渡って来た文化　原　清晋
いい度胸高速渡るカタツムリ　三谷たん吉
冤罪へ男検事と渡り合う　吉川哲矢
スクランブル盲導犬の足確か　柳瀬孝子
地獄耳危ない橋は渡らない　坂　たかし
油断大敵渡りに舟がやって来る　三宅保州
世を渡るやさしい鬼と手をつなぐ　竹森雀舎
渡るにも方舟すでに向こう岸　黒川孤遊
年金から年金までの綱渡り　大隈克博
面接を渡り歩いた万歩計　峯村勲弘
待ってます恋の遮断機上がるまで　坂田喜久子
余部を渡る最後の汽車に乗る　吉木栄子
若さゆえ車道を渡る夏ミミズ　斉尾くにこ
誰も無口で粛粛と川渡る　森山盛桜
陸橋を渡るぶつぶつ言いながら　片山　忠

魂を一つに神輿川渡る　樋口　眞
電線で旅の相談渡り鳥　小柏幹子
稜線を渡り切るまでさわがない　白根ふみ
世渡りの上手な友が先に逝き　高田博泉
ミサイルはお止しよ鶴の渡る空　右田九九
戻れない橋を渡って来て夫婦　吉川寿美
困ったらいつも渡った母の橋　岩崎玲子
風渡る金木犀の香をまとい　片山かずお
やっと秋苅田を渡る風薫る　松本知恵子
一生を渡り切るまで恋をする　柳楽たえこ
盧舎那仏渡る世間へ灯をともす　渡辺富子
ニッポンをまだ信じてる渡り鳥　松山芳生
渡り初め済んでみんなの橋になる　高島啓子
てにをはを変えると渡りやすい橋　西出楓楽
渡り切るまでこの手握っていてあげる　安土理恵
次世代へ渡すバトンが見つからぬ　鶴田遠野
あれやこれ捨ててゆっくり渡る世だ　河内月子
いくじなしを引っぱりながら橋渡る　田頭良子
遊ぶ間も取って時間の綱渡り　河内天笑
ことば尻渡りに舟とすがられる　栗田久子
火の橋も渡る家族を背負ってる　岩田明子
湖渡る風は秋です観世音　山崎彩子
まほろばを催馬楽過る遷都祭　土田欣之
雲渡る　遠い記憶の祭り笛　矢沢和女

人間不信なので浅瀬を渡ります　長谷川博子
渡る風と風鐸ハモる法輪寺　田浦　實
にじのはしわたりたいけどきえちゃうよ　まつおすず
長い橋渡る迷いの消えぬまま　足立千恵子
渡っても渡ってもなお母の海　牧野　隆之
火も水も渡る女の骨密度　武本　碧
神様がはいと言ったら渡る橋　原　章峰
秋ひとり時雨の橋を渡りきる　前川千津子
外来種だけが渡って来る島よ　田口　麦彦
暑かった渡り案ずる秋の空　吉田孔美子

佳

綿菓子に手回しの秋渡される　小谷　小雪
虹の橋渡る友あり風が舞い　中原比呂志
彼岸花を渡る佛さんのまつり　森中惠美子
良心に背いて渡る橋もある　鈴木　栄子
ペンライト揺らせて仮の世を渡る　赤松ますみ

人

わけあって人手に渡る鬼瓦　中田たつお

地

陸橋を渡る夕陽と風船と　奥山　晴生

天

神の手に渡る手術後の時間　小山　紀乃

軸

水のない川橋の名が美しい　まつおすず

車輪

森中惠美子　選

じてんしゃにまだのれないよれんしゅうだ　沢田　和子
補助輪も杖も外した青い空　櫻崎　篤子
成田山のお札が貼ってある車両　市坪　武臣
大車輪で働く蟻の冬支度　太田扶美代
胸底にくっきり昭和期の轍　鈴木いさお
リヤカーの車輪は土の道が好き　前　たもつ
古都に酔いガイドに惚れて人力車　原田すみ子
床の間に飾ってほしくない車輪　中山惠美子
ヘルマンヘッセと秋を走ってきた車輪　山崎　武彦
くっきりとタイヤの跡にある献花　寺川　弘一
二輪車に出世がしたい猫車　奥山　晴生
ドーナツの車輪かぼちゃの馬車が来る　山岡冨美子
まだ恋のいろはを知らぬ一輪車　榎本　舞夢
百歳で車輪花束贈られる　小川　佳恵
走り出す準備はじめた観覧車　赤松ますみ
灯を消して甘い車輪になってゆく　田中　新一
限界に挑むレースの車椅子

レールから外れたがっている車輪　西　美和子
夜汽車に揺られぼくは大人になりました　髙瀬　霜石
補助輪はそっと外しておきました　上嶋　幸雀
自転車で宇宙旅行をしてみたい　小谷　集一
脱輪は出来ぬ子がいる妻がいる　小川てるみ
車輪の下平和を叫ぶ作家いる　大谷　篤子
不器用なちちの轍を追っている　福士　慕情
月面にわだちを残すかぐや姫　入江　秀雄
手抜きする車輪を叱る空回り　北川ヤギエ
休肝日車輪の軋む音がする　吉井菜々子
てっぱんの車輪が回り出す八時　土田　欣之
片方が目立ちたがっている車輪　河内　月子
前輪は父後輪母で良く走る　松下比ろ志
声かけてブレーキ掛けて秋の坂　中島　華
夏バテの車輪温泉巡りする　柳楽たえこ
残業を終えた車輪にビール注ぐ　伊藤　玲子
ユートピア車輪は風に乗り易い　林　瑞枝
婚活の愛は車輪が噛み合わず　山野　寿之
夕方に車輪の油注しに行く　山田　耕治
焼酎を飲むと元気になる車輪　新家　完司
D51の車輪に止まる赤トンボ　澤井　敏治
車輪の下猫が昼寝をしています　志田　千代
幾万のアリの命を知る車輪　村岡　義博
わたくしの車輪時々足湯する　持田　英子

まだまだと湿布を貼っている車輪　籠島　恵子
車輪止めに躓く変な癖がある　森村　美花
お金見せると元気になる車輪　仲田美千代
輪回しの少年の日の軽い飢え　木本　朱夏
コスモスの海を走っていく車輪　伊藤　寿美
阿修羅像も大車輪して遷都祭　日野　愿
おとこの車輪おんなの車輪嘘をつく　たむらあきこ
ヘッセとは車輪の下で会いました　上田ひとみ
大車輪龍馬に代わる者いない　黒川　孤遊
生と死の吃水線を一輪車　池　森子

佳

一輪車にも花道をあたえよう　政岡未延子
アンパンマン乗せて寂しくない車輪　杉本　義昭
後輪が地の果てまでもついてくる　天根　夢草
轢き逃げを絶対許さないタイヤ　西内　朋月
盆の窪当たりで回りだす車輪　髙田美代子

人

平成の車輪の上の影絵たち　岡田　俊介

地

後輪はまだ検察の中にある　加島　由一

天

戦争に行った車輪が戻らない　鈴木　公弘

軸

イヤリングつけると走り出す女　森中惠美子

スピーチ

田口麦彦選

英語のスピーチせぬ方がいい日本人　三村　舞
いい祝辞だったねとても短くて　金子美千代
さわやかなスピーチでした 済みました　松田　俊彦
自画自讃入れてスピーチ長くなる　片岡　湖風
スピーチがそろそろ来るぞ喉渇く　辻内げんえい
あのネタのあのスピーチをまたですか　村岡　義博
スピーチの原稿ルビを振っておく　福永ひかり
先輩としてスピーチで釘も刺し　北出　北朗
如才なくスピーチをする族議員　吉田　知之
スピーチに少し動いた海老のひげ　松本としこ
悪友が僕を裸にする祝辞　福士　慕情
悪友を名乗る祝辞があたたかい　安芸田泰子
スピーチに混ぜて伝えた裏話　藤井　文代
横道に逸れスピーチが加速する　川上　大輪
アドリブの過ぎたスピーチ白けさせ　寺井　弘子
スピーチに笑顔を添えて披露宴　坊農　柳弘
せんせいのはなしはいつもねむいんだ　まつおすず

スピーチにかえて一曲歌います　萩原　美雪
レモンひとしずくスピーチしめくくる　森　茜
ほおばったとたんスピーチ指名され　大久保真澄
司会者が時計にらんでいる祝辞　両川　無限
スピーチのとちったところだけ受ける　奥　時雄
着任の挨拶ちらと見た鎧　米田　恭昌
盛大な拍手は短かったから　大隅　克博
官僚の筋書きなぞるスピーチだ　山崎　武彦
メデタイと一言じいちゃんの祝辞　籠島　恵子
人生はうたかたスピーチの長さ　小山　紀乃
スピーチが上手くて怖いヒットラー　上山　堅坊
玉の汗球児のスピーチポジティブに　中南　杏子
新郎はスピーチのたび身構える　岸本　孝子
朴訥なスピーチ空気変えてゆく　中井　アキ
スピーチの途中矢印見失う　船越　洋行
スピーチの水ひと口に助けられ　榎本日の出
スピーチを失敗談で盛り上げる　飛永ふりこ
スピーチに慣れ壇上で水を飲む　高島　啓子
おめでとうだけのスピーチ受けました　坂　裕之
スピーチの最後に一句趣味の友　小谷　集一
原稿のないスピーチが胸を打つ　広岡　栄二
スピーチで人笑わせる芸を持ち　小泉ひさ乃
帯きりりスピーチうまくいくように　清川　玲子
水所望してスピーチを整える　赤井　花城

内輪でのスピーチ舌が乾かない　長谷川博子
スピーチに自慢を挟まないように　新家　完司
乾杯のグラスが重い長話　髙杉　力
スピーチが笑えてみんな生きかえる　白根　ふみ
タキシード下手なスピーチカバーする　原田すみ子
スピーチを色よく染めた五七五　竹山千賀子
おめでとうだけのスピーチ忘れない　齋藤さくら
宣誓は大阪弁でしてみたい　井仲　泰生
暗記したスピーチ途中から蛇行　村上　玄也
スピーチのうまさ妻には叶わない　黒田　能子

佳

教え子のスピーチ褒めてくれるかな　弘津秋の子
砂時計おかれスピーチうろたえる　天根　夢草
広告にどんどんなってゆく祝辞　菱木　誠
スピーチの中に密かな火の匂い　政岡未延子
赤ちゃんが泣いてスピーチが終る　江見　見清

人

正直なお方スピーチまで本音　山本　半銭

地

スピーチのメモは着換えた服の中　井丸　昌紀

天

フィナーレを飾るスピーチ隅に居る　久保田千代

軸

お静かにスピーチぐらい聴きなさい　松山　芳生

価値

大野風柳選

決断をしたのは僕の財布です　金築シゲ子
付加価値もなくテロップになる私　前田芙巳代
正札の通りに秋はやってこぬ　まつおすず
おまもりがいちばんだいじなかちなんだ　島田千鶴子
価値観が違う寝たふりしておこう　竹山千賀子
安くても似合っていれば価値がある　小川　イセ
カスミ草主役に勝る価値がある　上村八重子
直立で聞くに値のある話　小島　蘭幸
黙ってるほうが私は価値がある　石田　隆彦
縁無いが二千円札まだあるの　吉川　卓
人の価値ふと考える青テント　前川千津子
私には大事な蔵書さて他は　西出　楓楽
失ったものの価値など思う秋　岩崎　玲子
残す価値ドナーカードひとつだけ　山本憲太郎
ノーベル賞埋もれたままに半世紀　長井　善純
戸籍だけ長寿国では価値がない　佐藤　治代
生かされる価値へ逆立ちしたくなる

わたくしの価値は西瓜と同じ音　川本　畔
表装が五十万なら本物だ　銭山　昌枝
以下同文いつもわたしはその辺り　清水美智子
同居をめざし付加価値をつけている　小川　佳恵
小銭入れ一円足りた有難さ　坂部紀久子
転んでもすぐ立つそして笑うのよ　村井　規子
立ち読みなんかで私の価値が読めますか　きさらぎ彼句吾
どうにでもなる一本の藁の価値　次井　義泰
罪人に何とノーベル平和賞　井仲　泰生
ガラクタの美学を笑うなら笑え　金子美千代
コンビニのトイレ何より有り難い　楠見　章子
ジーパンは洗うものではないらしい　森田　麗
わたくしの価値をアンケートが決める　山本希久子
そのうちに私の指輪ただでしょう　河内　月子
お母ちゃんあんたの代りおりません　太田としお
札束は今はいいから飯をくれ　池澤　大鯰
まだ立てるまだ歩けます両の脚　山﨑　彩子
本人の居ない所にある値打ち　髙田美代子
白骨になっても隠す価値もある　森本　弘風
自筆二通日付が抜けた遺言書　小川てるみ
我が家宝敢えて鑑定したくない　辻内げんえい
えんぴつは生きる力を生んでくれ　福永ひかり
宝石箱開けて赤字の遺言書　古川　奮水
マンネリの価値のない羽根そぎ落とす　吉川　哲矢

楷書にも似た我が道に価値を見る　小谷　滋彦
こんな時に笑って価値を下げました　小林　わこ
命は蝿と鯨にアンケート　黒川　孤遊
価値のないことが結構おもしろい　西口いわゑ
価値観は命か煙草一本か　森山　盛桜
目から鱗正反対の価値観に　山本　半銭
ペンダコに誰も知らない価値がある　奥田みつ子
生きていて下さいそれでいいのです　居谷真理子
人を創ろう菜食も肉食も　森中惠美子
熟成のワインで話でかくなる　森村　美花

佳

普通の人で良かったと思ってる　谷口　義
鑑定のどう出ようとも父の壺　松田　俊彦
贋作を知っているけど好きなんだ　寺川　弘一
すぐ開く扉で見くびられている　たむらあきこ
男の価値も顔で決まりになってきた　小西　明

人

一本の樹に拘泥る蝉の抜殻　渡辺　春江

地

奥の間にただ居るだけの価値がある　鈴木　公弘

天

無限大の価値赤ちゃんは丸裸　森　茜

軸

溜め息をしてから少し元気出た

事前投句

千

河内天笑選

千の星輝き渡る塔祭り　津田シルク
千の手の拍手まつりの幕が開く　亀岡　哲子
千号に生きてる幸を噛みしめる　川端　一歩
千号の舞台へ挑む初参加　上村八重子
飲み乾して千一号へジャンプする　指宿千枝子
千一号新たな門出祝う風　碓氷　祥昭
一〇〇〇号に新たな力もらう今日　岩崎　玲子
陶冶の詩魂継いで一千号　前　たもつ
千号に生きた証の句をのせる　阿部　紀子
千号に出会える幸を噛みしめる　三島　淞丘
千勝の偉業魁皇高ぶらず　坂上　淳司
千年の後の世界を見てみたい　若松　雅枝
千円でわたくし流のお洒落する　竹山千賀子
千円に見えない服で闊歩する　瀬戸まさよ
千円で鎧を脱ぎにゆく屋台　中田たつお
千円で三食たべて生きている　本田　智彦
旅人の目に美しい千枚田　伊藤　寿美
千枚田明日を信じて夕焼ける　山田　葉子

悠久の風吹き渡る千枚田　藤井　宏造
腹で吸う千年杉の吐く精気　湯澤冬扇坊
一千号星星に美酒ささげたい　緒方美津子
千年を生きながらえる心柱　山口　光久
千羽めの鶴がやさしく微笑んだ　鍛原　千里
開墾の労苦彷彿千枚田　増田　隆昭
千の手で折られた鶴の千の彩　浅雛美智子
千人針二度と縫ったりしたくない　笹倉　良一
千円は欲しい時給のヘルメット　早川　遡行
ストレスを千切りにする台所　楠見　章子
千本のバラより君と飲むお酒　吉井菜々子
ポストまで千歩の足が重くなり　佐藤　治代
ご立派になられて千円の秋刀魚　谷口　義
千人の情けは受けている傘寿　宮崎シマ子
千回も登れば足が羅針盤　上野　楽生
千回は喧嘩しましたルビー婚　田中美弥子
千回も仲直りして一つ屋根　山本希久子
千回泣いたら千一回笑う　森山　盛桜
千号記念参加ができる運の良さ　田浦　實
五百羅漢をカップルにしてみよう　森中恵美子
千円の重さ知ってる小銭入れ　髙田美代子
千の嘘真ひとつで許される　岩佐ダン吉
千の坂越えて深まる視野無限　小川あき子
一本のペン千本の矢を放つ　海老池　洋
知らぬ顔している妻の千里眼　遠山　唯敦
育んで千の手をもつ母となる　早川　孝子

笑顔よし鬼千匹に慕われる　竹田　東六
その時は千人力の妻が居る　上嶋　幸雀
千号記念天も笑うと言う奇縁　小川てるみ
句のご縁千の笑顔でつなげたい　池田　純子
千号は先ず仏壇へ供えよう　新家　完司
先人をたたえて抱く千号誌　平嶋美智子
先達も一千号の盃を持ち　岸本　孝子
喝采も火の粉も浴びて千号誌　伊勢田　毅
千を越え二千号へと夢馳せる　有沢せつ子
千号の宴に路郎師来てなさる　源田八千代
創刊の師の熱を継ぎ千冊目　岩崎　公誠

佳

風雪に耐えた千号温めあう　白根　ふみ
屋久杉の前ではちっぽけな私　宇都宮ちづる
千年も飽きず食べてる握り飯　志田　千代
わたくしの勲章だろう千の傷　髙瀬　霜石
千号の塔が居城という誇り　政岡未延子

人

千円札は大阪の匂いする　原　章峰

地

千の月うまそうに呑む千枚田　渡辺　富子

天

神神しい川柳塔の一千号　安田　忠子

軸

千段の踊り場映える塔の道

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』

A5版
514頁
定価　三〇〇〇円
（郵送料共）

目次

麻生路郎アルバム
麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」
麻生路郎文集・麻生路郎語録
麻生路郎物語（東野大八）
麻生路郎の人と作品
麻生葭乃作品「福寿草」
麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
麻生路郎・葭乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543—0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号
花野ビル201号
電話　06—6779—3490
川柳塔社

川柳大会参加者

総数　517名
（順不同・敬称略）

【北海道】　小沢　淳
【青　森】　今　愁女　高瀬霜石　濱山哲也
福士蕨情　松山芳生　村井規子
きさらぎ彼句吾
【長　野】　桃澤健介
【新　潟】　大野風柳
【岐　阜】　板山まみ子
【静　岡】　渡辺芳子
【愛　知】　早川遡行　藤田千休　奥村百合江
吉田幸子　脇田雅美　金子美千代
関本かつ子
【滋　賀】　久保和友　田中荘介
【京　都】　今井弘之　奥山晴生　垣尾宣子
櫻崎篤子　高島啓子　都倉求芽　西村益子
藤井文代　松田俊彦　桝本宏子　三宅滴子
山田葉子　山本昌乃　松本としこ
【大　阪】　浅野房子　安達忠央　赤松ますみ
油谷克己　天根夢草　荒川鈍甲　阿野寿美子
有澤嘉晃　井伊東吉　池田純子　磯野いさむ
石橋直子　石橋優明　池　森子　伊藤アヤ子
磯本洋一　板尾岳人　井上一筒　秋田あかり
井丸昌紀　入江秀雄　岩崎公誠　岩佐ダン吉
岩崎玲子　岩田明子　上嶋幸雀　山本憲太郎
上野楽生　上山堅坊　碓氷祥昭　安芸田泰子
榎本舞夢　内海幸生　海老池洋　江島谷勝弘
江見見清　大川桃花　大隅克博　井上じろう
太田　昭　大谷篤子　岡田俊介　指宿千枝子
小栢幹子　小川佳恵　荻野像山　榎本日の出
荻野浩子　奥　時雄　小谷滋彦　両澤行兵衛
乙倉武史　柿花和夫　籠島恵子　太田としお
笠井欣子　笠嶋恵美　加島由一　太田扶美代
梶原弘光　片岡湖風　片岡加代　オカダキキ
河井庸佑　河内天笑　河内月子　奥田チエコ
川端一歩　川端六点　北出北朗　片山かずお
北村賢子　吉川寿美　吉川哲矢　鴨谷瑠美子
栗田久子　黒岩靖博　黒川孤遊　北川ヤギエ
桒原道夫　小谷集一　小西　明　木見谷孝代
小林わこ　近藤　正　坂たかし　木山歌留多
坂　裕之　坂上淳司　佐甲昭二　森中惠美子
佐藤忠昭　佐藤英美　佐波正春　桑田ゆきの
澤井敏治　沢田和子　澤田定子　源田八千代
塩満　敏　志田千代　初代正彦　小泉ひさ乃
杉谷和雄　杉本義昭　鈴木栄子　古今堂蕉子
関よしみ　田浦　實　高杉　力　小寺竜之介
高田博泉　高木道子　田頭良子　高田美代子
高杉千歩　竹田東六　竹森雀舎　阪井美世子
竹村穏夫　伊達郁夫　田中螢柳　佐々木満作
田中新一　田中　都　谷久美子　齋藤さくら
谷口東風　谷口　義　次井義泰　柴本ばっは
土田欣之　妻谷重風　鶴田遠野　島田千鶴子
津守柳伸　寺井弘子　寺川弘一　神野千恵子
遠山唯教　丹後屋肇　鳥居　宏　鈴木いさお
内藤憲彦　内藤光枝　中井アキ　瀬戸まさよ
永井縣祚　長井善純　中岡　妙　左右田泰雄
中島　華　永田章司　中野健吾　高木世紀子
中南杏子　中村　和　中村　惠　佐々木四郎
西美和子　西川更紗　西川玲子　田中美弥子
西出楓楽　林　澄子　早泉早人　津田シルク
原　清晋　針生和代　板東倫子　津守なぎさ
樋口　眞　堀田温子　久永尚子　津村志華子
日野　愿　広岡栄二　広島邑子　徳山みつこ
福岡末吉　福田悦子　藤井則彦　出口セツ子
藤井正雄　藤村亜成　藤原　昭　冨山ルイ子
本田智彦　前原正美　前田紀雄　中田たつお
升成　好　増田隆昭　松井敏子　西村りつえ
松田　聡　松村里江　右田九九　湯澤冬扇坊
水野黒兎　峯村勲弘　富田美義　羽田野洋介
宮西弥生　三好聖水　三村　舞　原田すみ子
森　茜　元永雅子　森田　麗　久永ちゃこ
森本弘風　森村美花　森山盛桜　平嶋美智子
村上直樹　村上玄也　八木侑子　平松かすみ
安田忠子　山崎彩子　山根妙子　弘津秋の子

矢野　梓　山本蛙城　山本エミ　福元田鶴子
山本半銭　山本三郎　横山捷也　藤島たかこ
吉岡　修　吉川弘泰　吉木栄子　俣野登志子
米田水昇　雪本珠子　吉田知之　松尾美智代
吉村一風　米澤俶子　山野寿之　松尾柳右子
山本莞子　若松雅枝　前たもつ　松本初太郎
山岡富美子　和田つづや　宮崎シマ子
宮本かりん　山本加お里　森吉留里恵
吉内タカ子　山本希久子　大久保のん子
吉田喜代子　吉村久仁雄　久保田半蔵門
山本久美子　比嘉はるみ　宇都宮ちづる
西田いくひろ

【兵　庫】
赤井花城　足立　茂　浅雛美智子
石原歳子　泉　佳恵　伊勢田毅　足立千恵子
市坪武臣　臼井二英　梅澤盛夫　上垣キヨミ
岡嶋洋子　加川靖鬼　片山　忠　緒方美津子
金川宣子　株元玲子　亀岡哲子　奥田みつ子
北野哲男　黒田能子　糀谷和郎　久保田千代
小山紀乃　齋藤保子　酒井真由　杉山ひさゆき
酒田浩司　田中女里　田原一兆　竹山千賀子
長浜美籠　中井茂幸　西内朋月　七反田順子
西澤知子　早川孝子　樋口裕子　西口いわゑ
平山繁夫　福田好文　藤井宏造　前川千津子
藤岡りこ　堀　正和　古川奮水　前田美巳代
前川　淳　松谷大気　丸山孔一　牧渕富喜子
村岡義博　森本高明　山口不動　松下比ろ志
山口光久　山口美穂　山口桃子　みぎわはな
山崎武彦　矢沢和女　山田耕治　村山あかり
山本義子　両川無限　渡辺信也　吉井菜々子
上田ひとみ

【奈　良】
安土理恵　阿部紀子　居谷真理子
井仲泰生　岩本浩二　大内朝子　萩原三四郎
岡部幹和　鍛原千里　加門萌子　大久保真澄
笹倉良一　柴田園江　竹内聡一　大村美千子
中　博司　西澤知子　菱木　誠　杉野まつ子
坊農柳弘　前田弘恵　牧野隆之　辻内げんえい
松本桂子　宮田宜子　柳瀬孝子　飛永ふりこ
山田順啓　山本柳昌　吉川　卓　吉富ひろし
米田恭昌　和田次郎　渡辺富子　中原比呂志
藤原一志　中山惠美子　西久保隆三
大楠紀子

【和歌山】
石田隆彦　磯部義雄　岩本美智子
小川イセ　上田紀子　宇野幹子　上村八重子
川上大輪　川上智三　北山絹子　小川あき子
楠原富子　楠見章子　喜田准一　上野美枝子
木本朱夏　小谷小雪　酒井純子　上地登美代
寒川　武　武本　碧　田中みね　坂田喜久子
玉置当代　辻　翠子　福井菜摘　坂部紀久子
福重美子　福本英子　堀富美子　たむらあきこ
松尾和香　松原寿子　三宅保州　藤原ほのか
古久保和子　森下よりこ

【鳥　取】
池澤大鯰　稲村遊子　有沢せつ子
奥谷彩子　加藤正二　岸本宏章　後藤美恵子
岸本孝子　後藤宏之　白根ふみ　斉尾くにこ
新家完司　鈴木公弘　高浜　勇　竹村紀の治
田中一眸　田村邦昭　土橋　螢　福永ひかり
中原章子　西浦小鹿　萩原美雪　政岡未延子
林　瑞枝　平尾菜美　福西茶子　山本ふみ子
吉田陽子　湯浅久司　吉田孔美子

【島　根】
相見柳歩　安達幸子　金築シゲ子
安部武久　伊藤寿美　伊藤玲子　清水美智子
内田久枝　川本　畔　佐藤治代　多久和敬子
銭山昌枝　錦織禮子　原　章峰　竹治ちかし
松本文子　三島淞丘　持田英子　仲田美千代
森　茂美　柳楽たえこ　長谷川博子
松本知恵子

【岡　山】
撰　喜子　岡田耐子　高木勇三
恒弘衛山　船越洋行　渡辺春江

【広　島】
岩本笑子　小島蘭幸

【香　川】
清川玲子　川崎ひかり
山崎はつ恵

【高　知】
小澤幸泉　桑名孝雄　小川てるみ

【福　岡】
林さだき

【佐　賀】
西崎久美子　まつおすず

【熊　本】
岩切康子　田口麦彦　三谷たん吉
高野宵草

【シドニー】
坂上のり子

御芳志御礼（敬称略・順不同）

木津川計　大野風柳　田口麦彦　森中惠美子
天根夢草　赤井花城　田中新一　礒野いさむ
大木俊秀　西出楓楽　本田智彦　前田芙巳代
山崎重吉　村上玄也　籠島恵子　小川てるみ
髙野宵草　永田俊子　岩切康子　牧渕富喜子
仁部四郎　大内朝子　北村賢子　髙田美代子
新家完司　今　愁女　米澤俶子　鴨谷瑠美子
小島蘭幸　福士慕情　古川奮水　冨山ルイ子
河井庸佑　中原諷人　藤村亜成　小臼金房子
鍛原千里　松原寿子　土橋　螢　古今堂蕉子
森山盛桜　坊農柳弘　山本蛙城　西口いわゑ
天正千梢　前たもつ　鈴木公弘　前川千津子
稲村遊子　田中一眸　吉田陽子　斉尾くにこ
伊藤寿美　高浜　勇　山口美穂　山崎はつ恵
桑名孝雄　中南杏子　清川玲子　川崎ひかり
椙元世津　加島由一　内海幸生　藤原ほのか
都倉求芽　川端一歩　小糸昭子　瀬戸まさよ
寺井弘子　小林わこ　山口光久　山岡冨美子
岸　桂子　島ひかる　村上直樹　奥田みつ子
山本義子　黒田能子　鶴田遠野　山本希久子
井上照子　木本朱夏　米田恭昌　岩本美智子
長浜美籠　吉岡きみえ　飛永ふりこ
安藤寿美子
番傘川柳本社　川柳展望社　川柳塔みちのく
ふあうすと川柳社　時の川柳社　美研アート
川柳塔唐津　川柳塔きゃらぼく　川柳塔なら
川柳塔おっぱこ吟社　川柳文学コロキュウム
川柳塔わかやま吟社　川柳塔まつえ吟社
川柳塔鹿野みか月　川柳グループ草原
いずも川柳会　番傘わかくさ川柳会
川柳ねやがわ　川柳藤井寺　川柳塔さかい
京都塔の会　くろぼこ川柳会
川柳塔のぞみ有志
ホテル・アウィーナ大阪
オニザキコーポレーションセールス様から
記念品として、つきごまその他をたくさんご
寄贈いただきました。厚く御礼を申上げます。

祝電拝受（敬称略・順不同）

全日本川柳協会　番傘川柳本社　川柳展望社
ふあうすと川柳社　時の川柳社　川柳研究社

ご挨拶

通巻一〇〇〇号記念大会には多くのご参加を賜り、まことにありがとうございました。

当日は何かと行き届かぬ点も多かったことをお詫び申し上げますとともに、今後益々のご教導、ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

なお大会開催にあたり、貴重な誌面を割いて大会要項をご案内頂きました各川柳社、個人的にそれぞれご紹介くださいました各位のご厚情に厚くお礼申し上げます。

川柳塔社

誹風柳多留一一篇研究 63

山田昭夫・増田忠彦
山口由昭・小栗清吾
伊吹和男
清　博美

480 **そらつことありがたそうにむす子よみ**

山田　遊女からの手紙。口偏に空（唸）ばかりなのに、それを「有難そうに読む息子」。

こふ書ィてよこしをつたとうれしがり　安五仁3

清　賛。息子の勧進帳。

481 **いけぶといやつと又行く後三年**

山田　後三年の役。永保三年から寛治元年まで三年に亘って、奥州清原氏の内紛に端を発した争いが起こり、陸奥守兼鎮守府将軍の源八幡太郎義家が総大将として処理に当たった。義家は、同じ奥州で安倍一族の起こした反乱、いわゆる前九年の役に、父頼家と共に参戦しこれを平定しているから、「又か。懲りねえ連中だな。太え奴らだ」と言って、再び鎮圧に向かった。

ぞう兵ハ又来ましたと後三年　五4

清　賛。

482 **にわか雨御慶をのべてうらみられ**

山田　ちょっとはっきりしない。俄雨に逢って、たまたま入った家が、年礼などしたことのない家だった。そこで年始の挨拶をしたら、先方さんは、「雨にでも逢わなけりゃ、来ることもないのに」と「恨みられ」というようなことか。

年礼の落思ひ出す俄雨　一七31

年礼を壱けんふやすにわか雨　一五27

清　賛。初めの例句の状態。年礼を落として恨まれたのであろう。

483 **備前ものさけて大藤内はにげ**

山田　大藤内（王藤内）は備前吉備津彦神社の神官。建久四年の富士の巻狩りで、曽我兄弟が工藤祐経を襲った時、大藤内はたまたま祐経の狩屋に同宿していて、しかも遊女亀菊と同衾中であったから、備前長船ばりの名刀なる一物を「下げて大藤内は逃げ」という情況に陥った。彼はこの句では逃げたことになっているが、実際はその場で巻き添えを食って、兄弟に殺されている。

まきぞへに大藤内ハ不慮の怪我　新三八8

兄弟て下ろうを二人さしころし　天二礼2

清　賛。

484 **鳥ハものかわとやめないまけたやつ**

山田　夜明けを告げる鶏の声も「ものかわと止めない負けた奴」。博打で負けた奴は、負けを取り返そうと、なかなか止めない。それで徹夜勝負となるのだが、かえって墓穴を掘るのはそ奴というのが世の常。なお、この句、

小侍従の、

待つ宵にふけゆく鐘のこゑきけば
あかぬ別れの鳥は物かは

（『新古今和歌集』巻十三）

の文句取。

鶏はものかわ除夜の居風呂　ケイ七61

山口　賛。文句取なるほど。

清　賛。

485　**仕合な聟しやうかんでばつたばた**

山田　傷寒は「昔の高熱を伴う疾患。熱病。いまのチフスの類」（「日国」）。

婿入りしたら、何の幸いか、一家残らず「傷寒でばったばた」と死んで、期せずして全財産が転がり込んだ「仕合わせな聟」。

仕合な聟ハ位牌を早くもち　米沢初13

清　賛。世の中何が起こるかわからない。

486　**まちやれよのめるりくつが出来るによ**

山田　文字通りの句。悪仲間と集まっている時の話でもあろうか。悪知恵はこんこんと湧き出ずる清水のごとし。

時に斯ゥいふ理屈だと小便所　五八39

山口　賛。慌てる乞食は貰いが少ない。

清　賛。

487　**髪おきとはかま着を置キ川津死ニ**

山田　川津は、工藤祐経に殺された川津三郎祐泰で、その時、五歳の一万（十郎祐成）と三歳になる箱王（五郎時致）の二人の男の子が居た。七五三の祝いでは、男女とも三歳の時を髪置き、男の五歳を袴着という。因みに女の七歳は帯解き。

主題句は、祐泰は三歳と五歳の子を残して死んだというのを、謎句仕立てにしたもの。

祐やすハあたまを二つなでゝしに　明三礼3

清　賛。

488　**初かつほ辻番いらぬのぞきこと**

山田　初鰹は大変高価なもので、辻番如きがどうなるものではない。だから、所詮「要らぬ覗きこと」というのだろうが、だからこそ、当人にとっては、せめて姿だけでも覗きたいという心境なのではないか。

初かつほ御用手を出ししかられる　一18

清　賛。

489　**匂（ママ）とうのないしよろいを引ッかくし**

山田　勾当内侍は後醍醐天皇に仕えたのち、新田義貞に下賜された官女。

南北朝期、南朝側の名将・義貞は、有名な鎌倉稲村ケ崎での逸話などを残しながら、鎌倉幕府乱入して、北条方を攻め滅ぼすという軍功を上げる。ところがある時、内裏で勾当内侍を見かけてから、夢か現か、悶々とした日を送る。何時しかそれが天聴に達して、彼に賜ることになった。実はこれが正に傾国の美女で虻その後の義貞は惨々だった。

主題句は、勾当内侍は、愛し殿御が戦に行かないように、「鎧を引っ隠し」ただろうという穿ちだが、義貞は北国に南朝の拠点を築くべく越前に下り、奮戦するが、延元三年、藤島の戦で戦死した。あたら名将も末路は哀れであった。げに恐ろしきは、おみなり、である。

内侍はいりやうのちものぐさ大将　安八義4

勾当の内侍で番か大くるひ　拾五28

増田　賛。女郎もきぬぎぬの媚びでよく物を隠す。

小栗　賛。増田兄補説がこの句のヤマ。

清　賛。

麻生路郎句抄

（句集『旅人とその後の作品』から）

不死鳥

供託に質置く人をたのまんや
黒い鞄へ託す運命
現在の彼はいいたい事を云ひ
出は出たが一人はさびし松の内
世の中を巡査になってもてあまし
空は晴れたり蛙の平泳ぎ
銃先の原始を見たり柿の色
大男一町先をまだ歩き
面当ての寄附とも見える金の嵩
泣きごとは止せ止せどうせ十二月

水の垢

お金を預ってやろうとせめられる
肺であることなぜかくしたりするんです
僕は医者でも藁すべでもありません
鼻の偉大さ山脈を思わされ
障子さへ聞きつらい程叱って居
言訳も指環をいぢりいぢりする
素麺にお祖父さん丈けまだ坐はり
定食のこんなものまで数に入れ
羊羹のことでもめてる老夫婦
夜店出し余所の時計で去ぬ支度
三代も仕え番頭露次に住み
不渡りはたった三桁に足らぬ金
使ひきれない後家の収入
鑑賞のばら経済のなすも植え

追悼

相馬銀波さんを偲んで

斉藤　劭

健康で仕事好きの銀波さんが、八月二十七日、自宅の庭の松の手入れをしていた時に梯子から落ちて急逝されたという。私は、まさか、まさかとしばらく呆然としていた。農業が好きで、川柳が好きで日々ご活躍されていた銀波さん。青空の下でりんごを収穫している姿が、毎月開かれる弘前市桶屋町の居酒屋とんぼの川柳道場でお会いする温顔が目に浮かんできます。人生経験豊かで農業や川柳などいろんなことに造詣の深い方で、これからもいろいろお話をお聞きしたいと思っていたのにとても残念です。

銀波（本名市雄）さんは、農家の長男として昭和12年10月30日弘前市に生まれ、青森県立柏木農業高等学校を卒業されてから近代的で大型の農協として、全国的に知られている弘前市農業協同組合に二十八年間勤務して農業指導の仕事に携わり、弘前市の農業の発展のためにご尽力され、その後自家の農業に従事し、りんご、水稲、ぶどうを中心とした専業農家としてご活躍された。

川柳は、昭和54年より作句。故小堀市朗氏の手ほどきを受け弘前川柳社に入会。昭和58年夏、当時弘前川柳社の主幹の宮本紗光氏より雅号「銀波」を賜ったという。農業人らしい津軽平野の実りの稲穂に因んだ雅号である。また農家の普及誌である月刊誌「青森農業」の「川柳道場」欄で選者工藤甲吉氏の指導を受け、甲吉氏の所属する川柳塔社と川柳塔みちのくにも入会。川柳塔みちのくでは長年にわたり役員として活躍され、川柳塔社では平成20年の第14回川柳塔まつりで兼題「ぎりぎり」の選者をつとめた。

平成9年12月には百句集「遠吠え」を上梓された。その巻頭言で波多野五楽庵先生は、「銀波川柳は人情と思いやりに満ちた人間川柳であり、そしてそのうえに現代感覚を身につけた攻めの彩がにじみ出てきており、そこに銀波川柳の限りない探究と研究心が見てとれた。」と記してある。

また、農業を通して生命と価値を探求してきた銀波さんである。そのことは特に農業に関する句の中に生き生きと詠まれている。

銀波さんは、青森県川柳社60周年記念合同句集の中の「あなたにとって川柳」とは、という問いかけに「温故知新、特にお世話になった故人の句集を読むと新しい事が学べる」と書いている。なんとも味わい深い文である。ここに銀波さんの川柳を通して自分自身を磨き深めていこうとする真摯な姿勢がみられる。このような真摯な姿勢は麻生路郎先生の川柳は人間陶冶の詩であるということばにつながるものである。　享年七十四歳

ご冥福を心からお祈り致します。　合掌

遺句抄

いい風をもらい炎は生き返る
寒雛の声から春の詩を聴く
さよならが遅れ泪を見てしまう
遠吠えのままかも知れず署名する
一枚の落ち葉で村の土になる
真実はひとつ持論で締め括る
明日への夢は何度も書き直す
許し合う事も絆を太くする

愛染帖

新家 完司 選

美しいと断じて口にせぬ鏡

和歌山市　田中　みね

（評）問いかける度に「世界でいちばん美しいのは、あなた！」と答えてくれた日々もあったが、最近はサッパリ。残念なことである。

おトイレにクーラー欲しい熱帯夜

大阪市　太田としお

（評）歴史的酷暑となった平成二十二年の夏。「あの夏はメチャ暑かったなー」と笑って話ができるのも、耐えて生き延びたおかげ。

泣く程の賞をもらった事がない

八王子市　播本　充子

（評）受賞までの苦労が大きければ、報われた喜びで感涙するかもしれない。が、運良くゲットしたような賞では感激もない。

反省の言葉はみんなよく似てる

枚方市　寺井　弘一

（評）例えば、謝罪会見の言葉。心からの反省ではなく義務的にやっているだけなので、どうしても紋切り型になってしまう。

早く来て中座する席キープする

阿波市　三浦千津子

（評）目立たぬように、そっと消えるのが中座のエチケット。ベストポジションは最後列のドア近く。早く来て確保しておきたい。

孫いない自慢話は何もない

鳥取県　岩崎　和子

（評）孫自慢には孫自慢で返したいが孫はいない。かといって、他に自慢するものもない。入選句でも披露して煙に巻いてやろう。

図書館で会う爺さんは同級生

弘前市　高瀬　霜石

（評）老け方は個人差が大きい。が、いかにも「爺さん」という同級生に会うと、「俺もあんなものなのか？」と、へこんでしまう。

握手だけしましょうハグは熱いから

米子市　政岡未延子

（評）もちろん、相手は男性。握手さえ充分に馴染んでいない大和撫子にとって、欧米風の「ハグ」はちょっと大袈裟で熱すぎる。

好物は多目に盛ってくれる妻

堺　市　大隅　克博

（評）うれしいことである。やさしい妻のこまやかな心遣いと、それに気付いて心で感謝している作者。「ゴチソウサマ」でした！

虐待のニュース切なくテレビ消す

和歌山市　根田よしこ

（評）抵抗もできず、大好きなお母さんに叩かれて死んだ幼児。どんなに哀しかったことだろう。それを思うと胸が塞がる。虐待するなら児童相談所へ預けてほしい。

西宮市　吉井菜々子

ほどほどでいいのお酒もロマンスも
サボテンの花よりわたくしを撮って
ボサノバをBGMに生きている

堺　市　村上　玄也

現場知る者の重みのある意見
怖いもの地震ウイルス豪雨テロ

大阪市　柴本ばっは

車窓からここもあそこも運動会
片付けることいっぱいで死ねません

大和郡山市　坊農　柳弘

安売りの店を知ってる万歩計
赤い羽根福祉国家の見栄支え

川西市　岡嶋　洋子

猛暑日の散歩を嫌う万歩計
孫じゃなくしがみついたの猿だった

池田市　上山　堅坊

お賽銭5円で心軽やかに
一籠に盛られた顔で友と飲む

鳥取県　石谷美恵子

姿見の前で慌てて背を伸ばす
店頭で魚選る目は浜育ち

西宮市　泉水　冴子

口紅を優先席の隅で塗る
柔道に野球面白さを知らぬ

熱中症気遣いされる歳となる　奈良市　辻内げんえい
予報士に文句付けたくなる暑さ　浜松市　岡田　史郎
魂がずたになる暑さかな　鳥取市　近藤　秋星
生活の知恵塩飴を買う酷暑　大阪市　津守　柳伸
水風呂に入りビールで暑気払う　堺　市　遠山　唯教
かなしからずや見切り発車の虫の声　西宮市　牧渕富喜子
雷鳴に期待外れの涙雨　奈良市　矢野　良一
蝉しぐれ止めば鈴虫鳴いている　大阪市　板東　倫子
猛暑日に年賀葉書の予約くる　東かがわ市　川崎ひかり
我が家にも流儀ありますたまご飯　大阪府　米澤　俶子
玉の汗まだまだ余力ありそうだ　鳥取市　中宇地秀四
恋に勝るほどの美容液はない
ヤクザかと思っていたら刑事さん
落書にもったいないよ綺麗な字　和歌山市　松尾　和香
夫の声聴こえる気配草千里
夫婦旅偲ぶやまなみひとり旅

絵手紙のザクロはじけて母達者　奈良県　渡辺　富子
帰省子は黙ってビール飲むばかり　三田市　堀　正和
前略のまま天を仰いでしまう　大阪市　谷口　義
太陽を死ぬまで見ない深海魚　枚方市　海老池　洋
慶応の生まれ年金受給中　大阪府　籾山　隆盛
買えないが指紋べったりつけてくる　橿原市　居谷真理子
百均の棚に葵の紋所　弘前市　福士　慕情
ベルト穴いつもの穴が広くなる
鼻の差の口惜しさなんか知らぬ馬　藤井寺市　太田扶美代
ロマンスの欠片ぐらいは抱いている　寝屋川市　小谷　滋彦
シートベルト気にしてくれる小さな愛
もてなしに蚊遣りくゆらす懐かしさ
呼び捨ての友一人減り二人減り　箕面市　広島　巴子
大漁を期待してます鰯雲
歳よりも若く見られて五十肩　岸和田市　井伊　東吉
女性客主体にスーパー模様替え
編集をしてみてわかる誤字当て字

退屈な時は歴史の本を読む　京都市　高島　啓子
新種発見地球は広いなと思う
寂聴さんは元気負けていられない　藤井寺市　鴨谷瑠美子
感動の涙は人前でも流す
分からないことも多いが生きている　堺　市　加島　由一
金魚にもどうもいじめがあるようだ
香水を振って眼科の治療室　東京都　岸野あやめ
都営皆無料高齢定期券
台風は北朝鮮に行って吹け　鳥取市　土橋はるお
何時もわたし庇ってくれた友が逝く　寝屋川市　冨山ルイ子
肩書きも消えてお喋り減ってくる　八尾市　吉村　一風
赤は卒業ピンク色にはまだ未練　寝屋川市　籠島　恵子
永遠の僕のテーマは逆上がり　和歌山市　磯部　義雄
好奇心まだ大丈夫だいじょうぶ　香芝市　大内　朝子
イルカには負けた私の好奇心
快復のピッチに合わす酒の量　羽曳野市　徳山みつこ
　堺　市　奥　時雄

羽曳野市　吉村久仁雄

旅に出てすぐ善人の顔になる
大阪市　古今堂蕉子

藤川の代わりに投げる夢を見る
西宮市　片山　忠

辣腕家老人会に向きません
芦屋市　黒田　能子

ちらかった机の上もわたし流
豊中市　水野　黒兎

これも加齢年々土鍋重くなる
米子市　白根　ふみ

診察券で重たくなってゆく財布
紀の川市　辻内　次根

精密な機器で測れば不良品
八尾市　髙杉　千歩

マチュピチュを寝転んで見るＤＶＤ
松江市　三島　淞丘

ライバルが枕の中に棲みついた
シドニー　坂上のり子

山仰ぎ住みたい夢を崩す雨
鳥取市　土橋　螢

能力を認めてくれる職が無い
和歌山市　福本　英子

学歴は無いが職歴父を越す
豊橋市　藤田　千休

全自動妻をずぼらに変えてゆく
奈良市　尾畑なを江

主婦業が板に付いたら昼寝ぐせ
京都府　松本としこ

屑金魚まつりの日から玄関に
米子市　後藤　宏之

期待した夏やせもせず秋が来る
橿原市　安土　理恵

マンネリを少し揺らした猫じゃらし
吹田市　太田　昭

再生紙バージンよりも高くつき
和歌山市　古久保和子

新米の香り二杯目三杯目
橋本市　石田　隆彦

夢散ってポッケに残る電車代
豊中市　安藤寿美子

一〇〇ＣＣ足らずの酒でよく眠る
西宮市　緒方美津子

二次会で唄えるほどの酒がいい
姫路市　古川　奮水

昭和の児ご馳走だったソーダ水
豊中市　荒巻　夢

戦わず飢えと病で逝った兵
鳥取県　細田　裕花

辛かった時代語ると脈がとぶ
堺　市　荻野　像山

ずる休みしているような不整脈
大阪市　笠嶋　恵美

ひらがなで不安綴れば詩のかたち
高槻市　佐甲　昭二

乾杯の辞が短くてよろこばれ
唐津市　井上　勝視

玉音が消えぬ夏雲老いた兵
倉吉市　野口　節子

地球泣かせたシッペ返しかこの猛暑
西宮市　藤本　直

そうめんと麦茶ばかりの夏が過ぎ
大阪市　松尾柳右子

一匹の蚊に悩んでる昼下り
和歌山市　武本　碧

念入りに化けても天女にはなれぬ
神戸市　山口　光久

路地裏を曲がるとそこは小宇宙
海南市　小谷　小雪

にんげんはいいなビールの泡も飲む
唐津市　岩崎　實

欲のない顔お地蔵様に生きうつし
鳥取市　吉田　弘子

後期高齢親戚中に十五人
倉吉市　山中　康子

九十七の姉に弱音を吐いている
泉佐野市　稲葉　洋

再生のビデオで盗み酒がバレ
東大阪市　北村　賢子

熱燗が好きな女でいごっそう
美祢市　安平次弘道

中流の満足に酔う酒五勺
日高市　根岸　方子

背負う荷が変化してゆく誕生日

高知市　小川てるみ
昨日なのに手を伸ばしても届かない
京都市　三宅　満子
もの言わぬ猫が家族を和ませる
唐津市　樋口　輝夫
人並みという線引きの難しさ
美作市　福原　悦子
昭和史の苦さ忘れていいですか
高槻市　初代　正彦
独り言つぶやいてると腹立たん
鳥取県　斉尾くにこ
遠くから見ている月が美しい
枚方市　丹後屋　肇
秋の粒探しあぐねている残暑
篠山市　円増　純子
夏休み過ぎて羽化した揚羽蝶
高槻市　片山かずお
夫婦仲支えてくれているペット
大阪府　小栢こずえ
蒔いた種生えず草の芽伸びてくる
大阪市　田浦　實
父の背を思い出させる夏蜜柑
枚方市　小林　わこ
水溜まり越えて自信のついた足
米子市　高田　振作
自分史に妻の存在目立ちすぎ
八尾市　宮崎シマ子
私の気が変わると猫の耳動く

羽曳野市　酒井　一壺
鎖とは知らずケータイ持たされる
藤井寺市　津田シルク
介護する愛のお返しだと思い
八尾市　田邊　浩三
焼酎と饅頭囲む老人会
大阪市　榎本日の出
本当の辛さ日記に残せない
鳥取県　加賀田志延
受診日はたまのぜいたく店ハシゴ
大阪市　奥村　五月
妻よりも心通じる飲み仲間
堺　市　近藤　治子
欲しい服見付け安売り待っている
河内長野市　梶原　弘光
金銭の悩み以外は聞いてやる
神戸市　田中　章子
口きかぬけんか二日がいいところ
米子市　加藤　正二
鐘太鼓鳴らして送る黄泉の道
堺　市　西村りつえ
厭な事忘れたいので早寝する
寝屋川市　岡本　勲
知らぬふりしてそっと聞いてる妻の愚痴
河内長野市　針生　和代
脳からの指令ゆっくりしてる古希
大阪市　伏見　雅明
手加減を知らない親が子を躾け

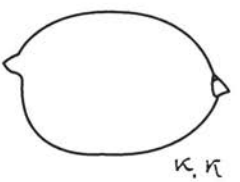
鳥取市　永原　昌鼓
生きるって辛い死ぬのはなお辛い
大阪市　津村志華子
夢なのに握った亡夫の手が温い
黒石市　相馬　一花
再生紙使い生き抜く週刊誌
大阪府　桑田ゆきの
いそいそと三面鏡にポーズする
高槻市　左右田泰雄
網の目をくぐって生きる雑魚の意地
西予市　黒田　茂代
する事いっぱい鬱になってる暇がない
東大阪市　西田いくひろ
生きている証に旨い物を食う
和歌山県　森下よりこ
除草剤かけると土も身構える
鳥取市　夏目　一粋
失楽園読んだあの日のあの動悸
寝屋川市　平松かすみ
戸籍から消えてなかった二百歳
八尾市　前田　紀雄
鯛とせせらぎの音里の秋
鳥取市　大前　安子
誕生日ゲストルームはイチゴの香
尼崎市　市坪　武臣
あれからを覚えていない千鳥足
大阪府　高木　道子
秋鯖のメタリック・ブルーに一目惚れ

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　七二〇句）



「ことさら」　三宅保州選

ことさらに政治のせいにしてしまう　豊中市　源田　啓生
ギネスギネスすぐに更新されるだろ　堺　市　志田　千代
ことさらに隣の犬へご挨拶　鳥取市　大前　安子
高かった高かったとて出す秋刀魚　西宮市　亀岡　哲子
ママを見てことさら泣きじゃくる迷子　東大阪市　北村　賢子
ことさらに利口ぶっても地は割れる　八王子市　上原　酒坊
顔以外ことさら悪いとこはない　愛知県　早川　遡行
鉄砲玉へことさら念を押す使い　大洲市　花岡　順子
合格を知ってことさら確かめに　河内長野市　水谷　正子
お酒屋さん注文だけは聞きに来る　八尾市　前田　紀雄
放蕩の過去ことさらに立志伝　堺　市　加島　由一
まったくのフィクションですと書いてある　枚方市　寺川　弘一
反応が見たくことさら背を向ける　池田市　栗田　久子
お別れはことさら派手にハグをする　鳥取市　高浜　勇
いい人をことさら演じ疲れきる　吹田市　大谷　篤子

「ことさら」　山本希久子選

ことさらに女は謎の多いもの　大洲市　中居　善信
紅一点ことさら視線だけ意識　八尾市　宮西　弥生
夕立の後の景色が生き返る　羽曳野市　徳山みつこ
ことさら音立てて飲む蜆汁　大阪市　谷口　義
病んでいる君がことさらいとおしい　鳥取市　西川　和子
怖がりのくせにことさら吠えたがる　明石市　糀谷　和郎
ことさらに意識はすまいエンディング　尼崎市　長浜　美籠
カタカナ語をことさら使い煙にまく　豊中市　藤井　則彦
ことさらに残す言葉もなく風に　和歌山市　古久保和子
いい日だなことさら月が美しい　鳥取市　山宮　愛恵
煌煌と灯りを点けて一人寝る　高槻市　富田　美義
綾取りの橋へことさら通せんぼ　和歌山市　武本　碧
皺寄せがことさら弱いものに来る　大阪市　小泉ひさ乃
生前の笑える話語る通夜　豊中市　江見　見清
ことさらの笑顔の中の物思い　芦屋市　黒田　能子

ことさらに悪ぶる人は憎めない　京都市　清水　英旺
煌々と灯りを点けて一人寝る　高槻市　富田　美義
割引をして聞かねばと思う人　大阪市　古今堂雀子
ことさらに古着着て行く形見分け　田辺市　岡本　昇
無い袖を殊更でかく振って見せ　吹田市　太田　昭
賞状をことさら持って来なくても　米子市　成田　公一
ことさらにスパークさせたレモン切る　西脇市　七反田順子
綾取りの橋へことさら通せんぼ　和歌山市　武本　碧
ことさらに庇い誤解を生んでいる　藤井寺市　太田扶美代
怖がりのくせにことさら吠えたがる　明石市　糀谷　和郎
善人にされて逝く人送る人　加東市　中上千代子
ことさらに念を押すので疑われ　大阪市　安藤なつこ
ことさらに相槌を打ち媚びてくる　横浜市　菊地　政勝
ことさらに誉める狙われてるんだな　海南市　堂上　泰女
ことさらに持てる振りする持てぬ人　黒石市　相馬　一花
義母が来る電話一つで済んだのに　河内長野市　谷　久美子
夫名義やがてわたしのものとなる　和歌山市　堀　冨美子
再婚でことさら仲をよく演じ　豊橋市　藤田　千休
ことさらに言わぬが母は子を思う　豊中市　水野　黒兎
ことさらに濃いめの紅でデイケアー　河内長野市　村上　直樹
新仏ことさら燃える曼珠沙華　箕面市　広島　巴子
亡母のその後はことさら辛い雨になる　島根県　松本　文子
母逝ってことさら燃える茜雲　奈良県　渡辺　富子

ことさらに時代に媚びることもなし　橿原市　居谷真理子
善意ならことさら名乗ることはない　交野市　森本　弘風
ことさらに介護の明日は考えぬ　紀の川市　辻内　次根
雲ふわりことさら競うこともなし　神戸市　山崎　武彦
ことさらに母の前では笑顔みせ　芦屋市　竹山千賀子
遺されて残暑ことさら身に厳し　尼崎市　春城　年代
夕暮れはことさら沁みる独りぼち　大阪市　山本　柳昌
ことさらに猛暑に揚げる大花火　倉吉市　野口　節子
不景気がことさら暑い夏にする　宇部市　平田　実男
ことさらにぐれたふりする反抗期　藤井寺市　鈴木いさお
向日葵が殊更威張る無人駅　堺市　柿花　和夫
年金日いやに優しい妻の酌　唐津市　樋口　輝夫
傷心にことさら塩を擦りつける　川西市　西内　朋月
ことさらに騒ぎ立てると墓穴掘る　東大阪市　佐々木満作
貧者にはことさら不況身にしみる　札幌市　小沢　淳
静寂はことさら不安掻き立てる　富田林市　古田　千華
ことさらの思いは湖に沈ませる　松江市　松本　文子
負け出すことさら声がでかくなり　西宮市　緒方美津子
コスモスの想いがつのる秋の風　寝屋川市　籠島　恵子
ことさらに鏡が老いを誇張する　三田市　北野　哲男
特別な思いがらくたでも宝　西宮市　泉水　冴子
新仏ことさら燃える曼珠沙華　箕面市　広島　巴子
夾竹桃ことさら赤し原爆忌　池田市　上山　堅坊

ばあちゃんに会えばばあちゃん似だと言う　弘前市　高瀬　霜石
ことさらではないと耳打ちして帰り　神戸市　山口　美穂
今ここでことさら話す事でない　和歌山市　田中　みね
美しい嘘にことさら酔いしれる　紀の川市　宇野　幹子
三重に包んで紐を掛けておく　京都市　高島　啓子
生きてゆく自信ことさら二重丸　大和郡山市　坊農　柳弘
ことさらに長生きしたいわけでなし　豊中市　安藤寿美子
ことさらに意識はすまいエンディング　尼崎市　長浜　美籠
静寂はことさら不安掻き立てる　富田林市　古田　千華
とりわけて今はショパンに酔っている　京都市　坪井　孝一
ことさらに音立てて飲む蜆汁　大阪市　谷口　義
テクニックかもセールスの国なまり　橿原市　居谷真理子
ことさらに誉められ有頂天の猿　西宮市　西口いわゑ
ことさらに外反母趾の赤い爪　網走市　角谷　幸甚
ことさらに弁解すれば灰汁が浮く　鳥取市　倉益　一瑤
ことさらに黄味か白味の内輪揉め　和歌山市　坂部かずみ
ことさらに明日を肯定して眠る　海南市　小谷　小雪
ことさらに女は謎の多いもの　大洲市　中居　善信
ことさらに騒ぎたてても白は白　岩出市　藤原ほのか

秀句

自慢げに鬱の漢字を書いて見せ　岸和田市　井伊　東吉
ことさらに残す言葉もなく風に　和歌山市　古久保和子
東大を出たのはみんな知っている　堺市　奥　時雄

競争心ことさら煽る棒グラフ　河内長野市　山岡冨美子
ことさらに生き方を問う虫の声　京都市　松本としこ
内需して円高不況助けねば　シドニー　坂上のり子
高かった高かったとて出す秋刀魚　西宮市　亀岡　哲子
秋風がことさら傷に触れたがる　米子市　吉田　陽子
好きな酒銘柄なんか気にしない　大阪市　佐藤　忠昭
好きだからことさら距離をおくふたり　寝屋川市　平松かすみ
夫婦ですことさら口に出さずとも　羽曳野市　吉川　寿美
朝食に元気の素を思いきり　枚方市　小林　わこ
殊更に夜の舟唄は身に沁みる　篠山市　酒井　真由
この冬は猛暑話題にして凌ぐ　香南市　桑名　孝雄
年齢を捨ててぐいっと背を伸ばす　鳥取県　岩崎　和子
恐怖とはことさら暑くなる地球　和歌山市　田中　みね
美しい嘘にことさら酔いしれる　紀の川市　宇野　幹子
立ち直る背中ことさら風が押す　阿波市　三浦千津子
遺言のいるほど遺すものはない　四条畷市　吉岡　修
夕焼けはことさら明日を期待させ　神戸市　早川　孝子
ことさらに風が冷たい通院日　西宮市　吉井奈々子
リーダーは過去の自慢などしない　神戸市　田中　章子

秀句

悲しみを隠す笑顔をふり撒いて　犬山市　金子美千代
ことさらに弁解すれば灰汁が浮く　鳥取市　倉益　一瑤
実印がことさら重い紙にする　弘前市　高橋　岳水

薫風と鬼遊

それは、平成七年の秋、毎日文化案内で川柳教室を知り、当時、ラジオの文芸川柳を楽しんでいたこともあり、入会致しました。

教室で、薫風先生には「うがち」と「知性」を、一方鬼遊先生には「ユーモア」と「庶民性」についてご指導頂き、深い感銘を受けました。両先生の句風は、全く対照的ではありましたが、川柳の基礎をしっかり教えて頂いたつもりです。高齢になると、ゴルフはクラブの買換えで少しは腕の衰えをカバーできますが、川柳は諸先生などの句集を開いても未だに上手くなりません。

今、第三の人生に入りましたが、これまで自信のあった漢字にも、電子辞書で再確認しております。

讃岐富士一番星を簪に　　薫　風

素うどんへ何ですかとは何ですか　　鬼　遊

両先生に合掌。

（井上じろう）

本社句会を昼に

私も八十歳になり夜の句会に足を運ぶことを控えたいと思っています。夜の句会は帰宅が遅くなり家族も出席を危ぶむ上、駅からのバスがなくなればタクシーを利用することになります。現在、各柳社共高齢化が進み、遠方の人や健康状態などで句会の出席が無理な人が増えていると聞いています。特に夜の句会はその傾向が強いようですし、夜の句会で若い人の参加が増えたと言う話も聞いたことがありません。

本社句会では出席者に配慮してか投句者の入選数を抑えているように感じます?。これでは出席はおろか、投句さえも年老いた句友、地方や少し遠方の人、弱者の参加を敬遠する結果になりませんか。最後に百人以上集まる大きな句会で夜に開かれているところも沢山あるのでしょうか。

ぜひ御検討下さい。

（北野　哲男）

ひとこと

愛情たっぷり！

先日、あるタウン誌を読んでいたら、若どりを飼育されている人のお話が載っていた。「飼料にこだわり、衛生管理を厳しく、愛情たっぷり、手をかけて育てる」。という内容だった。

これは全く川柳についても同じなのかなと考えた。手間ひま惜しまず、日夜育てていかなくてはならないものが川柳。

私の場合、愛情をいっぱいかけているかと問われると、つらいものがある。今までは、とにかく題詠を作句することがいっぱいいっぱいで、五・七・五に構成することだけでなかなか深まらない傾向にあった。もっと材料を吟味、精選する必要がある。そして、推敲を手間かけてしていかなければならない。一方で駄作は見きわめて、次の句を練る。薄っぺらな句でなく、味わい深い句、自分で納得できる句を作りたいと思う。

（小谷　小雪）

大八講座「禅・俳句・川柳の国際化」

ブライス研究科の第一人者、大学教授で日本英詩協会会長の、吉村郁久代女史の講座に。「川柳茶ばしら」から三名が出席した。

主にB・H・ブライスの川柳観について、英語を交えての熱のこもった講義である。「川柳は多くの点に於いて詩であるという事が出来る。第一にそれは、逆に詩的でないものをはっきりと示す事に於いて詩であるといえる」。「第二に、取材が粗野で、異ってはいるが、俳句と同じ意味で詩である。それは我々に事物や人間性の本質、特色、象徴的な要点及び「生命」を見せてくれる」。そして「川柳には季語こそないが、俳句と同じ味のものである。それを区別するものは、言葉遣いと世俗的な親しみ易さのみである」。沢庵や味噌汁を食べ、浅草海苔が大好物というイギリス人、レジナルド・ホーレス・ブライズ。

山茶花に心残して旅路かな　　不来子（ファズ）

川柳塔の、何かの機会に是非、吉村郁久代女史のお話を聞いて戴きたいと思う。

（早川　遡行）

飽きる

三浦　強一選

三食も昼寝も飽きることはない　千代子
三つ星の料理毎日では飽きる　寿之
古代から飽きることなく米の飯　雅明
氷菓子食べ飽きたのに秋は来ぬ　(福)英子
飽きるほど白米食べる夢みた日　慕情
日本食に飽きて世界を食べ歩く　(山)節子
大好きなソーメンに飽き秋となる　正和
飽きるほど飲んだお酒が牙を剥く　敏治
旅の妻カレーに飽きた頃帰る　黒兎
ひとりぐらしに飽きたか娘嫁にいく　ばっは
飽きられぬようにおしゃれをしています　いくひろ
結婚も飽きが出てくる三年目　淳
飽きるとは思わなかった好いた人　美津子
惚れたのは本気飽きられたも本気　柳弘
孫たちが飽きないプラン練って待つ　修
自慢ばかりするあの人が鼻につく　のり子
モナリザも毎日観ると飽きてくる　勇
長い長い祝辞あくびで聞いている　かずお
たらればは聞き飽きました負け戦　四郎
飽きるほど数えてみたい諭吉さま　キヨミ
イヤリング歯の浮くお世辞聞き飽きる　富子
ゴールない叱咤激励には飽きる　公誠
四季薫る町です飽きることはない　(吉)弘子
水飽きて木陰で遊ぶシャボン玉　奮水
飽きられた玩具も混じるゴミ捨て場　古拙
飽きることない母からの江戸小紋　(円)純子
遺伝かな何をやってもすぐ飽きる　茂代
飽きることない水戸黄門のドラマ　俊子
面構え飽きたからとて変えられぬ　(田)章子
飽きたとは言えぬ暮しを守る職　美千代
飽いたとて逃げては行けぬ現住所　像山
妻の座に飽きて翼が欲しくなる　正雄
いろと欲人間だもん飽きないね　一子
ペコペコとする男には飽きがくる　一粋
主婦業は飽きた夫に明け渡す　賢子
聞き飽きたでしょうがやはり非戦論　久仁雄
改革の大合唱が左右から　哲男
佳
飽きることなく空気を吸って吐いている　螢
貧乏神そろそろ我が家飽きないか　陽子
各国に戦飽きたと言わせたい　圭一郎
飽きっぽい女の惚れたほんまもん　朝子
八方美人そんな自分に飽きてきた　扶美代
人
サングラス有名税を聞き飽きる　充子
地
生きるって素晴しきこと飽きちゃ駄目　日の出
天
二千年砂漠の神の戦好き　高瀬霜石
軸
飽きるほど人間をしてまだ生きる

支度

牧野　芳光選

風になるこころの支度出来てない　美智代
寝た切りにならぬからだを鍛えてる　朝子
もう過去は言うまい父の冬構え　芳生
住宅を支度して待つIターン　公子
順調に育っています後継者　充子
借金は済んだ遺言ならもう書いた　遡行
ウェイティング・サークルにいる消費税　霜石
相手さえあれば支度はできている　ミツ子
金と暇できたが勇気足りません　日の出
泣かぬよう心の準備出来ました　碧
祭り囃子に母の包丁よく弾む　隆盛
風船をふくらましその時を待つ　(田)章子
旅鞄一つぶら下げ雲に乗る　照彦
旅支度無になることを考える　典子
結納に満タンの愛添えておく　遠野
待つ僕に鏡が妻を離さない　強一
ガスに火に帰り支度の腰が浮く　黒兎
スタンバイOKですよ閻魔さま　哲男
子の巣立つ支度へ窓を満開に　彩子
母さんが支度しているランドセル　(志)千代
要らぬ物まで詰め込んで女旅　まみ子
家事支度メールに追われまだできぬ　勇
支度金出るので職を変えてみる　いくひろ

親孝行支度だけなら出来ている　美義
平服と書いてあるからまた迷う　正和
捨てるもの捨ててそろそろ老い支度　くにこ
借金で支度したのにすぐ帰り　こずえ
燗自力着他力で待つ夕餉　像山
支度などアッケラカーンのプロポーズ　とし子
大鍋のおでんは母の旅支度　泰子
弁慶の支度にも似て母の旅　四郎
まだともう心が揺れる老い支度　登美子
帰り支度見せたら愛想よくなった　(金)宣子
ぼちぼちと老いの支度に笑顔つけ　茶子
皮下脂肪たっぷり溜めて冬仕度　智加恵
着る順に並べ老夫の支度する　泰女
嫁入り支度こつこつ溜める二割引き　のり子
ほんのパン買いに行くにもする化粧　佳
めげないで子牛育てる支度する　小雪
再生へ臓器は走る支度する　裕花
一泊へ三日がかりのお買物　千歩
日本を逃げる支度をする会社　忠
いつだってチョウチョになれるキャリーバッグ　(沢)啓子
人
プライドの支度に汗が止まらない　伊津志
地
離婚するつもりでためているお金　幹子
天
ハンガーに明日のスタイル着せておく　徳山みつこ
軸
いざという時に隠れる壺を買う

ひっそり

徳山みつこ選

ひそやかに年金貰う仏様　淳司
大物も今刑務所でひっそりと　淳
ひっそりと裏門からの出所人　雅明
ひっそりと眠る古墳を掘り起こし　(福)英子
することもなくて二人で茶をすする　かずお
ひっそりと昼寝只今充電中　(宮)弥生
ひっそりと歌う歌あり僕の歌　一壺
ひっそりと暮らせぬ人と夫婦です　哲男
福の神隅でひっそり不精ひげ　黒兎
豪邸から人の気配がしてこない　扶美代
ひっそりと生きてる奴が曲者だ　慕情
老いばかり残った往年の団地　玄也
シャッター街ひっそり恐い町となり　千歩
ひっそりと咲いても目立つ白い百合　美智代
修羅さけてひっそり山の湯にひたる　シマ子
賑やかに過ごしひっそり逝く予定　堅坊
路地裏にまだ息づいている昭和　強一
山峡にひっそり残る字地名　洋
ひっそりと引越さはった何かある　満子
ふる里を捨ててひっそり都市砂漠　いさお
遠慮してひっそり生きることはない　滋彦
囲炉裏端夢に出てくるホームレス　時雄

ひっそりとUターン待つ故郷の老母　遠野
老犬がひっそりゆらす忠義の尾　隆彦
花束をもらいひっそり去る上司　セツ子
稲の花ほどのつつましさが欲しい　(志)千代
ひっそりと墓石に残るワンカップ　くにこ
お隣も職場も知らぬ家族葬　まみ子
ひっそりと貯めたわたしの軍資金　志華子
図書館でひっそり夢を追いかける　圭一郎
ひっそりと自慢話をはさみこむ　久仁雄
まずビールそしてひっそり策を練る　正和
ひっそりと心の隙間うめている　唯教
ひっそりと私のことを話してる　篤子
追いつくためにライバルの倍努力する　大鯰
ひっそりと会っていたのに風が知る　あずま
落日の海でひっそり貝になる　幹子
佳
わたくしの森にひっそり鬼も棲む　(酉)悦子
ひっそりと小さな善を積んでいる　菜摘
ひっそりとしてはおれない腹の虫　淞丘
ひっそりと咲いてちゃっかり実を結ぶ　朝子
ひっそりと夜に開いて陽の匂い　ふみ
人
ペンケース愚痴ひっそりと閉じこめる　公誠
地
花が咲き虫が鳴いてる地雷原　霜石
天
メーターがゆっくり回る衣食住　播本充子
軸
鈴虫の声明ありがたく眠る

初歩の教室

題 ― ゲスト

鈴木公弘

句の対象（このコーナーでは小道具と呼んでいます。）を家族のどなたかにした作品が比較的少なく、皆様の視野が拡がってきたのかなと思いました。さらに批判精神を持って、政治経済の現状や外交を射抜くことがあってもよいでしょう。この世のあらゆる事象を川柳にしてくださることを望んでいます。

【送りがなにもご注意を】

原 招ねかれてゲスト感覚持て余す　弘泰

「招ねかれて」の「ね」は不要です。

原 客の前ことさら難かしい言葉　弘光

「難かしい」の「か」は不要です。

原 ゲストだと言のにカメラ押しつける　くにこ

「言うのに」ではありませんか。

原 老二人子の家にゆくゲスト席　智加恵

「老二人」と書いた句がよくあります。おそらく音読すれば「おいふたり」と読ませるつもりでしょう。それとも「ろうふたり」でしょうか。「おいふたり」なら「老い二人」と表記されるべきかと思います。

【手直しをした句】

原 ゲスト案内認知されたとにんまりす　孝明

添 ゲスト扱い認められたとにんまりす

原 CTのゲスト気分で横たわる　安子

添 CTへゲスト気分で横たわる

着眼点は、原句OKです。

原 久々に里帰り出来ゲスト気分　玲子

添 ゲスト気分になる久々の里帰り

下5が重くなる（定型から外れる）場合には、その言葉をごっそり上5部分に移動させて組み立てる方法があります。そうすればリズムもよくなると思います。

原 いたずらなゲスト神様エルニーニョ　道子

添 いたずらな神をゲストのエルニーニョ

表現したいお気持ちは伝わってきます。単語を羅列した句がいけない、という根拠はありませんが、配列を変えるとスッキリする場合もあります。それが勉強かと思います。

原 黄砂テポドン招かれざるゲスト　志延

添 黄砂テポドン招く気のないゲストたち

原句は合計十六音字でした。リズムのことを考えれば、むしろ七七五にするべきでしょう。「招かれざる」とは相手方がいう言葉です。句の主体者側から言えば「招かざる」となります。

原 秀才とビリのコンビがゲストです　健柳

添 秀才もビリもゲストの舟に乗り

呉越同舟ということですよね。

原 ゲストに恩師行く気にさせるクラス会　武臣

添 恩師ゲストが行く気にさせるクラス会

中七の部分は「行く気にさせた」でもよいかと思います。

原 百才の祝い新聞ラジオ客多し　綾乃

添 百歳へ新聞テレビ客多し

ラジオをテレビに変えた他意はありませんが、何を置いても成り立ってしまう句を「流れる」と言います。川柳を作る際には、そこにはそれでなくてはならない言葉を嵌めてください。

【入選前…説明調に感じられる句】

憧れのゲストを迎え夢心地　正彦

お陽様の好きなゲストはおにぎりだ　智子

諭吉さんゲストに来てもすぐ帰る　振作

盆の寺ゲスト坊さん時事をとく　俊子

畑には呼ばぬゲストのアライグマ　節子

盆休みゲスト迎えてクタクタに　かずみ

初盆のゲストを招き冷茶出す　記久乃

街は秋ゲストハウスに灯が点る　真由

観念句の香りがします。「秋」が飾りに見えます。秋と灯が点ることとの因果関係について「何故」まで突っ込んで考え（客観視）、それから句に仕立ててみましょう。

サイン会イケメンゲスト長い列　登美子

イケメンゲストの句は多かったですね。

ゲストより華美な衣装でお接待　幹子

ゲストが添え物になっていませんか。

シーソーゲームゲスト解説唸らせる　宣子

こおろぎにゲスト加わりシンフォニー　憲司

ゲストメンバー見てから参加決めました　律子

衰えてゲストに頼む墓の花　清

花に蝶親善大使来てくれる　恵美

突然にゲストを連れて午前様　洋子

ゲストです会費も口も出しません　篤

ゲストだが客にはさせぬ開店日　すみれ

コンサートゲスト指揮者は誰がいい　久子

客寄せのゲストの顔を見て決める　堅坊

ゲストに花束贈る立場にいて平和　菜摘

花束と拍手にゲストご満悦　ふみ子

【入選句】

倍の入りゲストの力まざまざと　勇

満席はゲストのおかげ有難い　美紗子

やんちゃ時代ゲストがばらす披露宴　美恵子

ゲスト出演苦労話がよく受ける　章子

皆揃う仏陀の道は花ざかり　一子

ゲスト来て華やぐ我が家久し振り　治子

老い二人孫のうちでは縮こまる　エミ

さりげなくゲスト気遣う名司会　妙子

憧れの恩師がゲスト頬染める　ヒロ

台風はいらないが雨だけ欲しい　孝代

今夏を象徴するような一句。

酒少し足せば話に弾みつく　冷子

酒がゲスト……この着想OKです。

だんらんにイノシシという客が来た　酒坊

ワルツ弾くゲストの小犬眠くなり　ミヨノ

新人がスペシャルゲスト趣味の会　憲彦

ゲストだと遠慮する人威張る人　孔一

お招きします仲秋のお月様　菜々子

来賓の席でふんわり浮いている　ちづる

「来賓の席に」のほうがよりよかったかと思います。

パーティーをよいしょで締めるゲスト呼び　志郎

「閉める」ほうが適切ではないでしょうか。

いつまでもゲストじゃないよお嫁さん　弥生

嫁姑の関係を表す場合、呼びかけるように描くと想定以上に厳しく感じられます。できれば「いつまでもゲストではないお嫁さん」程度にとどめるべきかと思います。

アメリカは何時も日本のゲストです　紀雄

主役よりゲストに拍手鳴り止まぬ　滋彦

言い切るより「鳴り止まず」として余韻を残した方が、主役に対する憐れみがもっと強烈に出てきます。

御祝儀の額をゲストの位置で知る　千恵子

【佳句】

何時までもゲスト面して何もせず　敏治

大勢の桜がゲスト持ち上げる　義雄

妻の招待客に家追い出され　宏造

姑の家いまだに私ゲストです　真澄

珍客が来るから部屋が整理でき　開子

ゲスト来て老いのベールがはげていく　こずえ

ミーハーに戻ってしまう自嘲の句でしょうか。

天狗鼻持ったゲストで肩が凝り　紀子

招かざるゲストに予定つぶされる　唯敎

のど自慢ゲストの歌がパッとせず　秋星

ゲストには一番風呂を準備する　宏之

【今月の推せん句】

スリッパもきりりと並びゲスト待つ　松原ひとみ

ごく日常的な場面を飾り気なく川柳に仕立て上げておられますが、お客様を迎えようとする緊張感が伝わり、いい句になりました。

一人居の窓に小すずめ親すずめ　白川　淑子

閑居の中にも雀のお見舞いを受けられた喜びがひしひし伝わってきます。

ゲストとは聞いていたけど座るだけ　谷　久美子

このやるせなさはどうして解消したらいいのでしょうか。せめて一言しゃべらせてほしいですね。

【私の句】

呼び鈴を押してゲストのお帰りだ

寄付をして寺のゲストにしてもらう

（登載漏れの方は役員が添削して返却します）

秀句鑑賞

同人吟　都倉求芽
―10月号から

一〇〇〇号記念大会の感慨さめやらぬこの十一月号に秀句鑑賞の大役を仰せつかって、感激とともに緊張した体がしばらく元に戻らなくなったのは、あながち年齢のせいばかりではないと感じております。ともあれ懸命に鑑賞させて頂きました。はじめに御礼申し上げます。と共に現在のこの国の大変な転換期に川柳の位置する大事さを考える時、日常的な人情の機微を突くのもいいですが、それよりも時事に眼を向けて世間に問いかけるのも大事かと思い今回はそんな句を中心に選ばせて頂きました。ご了承をお願いいたします。

理想だけ広がる世界原爆忌

瀬戸　まさよ

八月になるとメディアは火のついたように原爆の非情さを騒ぎたて、会場では日本は勿論、各国の首脳たちが、こぞって核の絶滅を訴えますが、所詮線香花火。一〇日も経てばそれぞれ自国の戦力に磨きをかけた奔走しているのが実情。これではいつまで経っても理想の域を出ないわけですね。

太陽をいくつも飛ばすシャボン玉

伊達　郁夫

これも理想で光らせたシャボン玉をマニフェストの風で次つぎと飛ばしますが当然シャボン玉は一瞬のもの。電池にするほどのエネルギーは絶対皆無。

サトウキビ畑に重い陽が沈む

牧野　芳光

最低でも県外。沖縄の県民を翻弄したあの寝言。今まで以上に重い太陽が爆音に傷つきながらサトウキビ畑の向こうに沈んでゆく。

あの日から負けたまんまでいる日本

奥　時雄

政治力の貧困というのでしょうか。東を向いても西を向いても、強いことが言えない日本。わざわざキャッチボールをしに特別機で行き、一族郎党を引き連れて笑顔の安売りに行き、意識的に円高を強いられ、領海問題ではじりじり包囲網を狭められ、拉致問題ではいつまで経っても暖簾に腕押し。もはや戦後ではない。と言ったのはどこの国。

無党派の機嫌次第になる政治

村上　玄也

かつての角材集団も困りものですが、現在の若者、特に学生のノホホン状態はこれも困りもの。その原因は誰が総理になっても一緒、なんて言われるほどの小粒ばかりの政治家が入り替り立ち替りしているから無党派層が増えるばかり。日本丸の行先をしっかり見定める大物はいつになったら出現するのか。

蝶よ花よと世間知らずに育つ罪

武本　碧

周りからちやほやされて成人した井の中の蛙が己れの能力を過信して海千山千の狐狸が蠢く世界へ乗り出して、天晴れ自分の理想を打ち上げた、が理想は理想、現実は現実、出来もしないことと自覚した時には誰も相手にしてくれなかった。本人も悪いが担ぎ上げた狐狸どもはもっと悪い。

お役所の机の下はもう死角

藤岡　ヒデコ

いわゆるお役所仕事。自分の机の上だけしか見えない、見ようとしない、公式だけで問題をとらえ、応用は利かせない。外野からの声は無視。大阪の某知事の意気込みが一般職員にしてみれば目の上のなんとか、と思ってはいないかと一般市民には映ります。

旧式のロボット肩を叩かれる

伏見雅明

昔はなんでも人力で仕事作業をしていた。そこへ文明の利器とかで機械が入ってきた。労力が助かる、能力があがる、機械の分野が拡大してきた。そのうち優れた機械が人を要らなくしてきた、と思ったら機械が機械を使うようになって完全に人間は職を失った。

新鮮な野菜求めて道の駅

玉置当代

最近は野菜に限らず魚介類まで都会人が朝市とか港市場へ行けば安直に新鮮な物産が買える時代になってきた。便利と言えば便利。街の店舗より安くて新しい。個人で行けなくても産直業者が百貨店で安売合戦をしてくれる。車社会の効果には違いありませんが、これによって従来からの仲介業者がすべて要らなくなってここにも失職の波が押し寄せてきました。

ふる里で海の匂いの水をのむ

岸桂子

コンビニや自販機で全国各地の名山深谷の水がボトルで売られています。疑うわけではありませんがどれも同じように思えます。ましてや都会の水道水での暮らし。そこへゆくと桂子さんの処の水。羨ましい限りです。

平成のすいとん美味くなり過ぎた

薗田獏沓

最近ようやくニュースにならなくなりましたが永い間八月になるとあの主婦連とかが戦時中を思い出せ、とか言ってすいとんを通行中の人たちに振るまうという。しかしですね、一口にすいとんといっても当時と現在では食材が全く比較にならない。粉、調味料、すべてにおいて（ただ前句のように水だけは当時の方がよかったかも）。これでは今の人たちに訴えても伝わらないと思うのですが。

骨太の子が育たない街になる

山本希久子

食べ物も、服装も、なんでも思うようになる一人っ子。四人の親がちやほやする。学校へ行ってもトラブルには親やＰＴＡが乗り込んで学校や先生を悪者にしてしまう。それでは骨太の子が育つわけがない。それでいてスポーツや芸能界で優秀な若者が出現すると、あんな子がうちにも欲しい！。やれやれ。

子供手当お年寄りから取った金

近藤正

そんな子供に一律に月何万円。それも老齢者の年金に税をかけてまで。なぜその金で校舎の改築や待機児童のない街にしようという発想にならないのでしょうか。

長生きはしたくないよなしたいよな

山岡冨美子

元来、年金には税はかけない、という方針だった筈。医療費も無料だった筈。都市によって施行されている敬老パスも無料だった。それがすべてご破算に。年寄り狙い撃ち！。

平均寿命越えた途端に元気出る

藤井則彦

いやいやそんなこと跳ねとばして益々老人の意気を見せようと全国に百歳以上の方が四万人もおられるとか。則彦さんもきっとその中に入られることでしょう。

市役所へ生きてまっせと言いに行こ

安藤寿美子

百五十歳、百八十歳の人が戸籍上では生きていることになっている、そんなニュースが続々と賑わせている。中には堂々と白骨の親と同居している人もいる。本当にそのうちに自分で申告しに行かねばならぬ時代が来るかも知れぬ。それもこれもお役所の怠慢からくる話ですが。最後に心落ち着く句を。

この余白静かに先を考える

大橋政良

書き終ってみれば鑑賞と言うより皆様の日頃の鬱憤を代弁させて頂いたようなことになってしまいました。お恥ずかしい次第です。

秀句鑑賞

―水煙抄

―10月号から

島　ひかる

生きている五感の先を丸くして

辻内次根

五感の先を丸くしてとは恐れ入りました。作者の穏やかなお人柄と生き方が滲み出ています。私もこうありたいものです。お元気に川柳を楽しんで下さい。

豪快に降って厳しく照りつける

桑名孝雄

今年の夏は正にこの通り、グローバルに観ても被害は大きい。温暖化?エコを奨めても大自然には勝てないが拱くわけにはいかないものです。さあエコの輪を拡げましょう。

人生のジグソーパズルまだ途中

玄番美恵子

人生をジグソーパズルに喩えるとはお見事。悩んで考えて楽しんで喜んでいるうちが良いのかもね。

夏祭り浴衣の妻と手をつなぐ

初代正彦

久し振りの浴衣姿の妻と手をつなぐ、若い夫婦ならロマン、老夫婦ならばほのぼのとした温かさ、どちらにしても微笑ましいお姿。

ときめきの数だけこころ若返る

西田いくひろ

喜びや期待のために胸がどきどきする、句会や大会がそうです。川柳を楽しむお方には元気で長生きの人が多い。絶えずときめいているからでしょうか。男女間も尚然り。

妻がオン僕がオフする夏の夜

内藤憲彦

下五の夏の夜で句のすべてが解ります。冷房装置のオン、オフですね。お二人の様子が目に浮かびます。さてその結果は…、それとも他のオン、オフですか?考え中。

せっかちになった夫にぬるいお茶

島田千鶴子

妻が食事中にも拘らず「おい!お茶」途中で立つのが嫌で初めから入れて置く妻の知恵否か、それとも火傷をしないように妻の思い遣り。

所詮は他人この脆きもの重きもの

寺井秋果

夫婦を所詮は他人と言い切り、その絆を脆きもの重きものと言い表わす、十七音字の中に夫婦の間柄を上手に詠み込まれた事に脱帽。

カーテンのゴーヤケーキでティータイム

巌田かず枝

ゴーヤ茶をたっぷり摂って夏を越す

森下よりこ

我が家も毎年二階の物干し台から下げた二枚のネットにゴーヤのカーテンが出来る。珍しい内は親戚や知人に分け、後はジュースやお茶や料理に使う。今年の猛暑を乗り切れたのはゴーヤのお蔭かも知れない感謝感謝。

食欲がないと間食ばかりする

高野不二

間食をするから食欲が無い、食欲がないから間食をする。卵が先かニワトリが先か?私間食は良くないと何時も夫に戒められて居る。

一呼吸おいて言葉が心地よい

有澤嘉晃

美辞麗句でなく自然にこんな言葉を使える人に私は成りたい。作者も良い人だからです。

遺影には素直に言えるありがとう

竹村紀の治

世の男性の方々、女性も勇気を出して素直に「ありがとう」と生きた言葉を使って欲しい。

ありがとうごめんなさいで来る平和

谷久美子

世界中の人や国がありがとう、ごめんなさいが言えたなら…。先ずは身近な人達に。

第29回 鳥取県没句川柳供養大会

と き 12月12日(日) 午前9時開場
ところ 新日本海新聞社 5階大ホール
ＪＲ鳥取駅南（駅裏）徒歩3分
兼 題 出句締切 11時
「敗者復活吟」 倉益 一瑤 謝選
「死 に 神」 伊勢田 毅 選
「ギャンブル」 牧野ねえね 選
「親 分」 土橋 螢 選
「友 よ」 山下 節子 選
「そ の 時」 山本 鐘馗 選
「点 火」 高田 振作 選
「げっそり」 竹口 清信 選
席 題 なし 各題とも二句吐
参加費 5,000円(昼食、懇親会、作品集呈)
川柳大会のみ参加 2,000（昼食、作品集呈）
欠席投句 1,000円（切手でも可、作品集呈）
締 切 12月10日
投句先 〒680-0874 鳥取市宮長205-45
萩原 美雪 宛（携帯）080-1918-4409
主 催 川柳ふうもん吟社
後 援 鳥取県川柳作家連盟

第19回 センリュウ トーク

当日の部 2010. 11. 21(日)
11：30開場 13：00開会
朝日新聞名古屋本社
15階・朝日ホール
入 場 料 2,000円
第 1 部 トーク
●川柳作品との出会い、
そのときめき
第 2 部 当日句会
出句締切12時10分(各２句)
雑 詠 A 新家 完司
雑 詠 B 浅利猪一郎
課 題 父 丸山 進
席 題 あり
第 3 部 映像による入選作品の紹介
主 催 川 柳 み ど り 会

第30回 川柳塔鹿野みか月川柳大会ご案内

★日 時：平成22年11月28日(日) 午前９時開場
★場 所：鹿野町総合福祉センター「和泉荘」大広間
〒689-0425 鳥取県・鹿野町今市650 ☎0857-84-2453
▼課題＆選者(敬称略) ※出句〆切 11時半・各題2句未発表吟
「満ちる」 西出 楓楽 選
「ひとつ」 森中 恵美子 選
「上 品」 小島 蘭幸 選
「このごろ」 生駒 聖天 選
「好 き」 三島 淞丘 選
「人 間」 新家 完司 選
「 綱 」 門脇 かずお 選
※席 題 出題しない
※当日会費 金. 2,000円也(昼食・発表誌・記念品呈)
★欠席投句 金. 1,000円也(発表誌呈・小為替希望・切手不可)
★投句方法 各題２句以内(未発表吟)をB5大の用紙に
住所・氏名・雅号・投句料を添えて事務局へ。
★応募〆切 平成22年11月7日(厳守)
★応 募 先 〒689-0405 鳥取市鹿野町鹿野1279
中原 諷人 方
川柳塔鹿野みか月事務局 宛 ☎0857-84-2100
◆前夜祭 11月27日(土) 18時半より
※会 場 ㈱ふるさと鹿野国民宿舎「山紫苑」2F大広間
※宿泊費 金. 15,000円也(懇親宴費込み)
※懇親会費 金. 6,000円也(会食・入湯税込み)
★宿泊申込みなど予約は何れも11月10日頃を希望いたします。
主催：川柳塔鹿野みか月

第34回 寝屋川市民川柳大会

と き 11月3日（祝日）正午開場
ところ 寝屋川市福祉センター5F
（京阪寝屋川市駅下車バス）
かいひ 1,000円（投句 無料）
題と選者 各題2句 「締切」1時
「記 念」 籠島 恵子 選
「割 る」 寺川 弘一 選
「糸 口」 吉岡 修 選
「時 効」 坊農 柳弘 選
「ノウハウ」 住田英比古 選
「家 族」 西出 楓楽 選
賞 各題秀句に賞状と記念品
席 題 ありません
投 句 10月末日必着
連絡先 〒572-0063
寝屋川市春日町9-9
高田 博泉方
川柳 ねやがわ

岸和田川柳会(大阪)　仲谷　弘子報

リハビリの汗には明日の夢がある　隆昭
汗も出ぬ被爆の膚へ抑止論　義泰
ボランティア看板だけが汗をかき　つかさ
検診の結果待つ間の玉の汗　俊昭
お父さんお疲れ様でいい汗に　和美
瞬間に怒り汗かく更年期　香代
終戦日六十五回の苦い汗　笑司
汗に色つけりゃよかった神の悔い　蛙城
汗かけと母は呪文のように言う　ダン吉
墓石はでかいが供花が枯れている　力子
寸法の合わぬくつはきチャップリン　房枝
寸法の確かさ語る鉋屑　東吉
白無垢は新郎が着る新世帯　昭
染めた手はもう土俵には戻れない　楢代
釈尊も友をえらべと諭したも　龍子
染まらないキミが一番やりにくい　美花
温もりの彩に染まって今日の句座　仁緑
入浴剤手軽に家で湯治です　幸子
使い捨てカメラで撮った旅記念　玄也
赤紙で手軽に召され露と消え　洋
ケイタイで夫あやつるうちの妻　泰弘
私が育つトラブルなら受ける　柳昌
回覧板隣で五泊してもめる　弘子
トラブルの種を残して総理去る　珠子

ローズ川柳会(兵庫)　木村貴代子報

ハワイアン盆おどりにも受けている　藍
笠の内みんな美人の風の盆　哲子
盆踊り歌声残し征った切り　てる
施餓鬼とや見えないものが見えてくる　みつ子
揚羽誕生小さな庭のエピソード　年代
入道雲あの誕生の意気や欲し　いわゑ
ご免なさい　少し手抜きの盆供養　義子

和歌山三幸川柳会　武本　碧報

るんるんの後ろ姿が夕焼ける　朱夏
るんるんの足へ少うしすべり止め　碧
るんるんへどこかで水の洩れる音　章子
YMCA余生はこれで生き抜こう　登美代
るんるんに賞味期限が付いている　夢子
実力と思い込んでる有頂天　東吉
るんるんの時を丸ごと缶詰に　千鶴子
ホップステップ手帳の余白あと少し　富子
るんるんの延長戦で買った紅　理恵
夕焼けにるんるん明日の予定表　イセ
るんるんとひらがなを書く二羽の蝶　次根
盆栽の松も正座を崩したい　純子
丸い背も苦労の日々も親に似て　豊剛
無防備で大の字の妻よく眠る　俶子
息抜きをさせてあげたい阿吽像　みね
なるほどと姿勢正してきく法話　絹子
長丁場同じ姿勢で耐えている　かずみ
おもしろい本と一緒に横になる　紀子
一歩退く姿勢で消えた蟠り　房代
泥まみれの姿勢正して四股を踏む　柳昌
すぐぶれる姿勢に影も淡くなる　和子
カラフルな夢繰り返し熱帯夜　八重子
カラフルに色付けされてくる無心　町子
カラフルな傘を吸い込むターミナル　当代
カラフルな彩でまぎらす更年期　昇
凝りすぎて私の顔のない鏡　順一
天国はカラフルですと見たように　菜摘
カラフルな夢が未来をふくらませ　孝子
カラフルな相撲幟に暗い影　武
カラフルな服で散歩のお犬様　義雄
サッカーがカラフルにした脳騒ぐ　美花
あざやかな君の笑顔に首ったけ　幹子
七変化やがて女も灰になる　保州
七歳から僕のお嫁に決めていた

七人の敵に七つの影がある　准一

竹原川柳会(広島)　古田太虚報

住みごこち竹原ほんに良いところ　栄恵
五十年住んでこの地の風をよむ　弘子
生涯を住む気本籍地を移す　一路
この町に住むこの町の風が好き　比呂子
君の句が胸に住み着き眠れない　輝恵
墓参りこの地で先祖五百年　半徳
暖かい鼓動を聞いて住んでいる　民恵
薄情と思わせ切った縁もある　敬子
一夜だけ情をかけた猫と住み　規代
太陽の情けか虹が二本ある　笑子
鈍行に乗りかえ見えた人情味　節夫
いただいた情けまだまだ返せない　笹舟
情がからんでまっすぐ歩けなくなった　蘭幸
崖っぷち情けの海へとんでみる　幸子
ひぐらしの鳴く夕焼けが懐かしい　千代美
鯛と孫の来る日を待っている　汎美
短期決戦蝉些かの迷い無し　淑子
黙祷のあいだも蝉は鳴き続け　力
おふくろの手紙に蝉の声がした　静風
ブブゼラの後はまかせと蝉が鳴く　慶子
ありがとうこころ微笑ませて生きる　厚子
手作りの風鈴チリンと鳴りました　房子
笑い声どこか亡母似の姉と居る　栄香
兄ちゃんの顔でおなかに呼び掛ける　史子
自信ある時には背筋ピンと伸び　千枝

松露川柳会(鳥取)　小西雄々報

山里は西瓜作りに四苦八苦　弘子
甘い西瓜伯耆の土の恵みうけ　智恵子
デザートは西瓜にメロン夏の膳　和代
取られては困る西瓜へ不寝番　鈴枝
冷えきった西瓜へ汗が引いてきた　静江
掘り井戸で西瓜冷やしたひと昔　正光
叩かれた音で西瓜は売れていく　雄々

川柳塔打吹(鳥取)　野口節子報

原爆に命奪われ平和知る　勝憲
戦争が平和な暮し奪っちゃう　芙美子
焼き肉し焼けるをまてず奪い合う　富恵
戦争は奪えるものを皆奪う　玲坊
かき氷奪う暑さは舌の先　みちこ
一夜だけ奪って欲しい夢を見る　義人
火葬場で割れる部落の話し合い　小生
代表選政治とカネで割れている　貴恵
重なった分割払いが首絞める　道子
割切れぬ戒名差別する寄進　いさお
分割の言葉に乗って自己破産　紀美恵
天が割れ真夏の夜の夢花火　滋
捨てますよ仏に聞いた割れ茶碗　紀の治

佳句地十選（10月号から）

吉田幸子

知らん顔しても一番近い仲　准一
誠実がなにより妻も政治家も　まみ子
飛び乗れる元気で座席譲られる　じゅんこ
幻の長寿だったというショック　(山)冨美子
身勝手なヒト科に牙を剥く地球　淳司
親が夢子が現実を見るねじれ　和子
工事場の夏日男を焼き尽くす　一知
清濁をきれいに呑んだシルエット　紀子
重心を下げてゆっくり話しましょう　月子
どの波も濾過する母の風光る　美和子

猛暑続き地球が割れる音がする　たけ代
案ずるな意見割れたら次の手だ　龍枝
殺し合い地球が割れるまで続く　石花菜
金魚鉢割れて泳げぬ火の魚　くにこ
禅宗でも普段のくらし変らない　泰輔
座禅組むほほなでて行く甘い風　克枝
一休さんおしゃべり上手禅問答　禎元
座禅よりアグラが似合ううちのパパ　孝恵
禅寺の屋根で供物を待つカラス　美代子
禅宗か浄土宗かと確かめる　螢
妻のぐち座禅を組んで聞き流す　善江
禅寺で聞いた死のこと生きること　重忠

禅寺の蝉がお経をあげている　完司
座禅してピーマンになるのが理想　芳光
夕飯はゴーヤ料理に汗流し　和子
甲子園汗と笑顔の球児たち　公恵
どっぷりと汗に漬って日が暮れる　照彦
初産のママにしたたる玉の汗　鈴子
やれ暑やジョッキの汗に喉が鳴る　清
玉の汗たっぷり吸った出世録　節子

城北川柳会(大阪)　伊達　郁夫報

さいならの後のぶらんこゆらゆらと　美智子
長寿国仏様まで支えてる　縣　祚
鍋の中煮物が踊る安心度　千恵子
行き遠く帰りは近い同じ道　容子
接点はないが今だに夫婦です　令子
点滴にチョイと入れてよ恋しずく　あさ子
何事も手掛けて見れば奥深い　ひさ乃
グループが別れて並ぶ昼タイム　千歩
どの道も迷いつづけている暗さ　妻子
点数を稼ぐモデルの笑い顔　とし子
飢餓知らぬ子等の合掌八月忌　麗
支え合う人という字が枯れはじめ　正
争点が合わぬ政治のもどかしさ　満作
点滴のリズムいのちだと思う　郁夫
友が逝く心の支えポキと折れ　ルイ子
ゆらゆらと炎のむこうに平和の輪　杁香

錆びついたねじが依古地を押し通す　隆充
万燈籠恋しい亡母の灯が揺れる　一歩
私らの時代は親を支えてた　勝弘
句読点やたらに多いラブレター　じゅんこ
小うるさい人は仲間にしてやらぬ　かずお
風見鶏昔のことは気にしない　求芽
ドナーカード役に立ったと泣き笑い　直樹
点字読む指は希望をしかと読み　克己
世に出れば点取り虫の役立たず　東吉
迎え灯のゆらゆらゆれてみな無口　和夫
グループで咲かせた花が手折れない　典子
忘却と言う人生にある余白　集一
ヤジロベーあの一点に任せ顔　修
車座で楽しく集うスケジュール　柳弘
体温を越えた気温の中に住む　倫子
弱点を晒してからの風の向き　朝子
母さんへ大きな文字で書く便り　志華子
ゼッケンがしっかり闘志繋いでる　野鶴
頂点を極めてからの孤独感　賢子

いずも川柳会(島根)　佐藤　治代報

サービスが過ぎると裏が見たくなる　弘子
忘れたメモポケットから顔を出す　俶子
親切に届けてくれる忘れ物　キミエ
幸せは白いお米と玉子焼き　桂子
サービスのように飛んでるシャボン玉　晴乃

新米がお釜の中で唄い出す　敬子
時々は詩人になって夢を売る　淞丘
目じるしを忘れて泥の舟に乗る　志げる
雨止んで傘をどこかで忘れてる　嘉寿恵
祝い膳インスタントのお赤飯　たえこ
こつこつと溜めた宝に羽根がある　桂子
手探りで父の跡追う米作り　武久
サービスは限界ですと言ってみる　美江子
ソロバンを弾きこつこつ生きている　美千代
米の愚痴なだめるように聞いている　久枝
生き甲斐にこつこつ積んだ一行詩　治代
毎会の司会を買って顔を売る　祐次
接待の皿に野心も盛ってある　寿美
新米を炊く快感がたまらない　喜子
野良着きりゃ齢を忘れて汗をかく　佐余
忘れても貸したことだけ覚えてる　徳子
サービスと言ってもキリンはいらない　芳山
肌磨き床もみがいた糠ぶくろ　ちえ
小魚を一匹入れてよろこばせ　房緒
こつこつと走り続けた足も病み　昌枝
白米にメザシがあれば結構だ　孝亮
こつこつといのちのリズム刻む音　多喜
こつこつと努力重ねたチャンピオン　煩悩児
逆縁にこつこつの城崩れだす　玲子
サービスでついだ一杯効き過ぎる　蘭水
明日の米なくてもビール買ってくる　きみえ

難しい忘れたふりをすることは　茂美
こつこつとノック小さな秋が来た　文子
病室の壁にぶつけた白いめし　章峰
こつこつと掘れば語ってくる歴史　ちかし

川柳塔おっぱこ吟社(香川)　川崎ひかり報

永遠の愛を誓った薬指　八重子
そっとして置くのが今は薬かも　ひかり
生かされて余命永らう薬飲む　賢
隣の娘何か光った薬指　放任
百薬の長は私の命綱　あきら
首かしげ医者の気になるひとり言　はつ恵
あの頃はときめき今は不整脈　弘
荒波に耐えた男の薬指　いさむ

川柳塔きゃらぼく(鳥取)　大塚　恵子報

人生の幸福の鍵笑い声　章江
虫干しの着物の中でかくれんぼ　亜弥
旅帰り住めば都がよく解る　瑞枝
ヘルペスの蕾あざやか肌を刺す　初枝
ブブゼラの音耳底にいつまでも　恵子
塩加減姑の味を添えていく　ふみ
老眼鏡あなたは何処にかくれてる　未延子
ふりそでが行く真夏日の昼さがり　繭
去って行くためにも歩く稽古する　千代
指タッチアイパットより紙面読む　麗

私旧型交換部品間に合わぬ　寿々子
人とのつながりだいじだいじに生きていく　やえ
人形と目が合ってから立ちあがる　てい子
針の糸まだすいすいと通る幸　春枝
終点の見えない道を今日も行く　晶子
五十でも私のハートまだ蕾　晴子
道端に可憐な蕾秋桜　清子

高知川柳社　小川てるみ報

携帯が切れて私の恋終わる　和江
薄情な仕送り切れば沙汰もなし　正躬
絆などハンコ一つですぐ切れる　ふき
父母逝ってぷっつり切れたさとの声　健
優柔不断まだ断ち切れぬ腐れ縁　典雄
切れ者の秘書が隠した億の金　てるみ
切れ味は母の気分が決める朝　千恵子
切れる男だ即戦力になるだろう　千鳥

川柳らくだの会(鳥取)　岸本　宏章報

安請け合いもうせんように高齢者　仁子
熱帯夜水枕でもすがりたい　清
手動とは気付かずドアの前で待つ　せつ子
片意地をはらずになんとなく生きる　清帆
水を得た魚のごとく缶ビール　玲子
一応は断ってから引き受ける　孝子
歴史的炎暑に聞かぬ水不足　大鯰

うっかりと手をあげたままおろせない　邦昭
ありがたや飲みたいときに水が出る　宏章

川柳若葉の会(大阪)　宮崎シマ子報

絶対に許されません核兵器　加津子
許すことだんだん増える日記帖　烈
突貫で掴んだバーゲン台の服　シマ子
いとおしやつかまり立ちの子の進歩　香住
まだ彼のハートがちゃんと掴めない　ますみ
黄昏れて生きる術など掴みだし　洋子
命綱掴んだままで流される　能子

川柳塔鹿野みか月(鳥取)　福西　茶子報

水鏡大空果てしなく広い　くに子
大銀杏博打が過ぎて結い下がる　いさを
大空に怪しい雲が湧いてくる　蛍
元気でと年に二度会う下り線　睦子
てっぺんに止まり飛ぶしかないカラス　(西)和子
繁栄の昔を語る白壁蔵　弘子
隠れ家にすずむしの音哀しすぎ　宣子
大空を仰ぎ涙をこぼすまい　久枝
アルバムを開くと旅がよみ返る　実満
すずむしの声にやっとこ床をしく　稔
大空に千羽の鶴よ舞い上がれ　(鹿)節子
大空をかける翼が欲しくなる　重忠
愛あれば苦しい家計風化する　幸枝

夭折の命を誰かに化身する　孔美子
自意識に目覚めた影がついて来ぬ　彩子
年金を盗む百歳の化身　茶子
粗相した尻百叩き刑効かず　蟹郎
暑苦しい鈴虫泣いてにぎやかす　房子
虐待する人の前世を問いただす　照彦
日本中暑くて旅を中止する　はるお
一寸の虫に宿っている化身　永子
幸せという大空は日本晴　八重
お願いも叶い鈴虫寺まいり　みどり
自我を断つ旅は楽しいものにする　富久江
冬になる駆け足でする遍路旅　満
蛇に化けたのは神様と信じたい　かおる
お出かけは別な自分に化けて出る　京
すずむしの愛は哀しい音になる　小鹿
八十路まだ旅の半ばと背を押され　きみゑ
抱くほどの畑に大空苦笑い　美恵子
雛壇の後ろに棲んでいる化身　忠良
いやな旅白装束を着せられる　盛桜
大空の済んだ酷暑に苛められ　諷人
身だしなみ老婆に見せぬ晴れ姿　汲香
長旅の身辺整理しています　みさ子

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

水やりが五年たっても掴めない　勝視
庭隅にひっそり咲いたこぼれ種　高明
飢えた日は遠く球児の甲子園　晴翠
荷物にはならんと言った妻の嘘　輝夫
義理の宴ノンフィクションを読むところ　四郎
なすすべもなくさらけ出す虫の声　實
間違いを除けば影もない私　蜂朗

京都塔の会　都倉　求芽報

古稀だってまだ青春のど真ん中　綾子
山赤し地球が枯れてゆくような　ますお
黙祷にしたたる一分間の汗　肇
昭和史を全部おぼえている簾　篤子
からっぽの駅に迷った赤トンボ　公子
からっぽの未来が見える万華鏡　由美子
空っぽにした頭からヒット作　則彦
子育てに大事な愛のさじ加減　比ろ志
正義通す時にも使う匙加減　文代
締め加減まだまだ緩いざる亭主　弘之
五十年きずな程よい錆加減　美義
みどころがあると辛めの匙加減　葉子
訴えつづけ涙が行方不明です　昌乃
成仏が出来ぬと百五十歳訴える　求芽
沈黙の中で本音を聞き分ける　ふりこ
沈黙の金が実った信用度　朝子
貝になる覚悟ができて黙秘する　昭
沈黙で互いに空気読んでいる　庸佑
沈黙は金　信条のダンディズム　英旺
沈黙のお地蔵さんに内緒ごと　典子
沈黙をさせる景色に身を任す　としこ
恐かった無言のままの父の背　義昭
店仕舞張り紙増えて沈む町　輝美
沈黙に限る読めない書道展　宏子
沈黙を破った人に役決まる　益子
王様はあっそう以外黙してる　啓子

川柳ふうもん吟社（鳥取）　夏目　一粋報

火も風も抱いてリスクに負けとれぬ　洋々
役人が一番好きな天下り　妻子
前倒しして綻びを縫っている　一瑤
役人が威張り弱者を切り捨てる　無限
人の道はずれて受けた傷もある　清信
店頭で魚選る目は浜育ち　美恵子
物わかりよい役人がたまに居る　一京
荒波のリスクかぶって蟹をとる　蟹郎
だまされたつもりで風に乗ってみる　圭一郎
役人が我がもの顔で税使う　毅
腕白坊主親をかぐって抗議する　孝男
消費期限すぎたリスクは母が負う　美雪
青田刈りする人間のおぞましさ　金祥
百均で孫の手買って背をかぐる　菊香
欲しいもの買ってやれない肩車　(平)節子
役人にゃ庶民の暮らし分かるまい　昌鼓
前倒しで生前葬を仕切る妻　振作

かぐるから倍かぐられる与野党よ　稔
幽霊の住民票がある役場　秀四
前倒し金は使えぬ米作り　菖子
リスクなど跳ねのけ被爆国は生き　享
土下座して離婚のリスク乗り切れた　凱柳
天下り退職金を二度もらう　小生
子育ての新米ママにあるリスク　智子
百歳が住所不定になる不思議　(山)節子
就職難リスク承知の職さがす　喜子
役人のたらい回しが気に食わぬ　孝二
残されて手が出しにくい後一つ　清帆
前倒し待った企業も倒産だ　春名
口ばかり汗はかかない役人め　千恵子
前倒し結婚急ぎ出産す　大鯰
嫁に負け僕の小遣い前倒し　徹
役人もはたで見るより楽でない　啓治
役人に命令したい時がある　善夫
恋ごころもう捨てましょう曼珠沙華　一粋

川柳ささやま(兵庫)　遠山　可住報

家族愛無口のままで通じ合い　久子
虫も十色自己防衛は備えてる　美緒子
粗食だが乗っているのは高級車　二英
雑炊を炊いて昭和を振り返る　文子
ビル街で行きかう人は皆無口　美紗子
秘めごとの虫干しをするクラス会　哲男
酒飲むと無口な友が多弁なり　稠民
厄介な虫を一匹飼っている　真由
偏屈の虫にもあった超一流　啓子
盆の膳ちょっとはりこむ餅二つ　多美子
孫にする昔話が噛み合わぬ　開子
ばあちゃんの瞼に恋し盆踊り　可住
子供達贅沢質素わからない　かほる
バブル時の贅沢今は身に応え　幸子
飽食後ジム通いする贅沢さ　照代
贅沢に食べてむなしいダイエット　美智子

川柳塔なら　坊農　柳弘報

君の笑みそっと貰って胸の奥　さざ恵
曖昧さで逃がした魚大きすぎ　賢子
曖昧にしたらまあるい人にされ　典子
初恋の人から電話寝つかれず　彰治
抽象画クイズのように楽しんで　博一
しがらみの糸を逆手に弾む毬　幹和
難問のクイズが解けて旨い酒　いさお
曖昧にして腹案を練っている　ふりこ
正念場曖昧なんか通じない　千梢
曖昧な侭で今日まで生きて来た　紀雄
曖昧を武器に熟女は勝負する　次郎
貰わない方がよかった期限切れ　芳子
生き方はどっちつかずの処方箋　勝弘
菓子折りの下の封筒にんまりと　満作
曖昧な笑顔が僕を悩ませる　萌子
イエスノー言わぬ笑顔が生む誤解　比呂志
好きになり貴男のイヤな癖貰う　弘風
曖昧のとっても上手いご答弁　恭昌
大学にクイズ学部を設けます　修
認知症の予防にクイズやっている　寿美
暗闇に光を貰うアイバンク　たつお
身に沁みる情け貰ってから狂う　和夫
姫の膝毬は過保護に馴れている　完次
はずまない毬にあまたの恋の傷　隆盛
弾まない毬下積みに耐えている　順啓
脳クイズ老いの樹海へ迷い込む　富子
曖昧な一日終わる仕舞い風呂　洋子
クイズです君たす僕で何になる　真理子
恋は未だ連想クイズ解けぬまま　柳弘
生きてゆく神のクイズを解きながら　理恵
正体を当てろと大首の写楽　卓
生と死のクイズ解けないまま米寿　國治
どん底で貰う情けのワラ一本　一風
直球の愛がストンとふに落ちる　朝子
白黒をつけずに繋ぐ赤い糸　寿之

川柳塔みちのく(青森)　小寺　花峯報

老母座る座布団干して供養する　ひとし
供養だと墓参のあとはネオン街　則彦
すっきりと和服の帯を締め直し　つとむ

被爆地の絶えることなき供養の灯　きよし
戦死の子丸い背中の母供養　初枝
プライドをすっきり捨てて野に下りる　呑舟
さよならも言わずに親がいなくなる　柳子
生き方を鏡に映しひと呼吸　芳生
迎え火で先祖を運ぶナスキウリ　一呑
長寿者が行方不明とはショックです　隼人
極楽と地獄見ながら生きている　ふさゑ
八月は供養が続く戦中派　雅城
百歳を生かし年金喰っていた　愁女
朔日山　かけてすっきり得た活気　花匠
大空のように　わだかまりが消えた　黙人
花好きの亡母へ手向ける菊を選る　岳水
八月の空を彷徨う地獄絵図　花峯
目の鱗落として春の風にあう　慕情
酒好きの父のお墓に酒浴びせ　一花
戦争の地獄を子等へ語り継ぐ　劦
供養塔花月の風に耐えている　五楽庵

川柳茶ばしら(愛知)　板山まみ子報

幾つもの苦難畳んだ笑い皺　美千代
ブランドの米田園いっぱい黄金色　雅美
野良仕事サウナ兼ねてが熱中症　百合江
たっぷりの脂肪減らすのは至難　幸子
ゴミ出しの穴場スピーチするカラス　かつ子
割り勘で貸し借りのない俺お前　遡行
猛暑日もなつかしくなる鰯雲　ます子

川柳花の輪(大阪)　妻谷　重風報

泣くものか空を仰いで堪えている　泰子
シグナルを見抜いてくれぬ片思い　勇太朗
黄信号おちつきましょう大阪人　やすの
信号と孫の歩幅を胸算用　重風
初対局黒石持って席に着く　克衛
よく似合うと彼が言うから黒を着る　音成
野良焼けの黒い手で打つ母のそば　風
燃え尽きる夕陽仰いで或る願い　ミヨノ

サークル樗欅(大阪)　松尾美智代報

まあええか　まあええやろと妥協する　房子
太陽はきっと私のストーカー　哲夫
避暑がてらちょっとおいでと百貨店　光久
花散ってからの長さを生きている　希久子
ゆったりとクーラーといる午後の椅子　いわゑ
儲け話に乗り損なってからの運　久仁雄
山里はクーラーなしの避暑地です　加お里
メロンより西瓜の似合う家族です　美智代
図書館が私の避暑地ですムムム　蕉子
妖怪へ避暑をしました水木展　たもつ
ええ格好シイ避暑地はでかい本屋なり　義子
避暑地にも分け隔てなく熱い風　昌紀
ふところに手頃な答えひとつ持つ　千代
花の名を三つ覚えて避暑終る　扶美代
たんとんとん　コリコリ肩に可愛い手　みつ子
避暑に来てやっぱり主婦は忙しい　楓楽

はびきの市民川柳会(大阪)　徳山みつこ報

この国の赤字無視して円が売れ　章司
赤点をとって留年決まったよ　雄太
慶弔が重なり赤となる家計　庸佑
活力が欲しくて赤を着ています　みつこ
赤恥をさらしあれからしゃんとする　ダン吉
家中が赤児一人で丸くなる　ちづる
この暑さ凶器と化して熱中症　美喜
早く行き花火の前に浴衣見せ　獏沓
好きな子にねらい定めてへび花火　千鶴子
大輪の花火みんなの口があき　アヤ子
花火より浴衣の君にヒュウードン　光男
花火師の汗が夜空に光ります　敏
手花火の影に昭和の父と母　久仁子
具を一杯詰めたお握り母の味　喜久子
通帳を握って嫁を信じない　一知
お見舞の握った手から元気受け　フジ
ポケットで握り直している拳　六点
固く握った拳の気持ち解るかい　美代子
主導権ママが握って恙なし　いさお
大事なはシーズンオフの暮らし方　一壺
ささやかな楽しみ四季の花飾る　登志子

蝉終りコオロギ軒で出番待つ　ヨシ枝
爽やかな秋を待ってるにぎりめし　りつえ
電照菊シーズン知らぬまま育ち　泰子

大阪川柳　長井善純報

哀しさをまぎらし夢中で鶴を折る　和
何回も夢中になったダイエット　花笑
携帯に夢中で蜂に襲われる　司
夢中でもPK外す事も有る　紀雄
若作り夢中でやれば一人浮き　ゆめこ
川柳の良さは解らんけど夢中　珠生
夢中から覚めれば只の人でした　まつお
彬という夢中になれる人がいる　ダン吉
炎天下走る平和を唱えつつ　朝子
刻忘れ山菜取りに流す汗　かよこ
無我夢中四十年の勤め終え　美世子
裏表解らぬように化粧する　芳香
北斎が描いた波が天下一　勝弘
心技体空手で作法習ってる　とし坊
ロボットも師匠の技に追いつけず　五月
老いの技真の豊かさ知恵袋　功
見せてくれ技と力の大相撲　照月
追真の演技に笑い転げてる　柳昌
木釘一本秘伝極める宮大工　柳弘
挨拶が出てわだかまりすっと消え　一歩
健やかに生かされ今日の灯り消す　一風

肩ぐるま温もり消えぬ父の背な　美花
キノコ雲人間が消え街が消え　義明
帳消しにしたはず酒がぶり返す　鉄心
戦争の体験消すな九条も　すがお
地獄絵図消したい過去へ原爆忌　川童
戦友がだんだん消えるシャボン玉　笑風
人情が消えてギクシャクする世間　善純

翠洋会(大阪)　佐々木満作報

百選の棚田みごとな苗育ち　紀子
早苗から稲穂たわわになる棚田　浩二
異常気象猛暑に耐えて育つ苗　桃花
苗色に輝き出して山の秋　舞夢
愛の残照確かめている別居　恭昌
手のかかる男やけれど居てあげる　蕉子
ひとつ屋根二つの部屋にたてこもり　滋彦
別居して上手になった卵焼　捷也
人生もブランコもみな向い風　集一
ブランコ揺れ別れ話がまだ続く　富子
ブランコを漕げば聞こえる風の私語　楓楽
廃校のブランコ思い出が揺れる　志華子
ブランコが知ってる愛の揺れた夜　理恵
思いきりブランコ漕いで明日は晴れ　みつ子
ブランコから下りてコロッケ買いに行く　義
無器用なブランコ風に逆らえず　希久子
修身の課目をひとつふやさんか　千梢

いい笑顔幸せ一ぱい老夫婦　善之
うちの普通よその普通とまた違う　すみ子
温暖化秋刀魚煽られ高価つき　弘子
脱線をする先生で人気あり　日の出
育てずに四番打者を金で買う　正雄
秋場所が放送これでいいのかな　叡子
温度見て益益暑い熱帯夜　げんえい
趣味の友年経るほどに深くなる　知之
苦しかったけど若かった昭和　千歩
捻挫した時からリズム狂い出す　照子
縺れ糸解いた先にある光　満作

川柳クラブわたの花(大阪)　西川義明報

胃のもたれ横目でカルテ胸さわぐ　愛子
子の将来夢見て親は愛そそぐ　宏至
賽銭に願う子の事孫の事　義明
リハビリの歩幅に合せ手を添える　いつふみ
卒寿でも母は我が家の司令塔　宏
惚けたのか夫婦喧嘩もすぐ忘れ　正春
良心に見せて支払う無人市　妙子
時折は万歳で寝る大勝利　俊子
娘の帰省足あご持ちで孫の守り　晴美
円高もハワイに行けずワイン買う　浩三
衣食住足りてカルテに平和ボケ　孝子
建て付けの悪くなってる夫婦仲　和子
言いすぎた夜は黙って寝ることに　ますみ

掛けだして一括払いするローン　はじむ
お見合いで家族学歴自慢され　たえ子
譲られた席へ素直にありがとう　美代子
ひと言で勇気をもらう母の声　耀一
子供らの姿なくなり夏休み　知佐子
ふっ切れて空の青さと話し合う　民
一切の煩悩が吹き消す安堵　博子
失敗の苦労が生きて運を呼ぶ　一風

倉吉川柳会(鳥取)　竹信　照彦報

千枚田名月千個叩き売り　石花菜
遠足の前夜傘さす月恨み　和子
お月見も虫の音聞くもテレビです　瑞子
見て居るよお宮貰一泣いた月　日出子
月並みに口ごもりつつ悔やみ言う　由起子
散歩道川面の月が護衛する　英子
月並みの言葉で済まぬこの残暑　風露
苗字などどうでもいいからついてこい　智恵子
苗字を変えて子を産んで母になる　螢
木乃伊にし苗字変えずに金を取る　次男
苗字さまざま御手洗と読む御手洗　龍枝
数えれん程に苗字は書きました　賀寿恵
書いて消す新し苗字至福時　恭子
苗字名は誰でも読める字が一番　悠子
雨の穴上って見たい雲の上　喜美子
バリアフリー上がり框が邪魔になる　照彦

上らず下らずわたしを守っている血圧　克枝
水銀柱上がり勤労意欲下げ　玲坊
年金を泣かす気温と電気代　茶子
嫁さんがめし炊きながら泣いたとこ　鬼一
キッチンに野菜の影がうすくなる　けいこ
冷蔵庫氷づくりを絶やさない　康子
キッチンはオール電化で火は見えぬ　泰輔
夕顔が夕餉のキッチン覗き込む　萩江
キッチンで命乞いするモズクガニ　重忠
生きたくて今日も米研ぐ流し台　美代子
キッチンで鎧兜は脱ぎ捨てる　酔芙蓉
キッチンに見捨てたようにある薬缶　玲子
キッチンは我が家の関所母がいる　祐子

八尾市民川柳会(大阪)　宮西　弥生報

転んだらしっかり地面踏んで立つ　賢子
化石でも年金だけは貰ってる　紀雄
戯れる恋は芒のかくれんぼ　欣之
思い切り泣いて心の宿に着く　加央里
花火師はもう来年へ夢を描く　朝子
水をやる夢を化石にしないよう　留里恵
感謝して生きる明日を追うゆとり　あかり
当面は妻の実家へ転げ込む　草風
好きだ好きお前のいない時が好き　耀一
夏バテのペットいたわる老夫婦　柳伸
淋しさの味方はいつも赤とんぼ　秋子

ひたすらに紡いだ愛の重さ抱く　寿鶴
雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ五七五　いさお
宗次郎の笛に合わせて秋踊る　弥生

富柳会(大阪)　古田　千華報

マスカットつるりと嘘も美しい　アキ
凸凹を正して帰る熱い骨　紅紫朗
じわじわと熱れて二人の秋となる　華
スタミナがじわじわ切れる午後三時　七朗
日本の空気を吸った帰国印　未知
回ってる間の命竹とんぼ　田鶴子
合鍵に注意されてる午前二時　登子
フルーツポンチ君の心を模索する　加央里
りんごには昭和いっぱい詰ってる　寿之
一歩ずつ実現させて行く一途　安希子
水ごくり我が家に着いた音がする　彦次
払っても波押し寄せてくる老化　よりこ
ある時は飾り言葉を武器にして　森子
振り下ろす夏は西瓜をまっ二つ　欣之
風と戯れ密かに散ってゆく情念　健一
じわじわと解凍されて出る本音　よしみ
待つ人と帰る所がある至福　恵
三十路きてお持ち帰りを待つ娘　壽峰
狂わずに帰宅出来るを幸とする　操
ずんだ餅じわじわ記憶を戻す味　佳子
じわじわと怒る母より父の喝　武人

通りゃんせの帰りは怖い曽根崎署　晴美
一言がじわじわ心しめつける　奏子
フルーツを山盛りにした八月忌　和子
亡親のとろりとろり溶ける二時　高鷲
言い過ぎた言葉を背負う長い夜　千恵
じわじわとセールスマンに乗せられる　伸雄
盛りかごでメロン王者の顔で座し　信子
いちいちとネジリ鉢巻きの返答　千華

ほたる川柳同好会(大阪)　水野　黒兎報

妙な気がおきそう片目だけ瞑る　見清
妙齢の美人に見える酒の罠　美智代
スカートかパンツか妙な服を着る　順子
二昔前の奇妙がいまや妙　黒兎
変梃な国政治屋の大真面目　勝
庭園を回るコースに秋の風　公子
ゆっくりと時を回してみたい日も　桂子
回すもの減ってつまらぬデジタル化　純子
逢いたくて先回りして君を待つ　郁子
逃げ回りいやな役割避けきれず　輝
喜んでばかりもおれぬもう喜寿か　信男
もうあかん回転寿司に酔ってきた　春代
もううんざり九月も猛暑水の事故　柳童
もうきめた旨いし安い発泡酒　契子
もう待てん妻の化粧に靴を履く　幹治
もうないか故人年金生活者　長一
六十路過ぎ主人在宅症候群　洋子

長柳会(大阪)　坂上　淳司報

ふるさとを歌って閉じる同窓会　淳司
ナツメロも時代を語りドラマだね　明信
大勢で歌えば楽し喫茶店　正一
マイクから小指を離し酔い痴れる　弘光
口ぐせに何時でも歌うケセラセラ　マサ
亡き人の十八番歌えば出る涙　明子
物忘れしてもナツメロ歌えてる　孝代
音痴でも努力かさねて歌になり　武男
とまり木で敵と歌って盛り上がる　敬二
海亀の誕生愛でる応援歌　三和子
女医さんにそっと触られ脈乱れ　正博
働き者昼寝している玉の汗　エミ
越年もできずコロコロ総理の座　直樹
だんだんと泥に埋もれていく野心　よしお
妻病んで荒れ放題の家の中　光弘
運命と思い伝統継ぐ決意　けい子
膿を出し伝統守れ大相撲　たけし
僕の妻器量が良くて気が利いて　もこ
社長より部長の器量一つ上　正子
婚活に器量気立てが良いと書く　輝子
器量より気立てが良くてうちの嫁　幸子
昼下がり唱歌流れていた校舎　和代
移る世に伝統色も褪せてくる　芳野
義理一つ果たして帰る遠花火　和子
お隣の菊の行列我が家向き　ヒロ
小学唱歌歌ってるよな白い雲　一慧
大家族支えた父母の二重唱　冨美子
鼻唄も自然に停まる九合目　篤
伝統の櫓太鼓も音こもる　隆彦
百歳も自慢出来ない長寿国　靖博
遠花火ベッドの妻へ開ける窓　英美
世を渡る天命までの一里塚　久美子
音痴でもちゃんと我が子は寝てくれる　正美
紅を引きそっとハミング退院日　ふみ

南大阪川柳会　吉川　寿美報

海底の骸が騒ぐ終戦日　一歩
お静かに騒ぐとムード壊される　(吉)修
どんどんと上る花火は口で見る　清
管総理どんどん歯切れ悪くなる　和雄
育つ子へどんどん伸びて行くレール　集一
疑心暗鬼どんどん闇が深くなる　志華子
逃げ口上どんどん悪くなる立場　昌紀
どんどんと田畑荒らして自給率　たもつ
どんどんと崩れ始めている母性　弘子
どんどんと値段が上る夏野菜　弘泰
アナログの電圧闇が深くなる　憲太郎
電蓄で聞いて覚えたクラシック　忠昭
アナログのテロップいつか馴らされる　なぎさ

アナログの時計やっぱり見馴れてる　ルイ子
アナログとうまく付き合う期限まで　更紗
すくわれて夜店の金魚ほっとする　楓楽
あの頃は夜店毎月あったのに　勝弘
川の字の浴衣頬笑ましい夜店　柳伸
沖縄の誇りを球児から貰う　祥昭
鳴き切って風葬になる蝉しぐれ　栄子
彬の碑木陰を作るさるすべり　克己
ねじれ国会同じ貉の鬼ごっこ　柳弘
走らねばわたしの手花火が消える　寿美
アナログでこそ味がある小津映画　直樹
騒ぐだけ騒いで記憶ないと言う　正春
アナログも時代の波を知っている　太郎
夜店の金魚あしたはどこへゆくのやら　ばっは
浴衣の袖濡らして金魚追いかける　あや子
うますぎて金魚屋さんに嫌われる　(棚)修
アセチレンの匂う夜店の飴細工　東吉
アナログで百歳万歳手をつなぐ　タカ子
アナログを変換させる手を探す　庸佑
アナログの悲劇聞こえる消却法　ひさ乃
宇宙旅行するつもりです貯金箱　弘風
人間のいじめに地球の暑い夏　とし子

岩美川柳会(鳥取)　石谷美恵子報

腹が減ったら舵がなくても帰る船　清帆
腹減った育ち盛りの合言葉　節子
口数も減り深刻な内輪もめ　公子
減って行く過疎も元気に夏祭り　菖子
減ってゆく脳細胞がいとおしい　幸枝
家計簿も猛暑続きに音をあげる　圭一郎
デートの日猛暑なんかと負けられぬ　一京
噂から抜けて小さな輪をつくる　螢
輪をえがき落ちた投網にハネル雑魚　重忠
知恵の輪の中でばたばたしています　忠良
ひがんでる心人の輪遠ざかる　たぬ
争いの好きな人間輪は出来ぬ　稔
限界と呼ばれる村に輪をつくる　幸安
くたびれた私のこころ介護する　完司
親を看る看ない内輪がもめている　蟹郎
仏と鬼が一緒に住んでいる介護　一瑶
介護する疲れを癒す孫の笑み　孝男
介護不要即身仏が夢だから　茶子
二人して老々介護助け合う　和子
献身の介護が結ぶ嫁姑　雅女
お誘いも断わり電話する猛暑　美恵子

川柳あまがさき(兵庫)　田原一兆報

相談がちぐはぐのまま酒になる　求芽
捻られていまだに赤いあの日の夜　一兆
煙たいが矢張り父頼りです　美代子
育ちました我慢の出来る強い子　あかり
煙の輪ふかす特技も見納めね　里江
ちぐはぐも色気一番男女仲　柳明
熱中症負けるもんかと汗をふく　江美
胸痛むここが我慢のしどころだ　幸香
脳天が割れんばかりの夏終る　野薫
湯煙りの向うの声は美人らし　純
おふくろよ綺麗になれと言う息子　茂幸
煙突の煙が自慢だった町　勝巳
言い訳を考え話ちぐはぐに　雪菜
書いたもの読んでちぐはぐな答弁　耕治
ご一緒に寛ぎましょうお月様　菜々子
蓮咲いて昔むかしの話など　紀乃
虫の音を問われて手話が困ってる　政江
禁煙に我慢が出来ぬホタル族　奮水
夫婦円満なれそだけは嚙み合わず　遠野
渦巻の煙にむせる俺も蚊も　彰
苦労して我慢の家族花が咲く　五月
我慢の尾切れて遮断機跳び越える　比ろ志
線香を燻らし亡母と話する　哲夫
出来ました捻りに捻った秀句です　洋子
かやり豚父と将棋の遠い夏　和子
片へりの靴に生き方問われてる　美也子
置き物のように定年後の夫　由美子
名文句浮んでやっとペン動く　哲男
ああ煙その内わても行くさかい　美義
この年でなんで我慢をせにゃならん　祐康
縄のれん国士壮士ができあがる　かずお

雑用を自分で創るお節介　キヨミ
煙にまくつもりひとに騙される　ひとみ
我慢する強さも知った笑い皺　ヨシエ
ちぐはぐに見えて心に抱く炎　美籠

川柳塔まつえ吟社(島根)　三島　淞丘報

八月の雲に思い出たぐり寄せ　町紅
広島忌人道雲にある不安　たけし
許す気になって見上げる鰯雲　美智子
雲動く野菜が空を見る猛暑　注湖
私の頭の雲が出てゆかぬ　茂美
鰯雲淡々として悪びれず　畔
反省をすると見え出す向こう岸　桂子
反省はあしたの夢を実らせる　民子
反省をしている虫が泣いている　螢
反省はビールの泡に力借り　幸子
無反省自業自得が待っている　長吉
反省をして一日の灯り消す　英子
気の済むまで海を眺めていよう今は　文子
盆が済み仏あの世についたころ　繭
済む済まぬ思い違いが背を向ける　政子
今日もまた一人芝居を無事済ます　多喜
お笑いが済むと消えてる肩のこり　和歌子
むずかしい話済んだら熱いお茶　ゆき
ひと匙の母の魔法に舌鼓　玲子
人生の匙は投げないただ進む　柳歩
匙投げた子が面倒を見ると言う　昌枝
ひと匙を口に仕合せいい笑顔　ちえこ
一匙の粥姑への距離縮め　芳恵
ゆったりと子らに微妙な匙加減　禮子
したたかな女の舌ももつれ出し　幸代
したたかに百まで生きる設計図　たえこ
強かに生きる術もつ夏の虫　邦代
居残りの月したたかな顔でいる　きみえ
したたかに女を生きたハイヒール　寿代
強かな奴だしっぽが二本ある　淞丘

米子住吉川柳会(鳥取)　渡辺多美子報

あんたがたどこさ山形新潟がたがた　公一
迎え火送り火たいて盆はゆく　登美枝
小さな弁当だ老人になった　未延子
なつかしい顔がお盆に手を合わす　礼子
夏ばての予防にビール飲んでます　紀の治
おばさんからおじさんと言われ腹を立て　宏之
孫が来て置き土産した風邪と寝る　すみえ
寿命伸び苦労いつまでつきまとう　正二
百日紅あげ羽が胡坐狙ってる　ふみ

わかあゆ川柳会(島根)　松本はるみ報

亡母の恩返せぬ胸が疼きます　聖子
方向音痴さっき来た道また迷う　伸子
熟れすぎた隣の柿が気にかかり　ちよえ
気休めの言葉がすぐに効いてくる　かつ子
気休めの濁点がある登り坂　はるみ
この辺でお別れしましょう影法師　好栄
別れには白と黒との詩がある　恵美子
シャボン玉あんな別れがしたいもの　博利
気休めの一言信じ青りんご　清泉

六甲川柳会(兵庫)　伊勢田　毅報

自然の猛威手加減などはしてくれぬ　みつ子
実感を素足になって噛み締める　光久
フランスパン抱えパリジェンヌになった　能子
パン生地はゆっくり夢をふくらます　孝子
パン種が膨らむふわり夢を乗せ　(飯)弘子
初恋はしっかり甘いメロンパン　盛夫
帰省して神戸のパンのうまさ知る　和恵
パンの屑こぼして父は世を憂う　武彦
お腹空き夫婦分けあうメロンパン　繁義
自由という海で泳げと言われても　美穂
長生きは気持ちゆったり平泳ぎ　勤
スランプを泳ぎ切ったらまた山が　保雄
雑踏の中で孤独の立ち泳ぎ　美穂子
おかしいな話す子の目が泳いでる　千賀子
もう誰も乗ってくれない縄電車　楓楽

虹追ってゆく少年の一輪車　無限
日が暮れて砂場に残る三輪車　(山)弘子

一輪車ふらつき生きる己が途　弘
ハンドルを握ると女気が変り　礼甫
古希すぎて免許返上歩きます　忠貞
口車乗るだけ乗せて知らん顔　和郎
フル回転しょせん小さな車輪です　茂
お年寄ばかりが目立つ午後のバス　寿朗
我が家計水をかけれど火の車　洋一
資源です廃車の山に気がつかず　美代子
ミニカーは免許なくても楽しめる　和子
エコカー補助国の財政火の車　浩司
微笑めば何か良い事有りそうな　順子
肝心の話忘れて受話器置く　利子
円高を逆手にとって世界買う　基輔
ボタン穴余って気付くかけ違い　登美子
デカ文字のタイトルで釣るスポーツ紙　武臣
もう嫌だ待ち遠しいよ鱗雲　政一
千切れ雲命の果てをふと思う　毅
哀しみをゆとりに変える萩の道　いわゑ

あかつき川柳会(大阪)　山本　柳昌報

市長より上座に座る敬老日　篤
空っぽのわたしに明日が新しい　朝子
九条がくれた私の青い空　生枝

老人じゃないと鏡に言い聞かせ　いさお
空回り恋の片道切符持ち　克己
叶うかも歳を忘れて恋をする　和雄
健やかに育ったけれど職がない　勝弘
庭の花自然の息吹ひきよせる　キイ
死を前に神が悪戯浮世風　君代
帰らない子等健やかでいるらしい　見清
押しつけられた嫁だがいい才女　シマ子
凧上げる今年のパパと青空と　蕉子
代表選気になる世論と地方選　武
落ち葉マークピンクになったら直ぐ付ける　忠昭
はやぶさが子等に贈つた空の夢　たかこ
健やかに過ごしまっ黒けの九月　隆充
人間のあこがれ空は知っている　太郎
好き嫌いなくて三食昼寝付き　哲男
夫婦共肝斑皺白髪恵美須顔　輝美
青空に愚痴を吐いたら消えてった　敏子
青空をやっと回せた逆上がり　富子
民主と自民あなた違いが言えますか　鈍甲
高齢者存命証書が要る社会　紀雄
目を伏せてもう一と押しを待っている　宏
目が開いた口が動いた飯食える　啓之
老人と言われ意地でも座らない　秀夫
戸籍謄本取りに来ました二百歳　廣子
語り部も老いて限りのある命　房男

財布届けて拇印まで押される　保州
何もかも猛暑のせいにして手抜き　桃花
競り市に柿が並んで秋を盛る　野鶴
しんどそう気位だけで生きている　穏夫
秋の空顔を洗って出直そう　義
神さまの運動場かも知れぬ空　理恵
平和主義押してはならぬ核ボタン　柳弘

西宮北口川柳会(兵庫)　小林　わこ報

さすがボス女だてらと言われても　哲男
さすがだなキッチリ元は取っている　二英
さすがプロ澄んだ音色に聞きほれる　光子
曲がったことが嫌いで損も数知れず　茂
曲がらずに伸びる盆栽松の意地　いたる
疑ったわたしの匙は曲がらない　文子
曲折の半生耐えた尾骶骨　秋果
老いてなお母の確かな針のあと　美穂
かすり傷だけど後から膿んでくる　忠
正面より後ろ姿を誉められる　順子
定年後月に兎が見えました　宏造
筆不精前略と書き後出ない　毅
段取りの手順が悪く後戻り　基輔
後先は見ずに一本道を行く　光久
子離れの後も知らせる現住所　哲子
のちのちに地球を遺す責がある　勝弘

ゆとりなく日日のたつきに四苦八苦　浩司
ゆとりある老後の暮らし甘かった　武臣
早起きは今日のゆとりの第一歩　盛夫
もうひとり座るゆとりがありますよ　歳子
栄転の内示ゆとりの足さばき　早加永
成り行きに任せてみたら運が向き　玲子
目的はないがひたすら歩いてる　野鶴
人生のゴールテープは虹になる　比ろ志
下り坂何故をいくつも抱えこむ　紀乃
あったのになかったように日は過ぎる　弘子
欲しいもの手にしたとたん冷める熱　りこ
いい顔だ賞罰なしと書いてある　直
虫の音へうつらうつらの酔い心地　正和
百過ぎて死んでも守る子のくらし　キヨミ
帰ってこいよ信じて飛ばすブーメラン　わこ
あいづちも笑顔もあって差しむかい　ひとみ
影よりも先に老いたくないつもり　求芽
吉報を若いふたりが持ってくる　千代
若さにはどう転んでも勝ち目ない　美籠

川柳塔すみよし(大阪)　岩崎　公誠報

最大のエコと自転車はなされず　裕之
指切りした太い小指が恐くなる　たかこ
もの言わぬ二人へ時計だけ動く　かりん
自転車で稼ぐ男の太い腿　定子
金髪やロングヘアーもみな浴衣　日の出
自転車が好きで毎日のっている　芳香
もう二度と逆らいませんホントです　まつお
扇風機熱い空気をかき回す　萌
ちらかった机が僕にあうのです　ばっは
指切りが途方に暮れる待ちぼうけ　のん子
始めての自転車父が手を添える　チエコ
ばらばらのおしゃべりよそにバスガイド　妙子
青春の風よみがえるペダル踏む　朝子
ばらばらになって他人の中で生き　賢子
ゲンマンをした感触に溺れてる　美籠
ばらばらと来そうな雲の肩すかし　桃花
口約束ピアスはちゃんと覚えてる　直子
ばらばらになっても過去は語らない　篤子
自転車が今日の機嫌を知っている　太郎
幕引きの時はおそばに居てあげる　(矢)五月
百点が取れず自転車もらえない　シマ子
お気持が行ったり来たりお中元　温子
自転車の老母を見守る息子の目　半銭
動いてる内はためらう躍り食い　克博
雑談に何か掴んだ目の動き　りつえ
自転車にやっと乗れたと得意顔　美世子
針千本飲めと子供に迫られる　舞夢
コスモスに約束がある風の私語　柳弘
きのこ雲阿弥陀坐像が立ち上がる　哲矢
補助輪が外せないまま行くジャパン　昌紀
もう秋という約束が破られて　一歩
妻の名を時々忘れ花を買う　岳人
動き回る孫に疲れた夏休み　蕉子
親と子が積み木くずしたままの愛　遠野
お人好し明日の約束だぶってる　公誠

豊中もくせい川柳会(大阪)　藤井　則彦報

土壇場の友へ返した義理ひとつ　庸佑
背伸びした言葉にかえって来た皮肉　萬的
傷み分け何だか損をした気分　佳恵
右左のたうちまわるレントゲン　幹治
わくわくキャンペーンいっきに秋が走り出す　志津子
ときめきを感じる夢がまた見たい　行兵衛
旅みやげもらうと返さねばならぬ　千恵子
敬老の日にどの家も出さぬ旗　幸雀
お互いに飽きてまたねと皺の顔　宇乃子
駄菓子屋のくじでわくわくしてた頃　雀舎
飽きたとは言えぬ揉み手でもろた妻　歌留多
大声を上げて非力をひた隠す　隆
仕分けされゴミも立場を自覚する　堅坊
憧れの出窓も今は本の山　夢
引越しに猫も思いがある社宅　則彦
わくわくと期待抱えて試着室　美智代
義理の金用意に妻の関所あり　(岩)玲子

飽いた貴方へ思考回路を変えてみる　遠野　蔵子
肉筆で義理を通している賀状　千枝子
秘策あり風穴ひとつ開けにゆく　求芽
ほっといて！ほっとかれてもさびしいが　寿美子
のんびりと雲の悠々見て飽きず　美義
寄り添うて歩く背中にある月日　美籠
相槌をうったら飽きず喋られる　見清
家あける妻よカレーはもう飽きた　巴子
不義理することにも慣れてフィナーレへ　葉子
老農の一日畠に居て飽きず　真理子

川柳さんだ(兵庫)　北野　哲男報

うっすらの視力に心連れ歩く　一子
うっすらと古い記憶が美化されて　弘子
母と子で挑む難関握り飯　淑子
難関に挑みもらったこの切符　歳子
面接に挑む子どもの神頼み　裕美
理屈ぬきほんまにあんた好きやった　順子
理屈より先ず動かせと医者が言い　一良
理屈だけ聞けば遣り手と思うけど　婦美子
青とんぼようやく秋を連れて来た　雅司
娘の彼氏カーテン越しに品定め　喜代子
誉め言葉小遣いよりも効き目あり　りこ
ひと言に揺れているのは私です　ちあき
チャブ台に今朝は並べて箸二膳　和子

蹴った石あしたはそれに蹴つまずき　晃
一本のハワイのこの木タレントに　一泉
もう逝くと頼りにされているらしい　茂山
おぼろ月あなたがとてもきれいです　ひとみ
ぼっくりと長生き願うせめぎあい　朋月
妻に背を押されて踊りの輪　好文
踏み台にされた男の回り道　忠
ひと言が多いきっとへそ曲り　正和
体重を計れば既に秋模様　宣子
口ぐせの暑いを癒す秋の虫　キヨミ
未知数がうっすら浮ぶ母子手帖　美和子
にじむ汗はじける笑いいい日だな　祐康

川柳さかい(大阪)　河内　月子報

金貯めて粘ろこの世が大好きだ　みつこ
簡単に寝返りません駄馬だとて　五月
歓声の熱気みんなで抱き合った　かりん
髪梳かす寝たきりの母抱き起こし　雅明
母さんは値打ちが分かる大根葉　千代
貸農園値段のつかぬ大根でき　扶美代
堅物のネジが弛んでだらけ出し　玄也
安産の上にまとめて二人生み　像山
最後には伝えるつもり鬼になる　舞夢
金出してバージンロード歩かされ　ちゃこ
事故起こしその上保険切れていた　半銭

おいしくてその上安い店が好き　篤子
子はいつかその上を乗り越えてゆく　日の出
生真面目な父とそっくり酒の癖　唯教
何でやねん古稀を過ぎても高い税　公誠
本物の傍には寄らぬ偽ヴィトン　誠一
ばついちがばつ二になった女連　朋月
影武者が年金を取るだまし舟　和夫
公園で待たされ雨も降ってきた　月子
季の移りそっと伝える風のいろ　俶子
ラブレター誤字直されて返される　としお
メールより心伝わる母の文　りつえ
嫁が来たその上子供連れて来た　敏治
子は死んだ解剖させろとは何だ　愿
熱意だけ伝わってくる玉の汗　竜之介
家族旅年に一度は出す預金　綾乃
顔洗う猫に天気を騙される　梓
婆ちゃんが食後にお萩食べてはる　八千代
退職金ガッポリもらい天下り　山彦
よく食べてよく寝その上痩せたがり　好
嫁までが同じ小言を言いだした　時雄
えらい人まだその上に偉い人　冬虹
呆けもせず目も見えちゃんと歩けます　天笑
父親の頑固もコピーした私　進
格安の値札に釣られ騙された　政男

柳界展望

★第24回堺市民芸術祭川柳大会は9月12日、堺市立梅文化会館で154名の参加を得て開催。同人秀句次の通り。

固まりをほぐすと花が咲き出した　河内月子

★第11回香川県川柳大会は、9月25日、香川県社会福祉総合センターで185名の出席を得て開催された。同人の優秀句は次の通り。

白旗は挙げぬ仲間がいてくれる　川崎ひかり

★第18回和歌山県川柳大会は9月26日㈰JA和歌山で開催された。参加者244名。本社同人成績は次の通り。

和歌山市長賞

ケータイも口もOFFですお葬式　新家完司

和歌山市議会議長賞

生きているこんな不思議なことはない　三宅保州

★富柳会創立60周年記念川柳大会は9月25日、富田林市立中公会堂に於て開催。同人秀句次の通り。

神様のたのしみ人間のあした　太田扶美代

深読みをされてるらしい死後のこと　池　森子

▽同人動向△

○楓楽理事長他1名は第11回香川県川柳大会へ出席のため9月25日高松市行き。

○木本朱夏さん（常任理事・和歌山市）のエッセー「川柳雑誌から川柳塔一〇〇〇号への里程」が、番傘10月号リレー放論欄に掲載された。

▼訃　報▲

■中村れんげさん（同人・大阪市）は9月26日逝去。享年89歳。公益社富雄会館に於て通夜、告別式が行なわれ、楓楽理事長、岳人相談役、みつ子相談役他が参列した。（追悼文は12月号予定）

■宮口笛生さん（相談役・奈良市）は10月1日逝去。享年85歳。通夜告別式は花水木会館に於て行われ、天笑名誉主幹、楓楽理事長、岳人相談役、他多数の同人がお別れをした。（追悼文は12月）

▽ご芳志御礼△

○柿花和夫さん（理事・堺市）から母紀美女さんの供養として金一封を拝受。

○島ひかるさん（同人・富山市）から、千号記念として金一封を拝受。

○吉岡きみえさん（元同人・出雲市）から、千号記念として金一封を拝受。

▽お詫びして訂正△

▲10月号、P16下段21行目、力をを→力を。P81得点表下段11行目、笠嶋美恵さん→笠嶋**恵美**さん。P83上段、川柳塔賞、紀の川市・藤原ほのかさん→**岩出市**。P87下段5行目、各地柳壇賞候補作品「**耐えている火種たっぷり抱いている**」の作者は**吉川孝子**さんでした。P89上段3行目、測隠の情→**惻**隠の情。P96上段22行目、散歩道なじみに会えばひと休み　かずみ→**かず**お。以上の方々にご迷惑をおかけしました。謹んでお詫びして訂正します。

▽新誌友紹介△

大阪市　紹介者　**小林　杞香**

神夏磯典子

鳥取市　紹介者　**加藤　永子**

中原　諷人

米子市　紹介者　**湯浅　久司**

鈴木　公弘

鳥取県　紹介者　**田貝恵美子**

鈴木　公弘

大阪市　紹介者　**川田　兵吾**

加川　靖鬼

出雲市　紹介者　**黒目　英男**

伊藤　玲子

明石市　紹介者　**北川　政一**

山口　光久

新同人紹介

西谷悦子

―天笑・楓楽・菜美・公弘推薦

お知らせ

□川柳塔バックナンバーを差し上げます。ご希望の方は事務所までご一報下さい。ただし号数の指定はご遠慮下さい。尚、送料はご負担願います。

臨時常任理事会＝9月27日㈪出席18名。千号記念大会関連最終確認①同人総会②記念句会③懇親会④その他

次回＝10月26日㈫PM13時30分～

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 わかやま 吟社	14日(日) 午後1時開会 頑張る・レモン・砂浜 ので・から(順接の接続助詞)	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188—14　川上大輪
豊中 もくせい 川柳会	15日(月)午後1時40分締切 尽す・神経・ちゃんと・自由吟	豊中市中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
川柳 さんだ	16日(火) 午後1時から 透明・菊・四季・ほっこり 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5—2—4　堀　正和
岸和田 川柳会	20日(土) 午後2時締切 すきま・たおれる・手ごわい トリオ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳 藤井寺	21日(日) 午後2時締切 まあまあ・家具	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	21日(日) 午後1時半締切 世話・自負・脚色	淡輪17区集会所 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
松露 川柳会	22日(月) 午後7時半締切 大根・ホテル・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	22日(月) 午後6時から 細々・叱る・満腹・つなぐ	住まい情報センター（大阪くらしの今昔館・5F） 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	26日(金) 午前9時半から ボーナス・瞳・義理・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0834 八尾市萱振町1-16-1-501 田邊浩三
川柳塔 すみよし	27日(土) 午後2時半締切 夕焼け・進む・プラン	住吉区民センター　南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三幸 川柳会	27日(土) 午後1時から あべこべ・豊・気合	和歌山商工会議所4階　第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7—17　古久保和子
はびきの 市民 川柳会	28日(日) 午後2時締切 紅葉・口実・トラブル・初心	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
川柳 ふうもん 吟社	28日(日) 午後1時より 格下げ・キーマン・ゴリ押し	鳥取駅2F　シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205—45　萩原美雪
京都 塔の会	29日(月) **吟行** ○○心・運ぶ・効果	集合＝阪急「桂」駅西口　10時30分集合 行先＝大森サン・パレイ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328—202　都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

11月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳ねやがわ	**第34回寝屋川市民川柳大会** 3日(祝日) 午後1時締切 記念・割る・糸口・時効・ノウハウ・家族	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9―9　高田博泉
川柳塔な　ら	4日(木)　**吟　行** 戯れ・涙・デジタル	会場＝京都「レイクフォレストリゾート」 集合＝JR奈良駅前　9時50分　近鉄奈良駅前10時 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北川柳会	6日(土) 午後1時開場 割る・裏・パターン・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	6日(土) 午後1時から 記憶・柔らかい・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603　池　森子
倉吉川柳会	6日(土) 午後2時締切 カナ・線路・噛む	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
西宮北口川柳会	8日(月) 午後1時開場 増える・名・わかる・自由吟	会場＝エビータの森ビル　2階 阪急西宮北口駅北へ徒歩6分 〒662-0841 西宮市両度町2―19―515　山本義子
川柳あまがさき	9日(火) 午後2時締切 品・寸前・のこのこ・自由吟	尼崎女性センター　トレピエ　阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8　山田耕治
ほたる川柳同好会	9日(火) 午後1時半締切 脇・はまる・ふうふう	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2―4―1　水野黒兎
川柳塔さかい	12日(金) 午後1時から とりわけ・大物 「たなか(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
あかつき川柳会	12日(金) 午後2時締切 悪人・猫・忘れる・時事吟	ねむかホール（新谷町第2ビル3階） 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から南へ2分 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102　森村美花
川柳大阪	13日(土) 午後2時締切 けど・隣・豪快	長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔まつえ	13日(土) 午後2時締切 全部・頭・呟く・ちぐはぐ	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388　安達幸子
川柳塔みちのく	13日(土) 午後5時締切 歳暮・手術・どきどき	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53―1　小寺花峯
川柳塔打　吹	13日(土) 午後1時から 炭・導く・治す	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637―3　牧野芳光
八尾市民川柳会	14日(日) 午後2時締切 供養・登・恵む・雑詠	八尾神社内　西郷会館 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生

編集後記

★桐一葉猫も座禅の向うむき　　薫風

★大会の余韻冷めやらぬ翌日から山本希久子さんの助力を得て十一月号にかかる。あいにく参加されなかった同人・誌友の方々に少しでも大会当日の雰囲気を味わって頂けたらと思う。

★同人総会の記事を水野黒兎さん、表彰式記念大会の模様を新家完司さん、繁雑な参加者名簿を西出楓楽理事長、籠島恵子、原田すみ子、松尾美智代さんらが整理。入選句の整理は江島谷勝弘、三宅保州、桒原道夫さんらがパソコン入力、印刷所へメールで原稿を送る。

★大会から最終校正日の十八日まで正味一週間。時間との闘いである。パソコンの威力をしみじみと痛感。こうして二十七日発送、皆さまの手に渡る。あとは誤植がないこと、大きなミスがないことを祈るのみ。枕を高くして眠れないことはいつもと同じであるが…。

★今号の巻頭言は十月九日の同人総会で承認された、小島蘭幸新主幹。川柳塔同人吟は締切りが九月十五日だったため、選句は河内天笑前主幹というねじれ現象が起きているが、次号からは蘭幸主幹の選になります。

★十数年ぶりの円高の最中旅行会社から案内が舞い込む。直近の海外旅行は三年前の春のイギリス。携帯の待ち受け画面はタワーブリッジ。編集に追われ夕焼けさえゆっくり眺めたことのない日々、待ち受け画面を覗いて心を慰める。落ち着いたら海外は無理としても青春18切符で鈍行に乗り、車窓を流れる風景をぼーっと眺めていたい。　（朱）

◇刑法の適用を受けるべき事件に関し、公訴の提起ができるのは検察官である。検察官は刑法に触れる犯罪を徹底的に捜査し、真相を暴き出す義務と権利がある。言わば公益の代表者ともいわれるのである。

　故に、検察官は正義の味方だと思われている。

◇所が、怖いこわい前代未聞の不祥事が起きてしまった。

　郵便不正・偽証明書事件で、証拠品として押収したフロッピーディスクを検察官が一部改ざんしたいた事が判明したのである。物的証拠は公判の鍵を握る最も重要な物だ。検察官は公益の代表者として法と正義に生きて欲しい。

◇我が編集部では誤字、脱字等の校正はするが原文の改ざんなど到底考えられない事である。　（光）

▽一千号記念大会も盛大に終わり新たな一歩を踏み出しました。これからも川柳塔が皆さんに好かれ発展するよう願っています。

▽世の中は今高齢化が進み元気な老人が増えていますが、何処の句会も若い人の参加が少なく頭を悩ませているのが現状です。

▽小学校で川柳が教科書に載るようになり、全日本川柳大会でも小中学生の投句が沢山あり喜ばしいことです。それをきっかけに成人してから川柳に親しんでもらえればいいのですが…。

▽定年後の方、子育てを終えた主婦は勿論若い人達にもっと参加を呼び掛け川柳人口を増やしたいものです。川柳に誘っていただいてよかったと、言う声を聞き関心のある方は大勢います。これからもPRに努めていきたいものです。（能）

□検事の犯罪という前代未聞の事件に仰天する。事件の発端が「第三種郵便物」という事で見過ごせない。

□弊誌も昭和四十一年一月に第三種の認可を取得、先の九月号では一千号に達した。月間の発送部数や発送方法、更新手続き等、面倒な約束事も多々あるが、通常の半分以下という料金に蟻が群がるのであろうか。

□千号記念大会の「塔まつり」を十日後に控え、担当役員は準備に忙殺、事務所は準備品等で足の踏み場もないが、当日お目にかかれる、あの方この方を思い浮かべてわくわくしている。この号が出る頃には、宴の後の疲れでぐったりしているのであろうが・・。

□猛暑の後遺症か、今年は一週間ほど遅れて彼岸花が咲く。朝夕の温度差が広がる時期、皆様お大事に。（富）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　　　」発表（1月号）　地名　都道府県市　姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

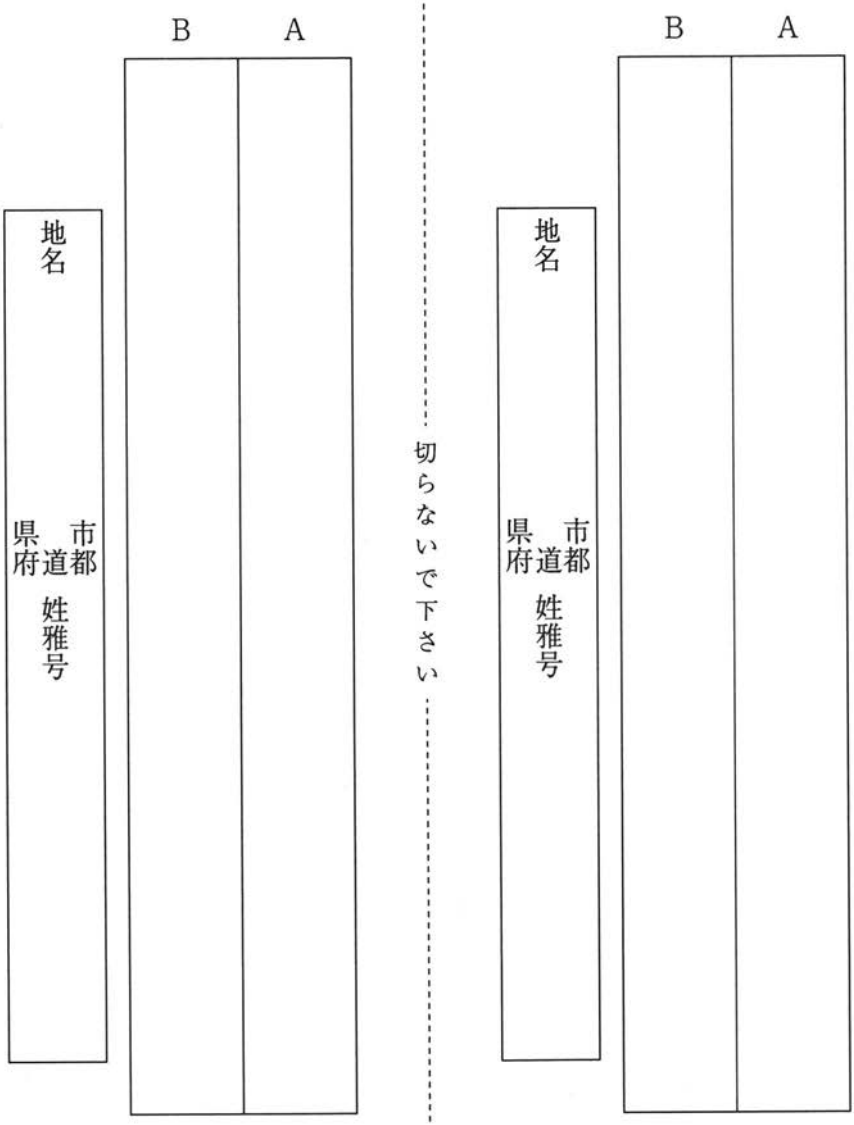
投句先　〒543-0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「平　ら」　（11月15日締切）

1月号発表

山本希久子　選 ── 共選 ── 三宅　保州　選



左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌**新規**購読申込書

年　月　日

氏名	
住所	〒　－
電話	－　－
紹介者	

（　）年　月から半年　5000円
（　）年　月から一年　9800円
} 該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201
川柳塔社（電話　06－6779－3490）
振替　00980－4－298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

柳友よ

川柳の畑を耕す男

一本の燐寸が
燃えつくすまでに寒さや空腹が
せまって來る迄に
わたしたちは
一句を遺しておかねばならぬ。

（「巻頭言」、大14・11「川柳雑誌」No.22）

個人用

年賀広告　原稿台紙

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1／9頁　1／6頁　1／3頁　2／3頁　1／2頁　1頁

（ご希望の大きさを○で囲んでください。）

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

姓・雅号	住　所	電　話
	〒	（　　）　　－

川柳など掲載希望事項

送付先

〒543－0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201

川柳塔社

本社11月句会

とき　11月5日㈯ 13時開場・14時締切
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。
ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
おはなし「私と川柳」　井伊東吉
席題「　」　岩佐ダン吉　選
兼題「盛り場」　長井善純　選
「差　」　吉川寿美　選
「きっちり」　北野哲男　選
「同　感」　木本朱夏　選
「省　く」　小島蘭幸　選
（各題2句以内）
会費　1000円　投句料　500円（切手可）

本社12月句会
7日（火）午後13時から
兼題「家計簿」「　声　」「テーマ」
「街　角」「怠　る」

作品募集

1月号発表（11月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸　選
水煙抄（8句）　西出楓楽　選
愛染帖（3句）　新家完司　選
檸檬抄「平　ら」（2句）　三宅保州　共選
山本希久子
一路集（3句）「養　う」　三好専平　選
「太　陽」　緒方美津子　選
「純　情」　黒田茂代　選
初歩教室「救　う」（3句）　鈴木公弘　担当

2月号
檸檬抄「極める」
一路集「太　い」「豆　腐」「リスト」
初歩教室「　影　」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

第29年度　夜市川柳募集

第6回「匂　い」　金　築　雨　学　選
ハガキに3句　**11月末日**締切
投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**川柳塔さかい**

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇一〇年（平成二十二年）十一月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス　http://www.senryutou.com/

昭和四十二年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十三年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇〇二号　川柳塔　十一月号　定価　円（送料　八十四円）

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの
つきごま

長い間親しまれてきたオニザキの「すりごま」は、この度「つきごま」に名称を変更いたしました。
オニザキのすりごまは、元々すり鉢ですったゴマではなく、杵と臼を使った杵つき製法で出来た「すりごま」です。
今までと変わらぬ、風味豊かな味わいをご堪能ください。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050

ご宿泊　10,500円～
ご宴会　15名以上からの受付
※送迎可、片道1時間迄送迎範囲あります。

『春夏秋冬溢れる自然
吟行句会に最適』

牛滝温泉
いよやかの郷

ご予約・お問い合わせ
TEL 072-479-2641
〒596-0114 大阪府岸和田市大沢町1156
http://www.iyoyaka.jp/

いよやか　検索

川柳に
出逢える温泉郷

■（土）（日）のご利用は混み合いますのでお申込みは早い目に。
■ 岸和田川柳会　井伊東吉（TEL 072-444-3227）にご連絡頂ければお取次ぎ致します。

雑誌 05703－11